



ラストーン

～失われた都より～

2

segakiyui

1.花祭

「ん...う」

ユーノはうなされている。

「...いじよ.....ぶ」

夢の中で引き戻されたのは、初めてカザドに襲われた夜。

逃げ場もなく、ただ家族を守るために闘うことを求められた日。

「大丈夫.....だから.....心配.....しない...で...」

喘ぎながら笑う。

精一杯の虚勢はいつも成功した。

誰も気づかない、ユーノの奥深くに抉られた、深い傷の在り処を。

「レアナ姉さま！」

大好きな姉の姿を見つけて、ユーノは満面の笑みで駆け寄り、すぐに気づいた。

レアナの美しい眉のあたりに心配そうな影が漂っている。

「どうしたの、姉さま」

「変な人たちが来てんの」

10歳のセアラが生意気な口調で言い放った。

「だめよ、セアラ」

レアナが柔らかくたしなめる。

「お父さまのお客さまよ」

「変な人は変よ」

14歳のレアナの分別をセアラは聞き入れない。

「.....そうだな」

ユーノが物陰から伺った一群の男達は隣国カザドの紋章をつけている。謁見に際して剣を外していないのが不安だったが、セレドの親衛隊はとがめようとしなない。

3人は知らなかったのだが、そのころ日ごとに美しくなるレアナの噂を聞き付けたカザディノが、レアナを『副妃』として迎えたいと言ってよこしていたのだった。単に使者だけではなく武装した兵も同行させたのを見ても、相手の意図が強圧的なのはわかった。

さすがのセレディス4世も、仮にも一国の皇女を『正妃』ならまだしも『副妃』などとはとんでもないとはねつけ、その場では無理を通すなど言い含められていたらしく、使者達は一晚留まることもなくすぐに帰還した。

だが、実はレアナを望むことさえ、セレドに警戒されずに入り込むための手段だったとは、その夜にわかった。

「？」

ふいとユーノは目を覚ましていぶかった。

闇に妙な気配がある。

7歳から皇宮の作法やダンスよりも熱心にゼランに剣を学んでいたのは偶然ではない。悪意はないとは言え、母親譲りの華やかな容姿を持つ姉妹と繰り返し比べられて、自分が外見では遥かに劣ることを早くから理解していた彼女は、自分の未来に誰かが寄り添うことを早々と諦めつつあったのだ。

「.....」

ひたひたと夜の向こうから迫ってくる殺気に瞬きして、ゆっくりと体を起こす。枕元に忍ばせていたのは覚えつつあった短剣、それに手を伸ばしたとたん、

「でええいっ！」

部屋の隅に潜んでいたらしい影が剣を突き出してきた。

かろうじて一太刀目は躲したものの、すぐに繰り出された二太刀目がざくりと右腕を削いでいく。

「っっ！」

(母、さまっ)

痛みに声も出せずに心の中で悲鳴を上げたユーノの手から、落ちた短剣がからからと軽い音をたてて床を滑る。痺れた右腕を押さえる間もなく、刺客は次の一手を振り上げてくる。

(殺される?!)

咄嗟に掴んだシーツを相手に投げ付けて視界を遮り、落ちた剣を拾ってそのまま、のしかかってきた相手の胴へシーツ越しに突き入れる。

「ぎゃあっ」

まさか幼い子どもが反撃してくるとは思ってもいなかったのだろう、叫んだ刺客が体を引いて剣を抜こうとするのを、ユーノはなおも突き込んだ。

一度傷を負わせたなら、そこを必ず狙いなさい。一番守りが弱くなっているうえ、深手になれば勝機ができる。

脳裏に過るのはゼランの声だ。

相手とユーノには圧倒的な体格差がある。ましてや、既に右腕を傷つけているユーノは次の攻撃の術がない。

(剣は両腕で使えないとだめ、なんだ)

歯を食い縛りながら、ユーノは思い知る。必死に体ごと刺客にぶつかり続け、押し込み続ける。隙

間ができてしまえば最後、手負いの敵は必ずこちらを仕留めにくる。

(離れるな、離れちゃやられる)

刺さった短剣の向こうの感触は、食卓に並ぶ肉を刺した感覚より遥かに鮮烈、ともすれば蠢く体の動きに剣が呑み込まれて跳ね飛ばされそうになる。押し返す力も半端ではなく強い。

生きてるんだ、とぞくぞくしながら思った。

(生きてる命を、突き刺している)

「く、あ、あ、あっ」

進むように叫んだのは流れ落ちてくる涙を堪え切れなくなったからだ。

剣を使うということは、人を殺すということは、これほど全身痛いものなんだ。ゼランに教えてもらった型なんて、ほんの入り口に過ぎないんだ。今こうして相手の胸に突き出し続ける剣を支える手が震える。体もがくがく震える。シーツを濡らしてだらだら染み通ってくる血の生臭さに吐きそう、それでも力を緩めれば、ユーノが死ぬのは確実に。

(いや、だ)

ぎゅ、と唇を噛んで、なおも全身で突っ込んだ。

「ぐ、ああっ！」

絶叫が耳を圧する。痙攣した刺客が剣を落とし、がつつとユーノの肩を掴む。その十本の指が食い込む感触に、泣きながらユーノは剣を突き上げた。

「がはっ」

ばしゃっ、と被ったシーツに血が降った。同時に男が崩れてきた。肩を掴まれたまま巻き込まれ押し倒されそうになって初めて、剣を引き抜き飛び退る。

いや、ユーノは飛び退ったつもりだったが、実際は後ずさりしてシーツに引っ掛かり、腰から背後に転がっただけ、それでも空いた空間にどう、と音をたてて刺客の体が丸太のように倒れてきた。

咄嗟に剣を構えたが、もうピクリとも動かない。

「う...っ、...っは...っは」

喘ぎながら睨み付けた刺客は男だった。

黒づくめの服装、紋章はどこにもないが、引きつり白目を剥いた顔には覚えがある。昼間に謁見を申し出た一人だ。

(カザド)

う、わあっ、と皇宮の別棟で声が上がって、はっとした。

(姉さま、セアラ...っ)

跳ね起きて立ち上がろうとするのに、脚が震えて立てない。脚だけではない、自分が今にも溺れかけたようなせわしい息を吐きながら、ぼろぼろ泣き続けているのがわかる。

男はシーツに包まれたまま、どんどん熱気を失っていく。少し覗いた血まみれの指が固く白くなっていくのから目を逸らせなくて、それを見ているだけでも吐きそう、ユーノは喉を鳴らした。

「う...、ううっ」

自分の体を、強ばって短剣を放せなくなっている右手で抱える。左手で右腕の傷を押さえつけたが、痛みにびくりと震えてしまって、身を竦めてまた泣いた。

冷や汗が額から眉間を通して流れ落ちてくる。きつく唇を噛みしめて、口の中に自分の血を吸い取って、ようやく少し我に返った。

のろのろと這いずって死体から離れ、震えながらガウンを引き寄せ右肩から羽織る。どこに敵が居るかわからない。次に同じ場所を狙われたら、もう気力も体力ももたない。

(痛い.....母さま.....すごく...痛いよ)

誰も来てくれないのは、別棟の騒ぎで手一杯になっているのだろう。そこにきっと父母も居る。どんどん冷たくなってくる右腕の手当てしてもらえないはずだ。痛かったろう、一人でよく頑張ったと慰めてもらえるはずだ。

「ひ...っう」

大声を上げて泣きたいのを堪えて、ユーノは部屋をよろめきでた。無限に続くような廊下をのろのろと歩いて、ようやく父母の寝室にたどりつく。

「かあ...さ」

ほっとして顔を上げたとき、その扉の中から飛び出してきた人影に息を呑んだ。もう右手では痺れて持てなかったから左手に持ち替えていた剣を、かろうじて引き上げて構えると、

「ユーノ様！」

「ぜ...らん...」

親衛隊の隊長は豪快に笑った。

「おお、見事防がれたのですね！ さすがはユーノ様！」

「あ.....う、ん」

「それでこそユーノ様です！ 私は皇をお守りしに参ります、皇妃さま方をお頼みじますぞ！」

「え...」

茫然とするユーノを置き去り、ゼランはあっという間に広間の方へ駆け去った。

(母さま、方...?)

出血のせいか一瞬暗くなった視界を振り払い、ふらふらしながら寝室に入ると、こちらに背中を向けて跪いているミアナ皇妃が居る。

「母...」

よかった、これで痛い、ましになる。

呼び掛けるとぎくりと背中を強ばらせて、ミアナ皇妃が怯えた顔で振り返り、ユーノは目を見開いた。ミアナの優しく庇った腕の中には、泣きながらしがみついているレアナとセアラが居る。

「ユーノ」

ミアナがぱっと顔を輝かせて名前を呼んでくれ、次にはきつと自分もその腕で抱え込んでくれるのだろう、そう思って微笑みかけたユーノの耳に、すがりつくような声が届いた。

「来てくれたのですね」

「え...？」

「あなたが居てくれれば安心です。お父さまとゼランが戻るまで、側で守って下さいね」

「あ」

何を言われたのかわからなくて、それでも相手の瞳が注がれているのは、血に染まったガウンを引掛かけて左手に短剣を煌めかせている、その自分の姿で。

(でも、母さま)

「あなたが剣を習っておいてくれてよかった。ゼランもユーノさまなら大丈夫、そう言い聞かせてくれていました」

日頃ドレスもダンスも嫌いだと言って好まなかったあなただけけれど、今こそその素晴らしい腕を見せてください。

少女のように微笑むミアナの目には、安心しか広がっていない。

(でも、私、怪我を)

「母さまあ！」

セアラが泣きじゃくってミアナの胸に顔を押し付ける。

「怖い...」

レアナが震えてミアナの腕にすがりつく。

その二人を抱き締めるミアナも、青ざめた顔でユーノを見上げている、まるで保護を求めるように。

「うん.....わかった...」

(私だって)

「大丈夫だよ.....私、剣は...うまいから」

ぐらりと揺れかけた体を堪えて背中を向ける。

(私だって.....母さまの腕に守って...ほし...)

「っ」

零れ落ちそうになった涙をぎゅ、と唇を噛んで目を開いた。

ほのかな明かりが灯る室内とは逆に、ユーノの前には黒々とした闇が広がる。

けれど、その闇から逃げるわけにはいかない。後ろには母が、姉が、妹が居る。

(がん...ばろう)

せめてセレディス皇が戻ってくるまで。

(もう...少しだけ.....がんばれば.....)

きっとゼランも戻ってきて。

右腕の痛みが焼けついてくるように強くなる。めまいがして、吐き気がする。

(たおれちゃ...だめだ)

倒れても、どうにも、ならない。

(もう、少し、だけ)

「っ」

短剣を落としそうになる。ふらついた体を堪えて崩れかけた足を踏みしめる。霞む視界を見開いたとたん、廊下の向こうから走り寄ってくる父親とゼランの姿を見つけた。

「あ」

よかった、これでようやく休める。

「ユーノ様！」

「ユーノ！」

「父さま、わ、たし」

ここを怪我して。

言いかけたとたんに、厳しい表情でセレディス皇が言い放つ。

「よし、ここはもういい。ゼランと一緒にあちらを見回ってくれ」

「...え...？」

「見張りが倒されていて人数が足りぬ、頼むぞ」

「さ、ユーノ様、お願いしますぞ！」

「う...ん」

ゼランが追い立てるように声をかけてくる、そのユーノを振り向きもせずにセレディスは部屋に入っていく。父さま、と叫びながら抱きついたらしいセアラをよしよし、と抱き締めるのを視界の端に、ユーノはゆらりと顔を背けた。

「ユーノ様、お早く！」

「わか...た」

(父さまが.....悪いんじゃない)

一番弱いものを守るのは当たり前だ。

(母さまが.....悪いんじゃない)

ユーノはいつも、剣を習っているのはみんなを守るようになるため、そう言い張っていた。

(姉さまや.....セアラが.....)

悪いわけが、ない。

「そちらを！ 私はこちらを回ります！」

「...うん...」

再び背中を向けるゼランに、崩れかけた足下をкаろうじて保った。揺れた体からガウンが滑り落ちる。ぼたり、と重い音をたてて床に広がったそれが、じわじわと黒い染みを広げていくのをぼんやりと眺めた。

「まわ...らなきや.....」

壁に手を当て、のろのろと歩き出す。一步ごとに視界が揺れる。

「私...しか.....いない.....だし...」

ならば、ユーノは。

突然込み上げてきた激情を堪え切れずに立ち止まる。

ユーノはどこへ行けばいいのだ？ 右手を動かさないほどの傷を負い、初めて人を殺してもう壊れそうなのに、それでもどこでも休めない。

それとも、ユーノは強いから、誰にも守ってもらう必要などない、そういうことなのか？

(でも、私)

ふっと意識が遠のいた。

(私も、限界、なのに)

体がぐずりと得体の知れないぬかるみに落ちそうになって、眉を寄せて右腕を握る。

「つく」

ざく、と再び蘇った痛みに対し我に返った、次の一瞬、背中に巨大な氷を当てられたような感覚に息を呑む。

殺気。

「わ、うっ！」

いきなり右肩から左の腰へ灼熱の痛みが走った。仰け反ったユーノの体を扶けるように食い込んでくる金属が冷たくて熱くて、とてつもなく、痛い。しかも容赦なく深さを増しながら抉られる。

「つつ、つつ、つあああああっ！！！」

父さまとも母さまとも呼ばず、ただ絶叫だけを響き渡らせながらユーノは崩れ落ちる。喉を突き上げる悲鳴は切れ切れに、闇の彼方へ吸い込まれていく。

(う、あ、あ、あああああっ)

それでも、誰も来てくれない。

(あ、あ、あ、あ……っ)

差し伸べた手は、空を切って。

視界が、暗転、する。

(ユーノ！)

だ、れ…。

「ユーノ！！」

「つつ」

大声で呼ばれて揺さぶられ、ユーノは目を開けた。

「どうしたっ、ユーノっ！」

「あ…あ」

まだ半分夢の中に居るようで、体中が汗に濡れている。

(あ、しゃ)

荒い呼吸を繰り返しながら、自分を覗き込む相手を見上げた。

心配そうにひそめられた眉の下、見開かれた瞳が薄闇に煌めいている。背後の窓から差し込む月明かりを受けて透明に輝く紫の光が、幻の楽園のように美しい。

「大丈夫か？」

「…ごめ…ん…」

肩を掴まれていたのを身をよじって避けると、アシャははっとしたように手を引いた。髪をかきあげる、その仕草にきらきらと金髪が光を跳ねる。見惚れかけて、ユーノは呼吸を整えながら眼を閉じる。

「夢を……見てた…」

背中が今切り裂かれたばかりのようにずきずきする。

(もう、5年も前なのに)

体がまだ震えていた。腑甲斐無さに舌打ちしながら、それでもとっさにすがりつきそうになった手で自分を抱き締める。

あの夜。

ユーノが倒した刺客はカザドの紋章をつけていなかった。謁見した男だとユーノは証言できなかった。傷のために高熱を出して寝込んだのだ。

セレディス4世はカザディノに襲撃を受けたことを訴えたのだが、相手方は知らぬ存ぜぬで押し通し、証拠もないまま事を荒立てるなら、逆にセレドを制圧すると脅してきた。沈黙するしかなかったセレディス4世に、事実、それから1年以上、カザディノは表立って手を出してくることはなく、レアナを望んだことさえ忘れたように振る舞った。

セレディス4世はまず何よりもレアナの安否を気遣った。これ以上問題を大きくして、セレドに攻め込まれ、レアナを無理矢理攫われるぐらいならば、穏やかに事をおさめたほうがよい。そう判断した。

ユーノが回復してみれば、セレドは何ごともなかったように平穏を取り戻していた。あげくに、カザドの刺客などではなく、流れ者が紛れ込んでの騒ぎだったのではないか、そう結論されて、ユーノは何も言えなくなった。

倒した刺客がいつの間にか誰かに運び出されていたのも災いした。

皇宮に賊が侵入したということの方が、隣国カザドがセレドを狙っていると考えるよりは、遙かに人々の心に安心をもたらしたということだ。

ただし、皇宮の親衛隊は人数を増やされ、ユーノも行動を共にすることとなった。

あの夜の記憶は鮮烈な炎になって、何度もユーノの眠りを妨げた。悲鳴を上げて飛び起きる夜を繰り返し、その悲鳴で誰かを起こさなかったかと震えながらまた寢床に蹲る。

思い出したように痛む傷跡に耐える日々は長くは続かなかった。

水面下で、カザドは執拗に襲撃をかけてくるようになったのだ、まるでユーノを弄ぶように。

そして、それを訴えるべき相手はユーノに残されていなかった。誰もが、そんな脅威はあり得ないと、親衛隊隊長のゼランまでそう信じたがっていたから。

安寧が長く続かないのはわかっていた、が、ぎりぎりまでしのぎたかった。偽りの平和でも守りたかった。

ラズーンから使者が来て、ユーノが発つしかなかったから、ゼランには詳しく事情を打ち明け、守備を固めるようには頼んできた。

だが、太古生物が復活しているような状態の中、カザドの動きもそれに連動しているように思えて、残してきた家族が不安になった、それが夢の引き金を引いたのだろう。

「何の夢だったんだ」

アシャがベッドの端の腰を降ろして、ユーノは眼を開けた。

「ひどくうなされていた」

「なん...でも.....な...っ」

指を伸ばされ、汗に濡れて張り付いた額の髪をかき上げられて、思わず顔が熱くなった。

「汗びっしょりだ」

「小さい頃に見た.....魔物（パルーク）の.....夢だ」

優しい指先が布でそっと汗を拭ってくれるのに、目を伏せる。

（気持ち...いい）

誰もこんな風に慰めてはくれなかった。うなされたユーノを案じて側に居てくれなかった。

思わず吐息について、少しの間、アシャのなすがまにまかせる。

自制がどんどん脆くなる。誰も助けてはくれないのだ、一人で生き抜くしか術はないのだ、そう思い知らされた切なさが胸に迫る。これからも自分が生きるためには、こうして自ら敵を屠り続けるしかない、そういう思いを越えて、アシャに期待しそうなになる、守ってくれるのではないかと。

く、とユーノは唇を噛んだ。

（しっかりしろ）

そんなことは、あるはずがない。

（アシャは、姉さまを）

あのおやかで美しい人を求めている。

目を開けて頬から首へ滑っていきこうとしたアシャの手を押し止めた。軽く握って押し遣りながら、笑いかける。

「ごめん、起こしちゃった」

ちかり、とアシャは瞳を光らせた。

「17にもなって、化け物の夢で騒いでりゃ世話ない、そう思わない？」

「嘘つきめ」

「え...？」

アシャが険しい顔で睨み付けてきて戸惑う。

「何が？」

「心配しないで、と言ったぞ」

「っ」

「魔物（パルーク）が心配してくれていたのか」

「え、えーと」

しまった、とひやりとする。そんな寝言まで口にしていたとは思わなかった。

「ユーノ？」

「あ、だから、つまり、その」

「...ユーノお...」

口ごもっていると、急に寝ぼけた声でレスファートが呼んだ。目を擦りながら起き上がり、

「なに、さわいでるの...」

「あ、ごめん、レス」

起こしちゃったね、と急いでそちらに笑いかけたが、頬に当たるアシャの視線がひどく痛い。

（ごまかせ、ないよね）

「ユーノ」

伸びてきた手に身を竦めた矢先、レスファートがベッドを滑り降りた。そのままとことこやってきて、アシャの前に立ち塞がり、するするとユーノのベッドに潜り込んでくる。

「ぼく...ここでねる...」

「うん、そうだ、それがいいよ、レス」

ユーノはほっとしてアシャを振り向いた。

「アシャも寝なよ。明日お祭りだろ。楽しもうよ」

一気にまくしたてると、アシャが伸ばした手を溜め息まじりに降ろした。軽い舌打ちとともに、がしがしと乱暴に金髪をかき乱しながら背中を向ける。

「いじっぱり」

「え？」

「.....わかった、今夜はもう寝る、けれど」

肩越しに投げてきた眼は、次は逃がさない、そういう強さで光る。その目をまっすぐ見返して、ユーノはにっこり笑った。

「起こしてくれてありがとう」

「.....おやすみ」

「うん、おやすみ」

部屋のもう片隅のベッドに背中を向けて潜り込むアシャに、ユーノもレスファートを抱きかかえて目を閉じる。

それでも、ずっと眠れずに、やがて響き出したアシャの寝息を聞いていた。

「花祭だ！」

「花祭だよおっ！」

街中が窓という窓を全て開き、そこから色鮮やかな花々をまき散らす人々で沸き返っている。

「す...ごい」

宮中で広大な庭園も見ている、飾られるために持ち込まれる美しい花も知っているはずのレスファートやユーノまで、空中から舞い落ちる花弁に茫然としている。びっくり大きな目を見開いている二人に、アシャは苦笑しながら説明した。

「シェーランの花祭は有名なんだ」

「そうなの？」

「今回のはまだ小規模みたいだが、全盛期にはこのあたり一帯から花を買い集めて、あちこちで花屋台がたった」

「ぼく、こんなにたくさんの花って見たことない」

「ボクもだ」

ユーノは興奮するレスファートに頷き返すと、真隣を通っていく花を満載した花馬車に乗った娘達がくすくす笑って互いを突きあう。

「？」

ひょいとそちらへ目を向けたアシャに、きゃ、と小さな声が上がって、娘達が頬を染めた。ユーノとレスファートもそちらを振り返ると、きゃああ、とはしゃいだ声が響き渡る。ぎよっとするユーノに、娘達が口々に叫ぶ。

「剣士さま！」

「こちらへどうぞ！」

「私達の花馬車へどうぞ！」

負けじと周囲の馬車から一斉に声が呼ばわった。

「剣士さま！」

「いらっしやって下さいませ！」

「剣士さま！」

「あ、アシャ」

うろたえた顔でユーノが側に寄ってくる。レスファートは意外に慣れたもので、にこっと笑いながら、後で、と鷹揚に流しているのと対照的だ。

「何なの、一体」

「みんな知ってるんだろう、お前がレガを仕留めたことを」

「み、みんな？」

「朝、ろうかまで話してるのもきいたよ？」

「えええ」

ユーノは引きつった顔になって、まいったなあ、と眉を寄せた。周囲に求められ慕われているのは明らかなのに、それで返って不安を感じてしまうらしく、緊張した顔でアシャに身を寄せてくる。

（まったく、こいつは）

仮にも皇族だったのだから堂々としていればいいものを、と思いつつも、めったに頼ってこないユーノが心細そうに擦り寄ってくるのは気持ちがいい。ついつい笑顔で肩に手を回し、気にするな、と話しかけようとしたとたん、がしっと太い腕にユーノが抱えられてむっとした。

「まいるこたあ、ない！」

「イルファ」

もうどこかでごちそうになってきたのか、赤い顔になったイルファが上機嫌でユーノの肩を抱きかかえて豪快に笑う。

「娘達は大喜びだぞ、『生贄』から救ってくれた剣士として、お前を待っている！ よりどりみどりでだぞ！」

しかしまあ、これだけの娘を隠しておくのも大変だっただろう、と感心しているイルファから、アシャはさりげなくユーノを引き寄せた。

「花祭もここしばらく開けなかったそうだしな」

「そうなの？」

「それに！」

どん、とアシャを突き飛ばすようにして、またイルファがユーノを抱えた。

「今日は俺達のためにわざわざ開いてくれたのだ、楽しまんと思いだろうが！」

「本当、だ、な！」

ユーノの首を抱えているイルファの腕を押し退けてアシャはユーノを引っ張った。

「ほら、こっちだろ、広場はっ」

「おう、そっち……おい、何だ？」

引き剥がされたイルファが、がしっともう一度のしかかりかけて、アシャに寸前受け止められ、不愉快そうに目を上げる。

「何で邪魔する？」

「邪魔などしてない」

「邪魔してるだろうが」

「俺が腕を上げたらお前が引っ掛かってきたんだろうが」

「そうかあ？」

「そうだ」

ユーノが呆気にとられた顔で見上げているのは知っているが、イルファがべたべたユーノに触るのがどうにも苛立たしい。細い体が一気に押さえ込まれそうで、きり、と鋭いものがこめかみを走った気がしたぐらいだ。

「あ、ユーノ、あっちあっち！」

「あ、うん」

その隙にとばかりに、レスファートがユーノの腕を引き、中央にある広場の方へ促すと、その前に急に空間が開けた。

「剣士さまっ」

人込みの中から一人の娘が進み出る。若草色のドレスの腕と腰を焦茶の革紐できゅっと縛った、明るい緑の目の娘だ。こぼれるような笑みを浮かべ、手にしていた白、赤、黄色、紫の鮮やかな冠を差し伸べながら、ユーノの前に跪いた。

「どうぞ、これを」

「え...」

戸惑うユーノに娘が不安そうに顔を上げる。

「お気に召しませんか」

「あ、いや、とっても綺麗だ」

「ではどうぞ」

「あ...はい」

促されて体を屈めたユーノの頭に花冠を載せ、

「心よりお礼申し上げます！」

「っ」

素早くユーノの頬に唇をあてた。

わあっと周囲から笑い声と拍手が起きる。一瞬驚いた顔になったユーノが、それでもとっさに娘に微笑みかけた。

「ありがとう」

きゃあああ、と上がった悲鳴じみた声にアシャは思わず眉を寄せる。

「あいつ、時々性別を間違えてるよな.....」

「きゃっ」

側に居たレスファートをイルファがぐいと肩車する。ユーノは娘に手を引かれ、広場の中央に設えられた花で飾られた舞台へ導かれていく。アシャもゆっくり押されながら、二人の後をついて歩く。

「剣士さま！」

「細っこい娘っこみたいなお人だが、そりゃあ剣は凄まじいもんだとよ！」

「怪物を一なぎで倒したそうじゃねえか！」

「剣士さま！」

「人は見かけによらないってか！」

騒ぐ娘達、興奮して口々に噂する人々の中を進んで、やがて4人は舞台上に立った一人の老人の前に並んだ。

「私はこのあたりを治める長でございます」

老人は深々と一礼した。白髪を後ろで束ね、穏やかな瞳を皺に埋もれさせた温和な気配の男だ。

「このたびは誠にありがとうございます。あなた方のお働きのおかげで、もう娘達も、娘達の親も泣かずにすみます。開けなかった花祭も、こうして無事開くことができました」

老人の声に広場の騒ぎがゆっくりと静まった。

「山賊（コール）には多くの民が泣かされてきました。娘の身代わりになった母親もおります。山に幾度となく乗り込

む者もございましたが、みな死体となって放り出され、兄や父親の遺骸の前で正気を失った娘もおります。が、しかし...」

一瞬ことばを詰まらせ、

「これからはもうそういうこともありませんまい」

会場から亡くなった遺族を思い出したのだろう、微かに啜り泣く声が出た。

「それもみな、あなたさま方のおかげ.....心より、心より御礼申し上げます」

強いて明るい口調になって、老人は背後に用意した席を示しながら、

「さあ、どんどんおもてなせませんか！ すぐに発たれてしまう方々だぞ！」

わあっとはしゃぎながら舞台上に駆け上がってきた女達に、アシャ達はあっという間に祝宴の中に放り込まれた。

「どうぞ、こちらを！」

「いえ、私のから！」

「あら狡いわ、あなたさつきも」

「剣士さま、どうぞ！」

女達がアシャ達に次々と料理と酒を運んでくる。素朴な土造りの酒杯が空になれば、酒壺を抱えた娘達が先を争って注ぎ、酒杯が満たされれば、舞台上に上がってきた男達が早く空けるとせっつきに来る。レスファートには色鮮やかな果物と砂糖菓子が盛られた器が差し出され、イルファが勝手に吞ませようとした酒杯を奪って顔をしかめたユーノに、別の娘がしなだれかかるように盃を空けるとねだっている。

「あ、あの、ごめん、ボク、もうそろそろ」

「あら、まだ大丈夫でしょう？」

「いえ、あの」

ユーノは微妙な顔で必死に断っているが、娘に押し切られて仕方なしに一杯空け、アシャの視線に気付くと苦笑いしてみせた。

その顔には夕べの苦しそうな表情はどこにも見られない。

(どんな夢を...見ていた)

ゆっくり酒杯を傾けながら、アシャは眼を伏せた。

夕べはほとんど眠れなかった。

眠りに落ち込みそうになると、闇を突いてまたユーノの悲鳴が響くような気がして、何度もはつと体を震わせて目を開いた。

『...う.....っあ、あ、あ、あっ』

掠れた切れ切れの声に目覚めれば、ベッドでユーノが体を突っ張らせて仰け反っていた。薄く開いた目に涙を滲ませて、それでもシーツを握り締めて頭を振る。びっしょり汗に塗れた体を強ばらせているのに、ただごとではないと慌てて起こせば、今にも気を失いそうな真っ青な顔で見上げてきた。

『夢を.....見てた...』

『小さい頃に見た.....魔物（パルク）の.....夢だ』

『17にもなって、化け物の夢で騒いでりゃ世話ない、そう思わない？』

気丈に微笑む黒い瞳は潤んだまま、まだ唇には色が戻らないのに強がってみせる。

レスファートさえ起きてこなければ、じっくり問いつめるつもりだった、一体何があったのか、と。

(あいつが、あそこまでうなされる夢)

魔物や怪物の夢で怯える娘がレガを倒せようはずがない。ましてや、カザドの襲撃を引き付けて、無謀な旅に単身旅立とうとするはずがない。だが。

(『銀の王族』なんだぞ)

『銀の王族』はラズーンの要の存在、彼らはそれ故できる限り安全で幸福な人生を約束されているはずだ。万が一、危うい状況が襲えば、すぐさまラズーンからの干渉が入り、有害因子は削除されることになっている。『銀の王族』はラズーンの、いやこの世界の基盤を為すものだからだ。

なのに、ユーノはその『銀の王族』であるにも関わらず、幾度となく生命の危険に脅かされている。ここまで、『銀の王族』が放置されているのをアシャは見たことがない。

(なぜだ?)

それだけラズーンの支配力が落ちている、そう言えなくもないが、ユーノを除くセレド皇族は問題なく過ごしている。

(他に何か意味があるのか?)

ユーノが『銀の王族』としてコントロールされなかったことが何か?

(ひょっとして)

『星』の予定した遥かに大きな『揺れ』の一つが、ユーノ・セレディスという存在だった、としたら?

ぎくりとしてアシャは思わず目を見開いて、相変わらず娘達に取り囲まれているユーノを見つめた。

あいも変わらず肩で跳ねた髪、首から手足の先まで包む衣服はユーノの性別を曖昧にしているが、時折掠める厳しい表情に男性性の方を強く感じるのだろうか、娘の中には明らかにうっとりした目で彼女を見ている者もいる。

(だが、そうだとすれば)

アシャはじっとユーノを眺めた。細い手足、細い肩、細い腰、筋肉が張り詰めているから目立たないだけで、骨格もかなり華奢な部類だ。

(いつもいつも、ユーノだけが辛い運命を担う...)

ふいにユーノが振り向いて、アシャの視線に照れたように笑った。少しは酒が入っているのだろう、紅潮した頬にいつもの鋭さが無い。微笑んで細められた瞳は今は曇っていないで楽しそうだ、そう思っ

てアシャは酒杯を傾ける動きを止めた。

(違う)

ユーノは今舞台の下で踊っている人々を見下ろしている。先ほどから始まった踊りの輪は、今や恋人や夫婦が組みになってくるくる回る楽しげなものになって、ますます広がっている。誰もが訪れた平安に喜び、消えた恐怖に弾けるように笑っている、その中で、ユーノの細めた瞳が虚ろな優しい光を宿している。

決して手に入らないものを見るような、決して望んではいけないものに出くわしたような表情、やがて、その視線が一ヶ所に留まって、アシャもそちらへ視線を向けた。

(あれ、か?)

広場の中央あたりで踊っているのは、さっきユーノに花冠を捧げた若草色のドレスの娘、恋人なのだろうか、背の高い男に抱えられながら、ドレスを翻して蝶のように舞っている。娘が体を翻す度に、髪やドレスにつけた花びらが散りながら閃く、それは絵のように美しい光景だ。

(まさか、ユーノ)

あの男、に興味があるのか。

「む」

思わず相手の男と自分を急いで引き比べてしまった。

確かに今は多少身なりは汚いが、それ相応に装えばアシャだって見劣りしないはずだし、背の高さも肩幅も細身には見えてもちゃんと並の男ぐらいはある、それはユーノだって知っているはずだ、楽器を与えてくれれば歌だって歌ってみせるし、何よりユーノの怪我に適切な治療を施してきたのは他ならぬ俺で、とそこまで一気に考えて、自分の思考がとんでもない方向に突っ走ったのに気付いた。

(俺は一体何を)

「ちっ」

舌打ちして溜め息をつく、ユーノはますますじっとそちらを凝視している。

その切ないような表情にずきりとした。

(そんなに、何を見ている)

どうやら娘は恋人と口論し始めたようだ。やがて、ぱんっ、と高い音が響いて男が娘に頬を叩かれる。恋人を放っていこうとした娘、引き止めかけた男の腕に逆らおうとして、その足にぶつかった女の子が転がった。泣き声を上げる子どもに慌ててしゃがみ込む娘、喧嘩していたのもどこへやら、一緒に屈んで子どもを慰める男、そこへ女の子の母親らしい女性がやってきて、二人を声を荒げて怒鳴りつけ、泣き泣きすがりつく子どもを抱きかかえて連れ去る。その母親にぶつかりかけたのは、まだ歳若い夫婦、よちよち歩きの男の子を大事そうに抱いている妻を、夫が騒動から庇いながら通り過ぎる。その隣には別の家族、娘にせがまれたのか、ダンスの相手をおっとり始めるちよっと腹の出た父親と、嬉しそうにその二人を見守る母親と息子。

ふ、と微かにユーノが溜め息をついて、俯いた。顔に笑顔を張りつけたまま、娘達に軽く笑って席を離れ、こちらへやってくる。

「ユーノ？」

「これあげるよ、アシャ」

後ろを通り抜けながら投げられたのは花冠、そのまま舞台からそうっと降りていこうとするのに思わず振り返った。

「どうした？」

「ちょっと酔った。酔い、冷ましてくる」

それに、こういうのも苦手だしね。

にこりと笑って見上げてきた顔が、一瞬今にも泣きそうに見えた。

「ユーノ！」

「アシャは立っちゃだめだよ、一気にいなくなると座が白けるから」

顔を背けたユーノを追おうとしたアシャは機先を制されて鼻白んだ。

「イルファとレスがいる」

「だあめ。じゃ...すぐ、戻るから」

人込みにまぎれるように去る背中が陽炎のように儂く見えた。

(馬鹿、だなあ)

のろのろと俯きがちに人込みの中をすり抜けて、ユーノは広場のはずれの小道に入り込む。

(逃げて、きちやった)

せっかくアシャの近くに居られたのに。

(でも)

広場に集まった人々は幸せそうだった。恋人同士、友人同士、家族同士、笑いあって嬉しそうで、ふと振り向いたアシャはちょうど娘に酒杯を満たされて、微笑みながら何か話している。イルファとレスファートは二人一組、男達の輪の中で旅の話面白おかしく聞かせているのか、時々どっと笑い声起きる。

(居なくていい、よね?)

危険は去った。脅威は消えた。

そうしてユーノはこの華やかな祝宴で、自分が何をしたいのかわからなくなって、戸惑っている。そういう自分が嫌で雰囲気だけでも楽しもうとして目を向けた先にあるのは、優しい温かい関係ばかりで。

(親.....って)

あんなの、なのか。

ことばだけではなくて、動きでも、表情でも、全てが子どもに伝えている、お前が心底愛しい、と。

(あんなふうに、想われるもの、なんだ)

そう思った瞬間に、洞窟の中で転がっていた娘と自分が重なって、間髪生じ延びたものの、どこまで生きられるのかわからない運命に、ただ独りで向かうのだと思い知った気がして。

身が竦んだ。

(諦めた、はずなのに)

ユーノは強いから、無条件の保護、など望んではいけない。母を支え、姉と妹を守り、父の、国民の期待に応えなくてはならない。ゼランを助け、セレドをカザドや、ラズーンの見えない意図から守るのだ。

小道に入って人けがなくなったあたりに小さな空き地があった。

露店商か何かでていたのだろう、片付けられた屋台と、その側に腰を降ろしてくつろげそうな草原がある。

光に輝いて温かそうなそこにも、色とりどりの花びらが散っている。

「ふ、う」

ユーノはそっと腰を降ろした。妙に寒くて苦しくて、膝を抱えて縮こまる。

(早く、ラズーンへ行こう)

今までこんなに辛くなったことはなかった。ああいう光景を見ても、自分には縁のないものだと諦めた。ちゃんと

諦めて気持ちを切り替えてこられたのだ。

(苦しい)

『いじっぱり』

アシャの苛立った、けれど温かな思いやりのこもった声を思い出す。

『魔物（パルク）が心配してくれていたのか』

ユーノの寝言まできちんと聞き取ってくれていた。

『.....わかった、今夜はもう寝る、けれど』

熱を秘めた紫の瞳に焼かれそうで、どきどきして、けれど、その拍動はきっとユーノのものではないのだと瞬時に言い聞かせるしかなくて、泣きそうになって。

『起こしてくれてありがとう』

（いつまで笑えるんだろう）

日ごとアシャに魅かれていく。

『うん、おやすみ』

声は震えなかったはずだ、ちゃんと普通に振る舞ったはずだ。

何も覚えなかったはずだ、でも。

（わかって.....ほしい）

ユーノの過ごしてきた夜を。追い詰められて逃げ場がなくて、ただひたすらに生き延びてきた日々を。側に居て、耳を傾けて、辛かっただろうと抱き締めてほしい。

（夢だ）

そんなことはあり得ない。

（夢だ）

だからできるだけ早くラズーンに着けるように、頑張ろう。少しでも早くアシャから離れるようにしよう。

（そうしないと）

心が壊れそうになる。

（レアナ姉さまのことを）

忘れそうになる。

「く...っ」

ぎゅ、と強く膝を抱き寄せた、次の瞬間、ユーノははっとして振り返った。

全身を緊張させて隠し持っていた剣に手を滑らせる。

（気のせい、じゃ、ない！）

「っ！」

ざうっ、と真後ろの茂みから突き出された剣をあやうく避け、前転して逃げ、地面を蹴る。

「カザドの者かっ！」

茂みから飛び出してきた黒い影が三つ、珍しく顔に黒い仮面をつけて祭の客とも見えるが、手に光らせているのは妙な光り方をする剣、覚えに間違いがなければ痺れ薬を塗った毒剣だ。

「お前ら、しつこいんだよ！」

走り出した瞬間向きを変え、追走しようとした一人の腕を薙いだ。怯んで下がる相手の攻撃を補うように進み出てきた別の一人の剣を受け止める。がきっ、と金属音が響いた瞬間、ユーノは目を見開いた。

（この感じ？）

前に打ち合ったことがある？

（まさか、でも）

相手がユーノの視線に気付いたように一気に引いた。半身翻して逃げそうな気配、いつもならしない深追いをして踏み込んだところへ、もう一人が襲ってきて防戦になり、後ろに下がる。

（知っている相手？ でも、そんな）

ユーノが闘ってきたカザド兵はほとんど倒している。逃がした敵も大怪我をしているはずだ。もし、こんなふうに関わり方に覚えがあったら、何度も剣を合わせた相手ということになるが、それは親衛隊の連中しかいない。

（あの中に、裏切り者が、居た？）

セレドの中にカザドと通じている者がいた、だからこそあかも易々と襲撃してこれたとすれば、馬鹿馬鹿しいほど簡単なことで。

（今も、あそこに）

ぎくりとした隙をついて突き出された剣に、とっさに防いで後ろへ一歩、茂みに近付きすぎたと思った時は遅く、首に巻き付いたものに一気に締め上げられる。

「あ.....ぐっ」

（革...紐...）

細くてしなやかで滑らかで、ただの紐ではない、絞首のための獲物、そう気付いて首を怪我する覚悟で振り上げた剣は、前から迫った男にはね飛ばされる。遠慮なく締め上げてくる紐に唸りながら指を差し込もうとするが、それもかなわない。じたばたと暴れた脚が空を蹴り、なおもきつく首を締め上げられて、ユーノは喘いだ。

（殺...される...っ）

ぼやけてくる視界に、前に立った男が剣を構え直すのが映る。口からよだれが溢れる、額から気持ち悪い汗がだらだらと流れる、呼吸が阻まれて、息をすることだけに集中してしまいそうになる、けたたましく打つ心臓がうるさい、耳鳴りが世界を圧倒する。

（この...ままじゃ.....だめ...だ）

朦朧としながら体をねじったユーノの耳に、耳鳴りを押し退けるようにして背中から声が響いた。
「あの時に死んでおられればよかったのだ」

「つつっ！」

寒気が走った。

(この、声)

5年前、倒れて気を失う寸前に、背中を抉った相手を振り返った。意識がぼやけていて覚えていられなかった、そうだとばかり思っていた。

(お...まえは)

けれど、そうじゃなかった。

あまりにも、信じられなかった相手だったから。

あまりにも、惨い現実だったから。

同じ位置関係、同じ命の瀬戸際、繰り返されて記憶が鮮明に呼び起こされる、その記憶にユーノは凍りついた。

そうだ、あの時も、殺気は感じたけれど、それまで接近に気付かなかったのは、怪我をしていたせいばかりではない。その気配があまりにも慣れたもの、安全だと繰り返し教えられていたものだったから、無意識に警戒を緩めていたのだ。

気を許していた、その隙を狙われた。

「う...っ」

「おとなしく、されよ」

「い...や.....っ」

声を絞り出し、前から迫る男の剣に逃れようと身をねじって体が動いたそのとたん、きつく紐を締められ引き戻され、あの夜と同じ場所を抉られる、相手が教えた、そのままに。

「つつあああっっ！」

ひどい、よ。

体の痛みを遥かに越えて、心を切り裂かれた衝撃に、ユーノは涙を降り零しながら絶叫した。

「ア.....シャ.....!!!」

やっぱり気になる。

「ちょっと失礼」

「あら、どちらへ」

立ち上がったアシャに側で侍っていた娘が不審そうな声をかけてくる。その顔に唇に指を当て、微かに目を動かしてみせた。

「ま、ごめんなさい」

薄赤くなった娘の誤解をいいことに、舞台を降り、ユーノが消えた方へ歩き出す。

(戻ってこない)

ずいぶんになる。

もう一つ気になったのは、上空高くゆっくりと弧を描くように舞っている白い鳥の姿だ。ちら、とまた視線を投げると、アシャが動き出したのに気付いたように舞う範囲を変えていく。

(何だ?)

普段なら気配さえ見せないサマルカンドが、気付かなければわからないとは言え、視認できる距離まで接近してきたのに不審が広がった。

ラズーンからの連絡ならば、もっと早く接触してきているだろう。まだ成鳥に達していないとはいえ、サマルカンドが太古生物のクフィラだと知れば妙な食指を動かす輩もいるはず、その危険を冒してわざわざアシャの視界を掠めてきたのはきっと何か意味があるはずだ。

舞い降りてきやすいように人気のない空き地を探して、人込みを避け軽く俯き、目立たぬように頭から布を被って移動していると、みるみるサマルカンドが描く円を縮めてきた。

それは普通は獲物を見つけた徴だ。

「『運命(リメイン)』か?」

祭りに紛れて入り込んだ動きを察知したのかと、物陰から隠れて見上げ、アシャは眉をひそめた。違う。あれは。

「.....ユーノ...?」

危険と注意を促す旋回、未だ見つけれないユーノを思い出してぞくりとする。

「まさか...っ」

サマルカンドが舞う範囲を頼りにアシャは足を速めた。

なまじな敵に手こずるようなユーノではない、ならば戻ってこれないのは、よほどの数か、もしくは重症を負ったか。これだけの人数、そうそう目立つ場所ではやらないだろう。祭りは賑やかさを増して、あちこちで踊る人々も居る、屋台も露店商も出ている、裏路地か、それとも建物に連れ込まれて。

「ちっ」

自分が鳥肌を立てたのがわかった。竦みかけた脚を叩きつけるように走る。と、すぐ側の路地から殺気が零れ、二つの人影が飛び出すのが見えた。ちらっと見えたのは黒い仮面、日射しの中で瞬間アシャを振り返り、片方が慌てたように顔を背けた仕草にどきりとする。

(俺を、知っている?)

では、今回の敵はユーノ側というより、むしろアシャ側なのか。

ならば、サマルカンドが現れたわけも納得がいく。

「くそっ!」

それならなおさら許せない人影が飛び出した路地に駆け込んでいって、アシャは唐突にばかりと静まって明るい空き地に飛び出した。露店商が後で取りに来ようとしたのか半端に積まれた荷、片付けられた屋台の背後には豊かな緑。だが、その枝にべつとりと血しぶきが飛んで、まだ滴っているのに息を呑む。

そして、その根元には。

「ユーノ!!!」

体中の血が沸騰したようだった。

叫びながら駆け寄って、いつもの冷静さも失って、鮮血に染まって倒れている小柄な姿を抱き起こす。

ぐちゃり、と腕に潰れたのは引き裂かれた背中の傷、ばたばたと体を濡らしながら垂れ落ちる血がみるみる地面に広がる。意識を失って仰け反った首に巻きついた革紐、くたりとした体が重みを増してもなお軽い、まるで命が残っていないほどに。

「ユーノっ!」

首の革紐を解いた。ふ、と小さく、開放された喉から漏れた吐息を吸い取るように唇を合わせて、消えそうな呼吸を呼び戻す。

「.....」

「ユーノ...っ!」

呼吸が緩やかに引いたまま戻らない。

ダレガ。ダレガ。ダレガ。ダレガ。

頭には何万匹という羽虫が詰め込まれたように一つのことばだけが唸っている。首を振り、過熱した視界を瞬きながらユーノを地面に横たえて上着とシャツを脱ぎ捨てた。心音は弱い。背中にシャツをあて上着を当て、もう一度唇から息を吹き込み、呼吸を確かめる。

「ユーノっっ」

呼び掛け、冷や汗を流しながら再び人工呼吸を試みる。出血が多い。背中を扶かれ首まで締められて、こんなところに放り出されて、そう思った時点で凍るような怒りに叫びそうになる。

ダレガ。ダレガ。ダレガ。

ゼツタイ、ミツケテ、コロシテヤル。

落ち着け、と頭の奥で静かな『太皇(スーグ)』の声がした。

そこはラズーンではない。

(わかっている)

十分な設備はない。

(わかっている)

視野が狭くなり、冷静な判断を欠いている。

(わかっ、いるっ)

そのままではその娘は助からない。

「く、っ」

アシャは歯を食いしばって体を起こした。目の前のユーノから、閉じた瞳から零れている涙から、一瞬目を閉じ、無理矢理意識を切り離す。

落ち着け。

崩れるな。

今ここでお前が『人』を失ってしまったらどうする。

それこそ、世界の破滅につながるだけだぞ。

呼吸を整えて眼を開けた。

心臓は動いている。呼吸は微かだが続いている。出血はどうだ、傷の程度は、深さは、今必要な手当ては何だ。

そっと抱き起こし、体温と拍動の強さと早さを確認する。背中のシャツは血に染まってべっとり濡れているが、それが張り付いたせいで一時的な防護膜にはなっている。血の気を失って白い体を上着でくるみ抱き寄せる。後は一刻も早く保温し傷の手当てをして、ああ、その前に。

上着の懐から朱に染まった小袋を取り出した。中から青い丸薬を取り出して含み、ユーノの唇に舌で押し入れる。苦味を帯びているはずの丸薬が、ユーノの血の香りを口の中に広がらせてむせそうになる。

「...んふ...っ」

喘いだユーノが息苦しそうに眉を寄せながら薄目を開いた。溜まっていた涙が零れ落ち、それでも抵抗できずにアシャが含ませた丸薬を飲み下す。震える唇が微かに動く。

たす、けて。

「大丈夫だ」

心臓を鉤爪に握りしめられたように苦しくて、アシャは唸った。

「今呑んだのは強心作用がある薬だ、助けてやる、心配するな」

平静を保とうとして声が平板になった。頭の中の羽虫は静かになっているが、沸き上がってくる怒りの冷たさが尋常ではない。

ユルセナイ。

ナニモノデアロウト、ユルスコトナド、オレニハデキナイ。

ざわざわと身内を走る闇の気配を必死に堪えてことばを絞り出す。

それほど、大事なのか、この娘は。

それほどお前の制御を狂わせるのか。

自問するが答えは激情に溶けてことばにならない。

シヌナ。

オレノウデノナカデ、イクナ。

「俺が、絶対、助けてやる」

「ち...が...」

ユーノがわずかに首を振った。

「たす...け.....姉...さま...」

「レアナ？」

てっきり自分を救ってくれと言われているのだと思い込んでいたアシャは眉をしかめる。少しずつ薬が効いてきているのか、心臓の拍動も呼吸も次第にはっきりしてくると同時に、抱えた腕にまた温かく広がり始める血に苛立って抱き上げると、小さく呻いてユーノが震える手でアシャの胸にすがった。真っ赤に濡れた指が自分の胸に紅の筋を描く、ユーノが楽になるなら、そのまま突き立ててくれても構わない、そう思ったアシャの耳に、

「姉...さま...が.....あぶ...な...」

「違うだろう！」

祭りに浮かれる人々に見とがめられないように裏路地へ入り込もうとしながら怒鳴った。

「お前が、危ないんだぞ！」

こんなときまで、どうして、レアナのことなんか。

そう吐き捨てそうになって危うく踏み止まる。

「ち...が.....っう」

がたがた震えながら、ユーノが涙で一杯の目で見上げてきた。

「私.....襲った.....の.....五年.....前.....」

「五年前？」

荒い呼吸を吐きながら、ユーノは切ない表情に顔を歪める。

「五年間.....ずっと.....」

味方...だって.....思って.....た、のに。

「あん...まり...だ.....」

「ユーノ？ ユーノっ！ おいっ.....く、そっ」

掠れた声でつぶやいたユーノは自嘲するように眉をあげると、そのままアシャの腕で気を失った。

祭で人々が出払っていてよかった。

「剣士さま？ どうされましたか」

「慣れない酒で寄って吐き戻した、しばらく静かに休ませてやりたいので奥を借りるぞ」

「まあそれはそれは」

留守番をしていた若い男が上半身裸のアシャとその腕に抱えられているユーノを心配そうに見遣ってくるのに、自分がついているから祭に出かけてきてもいい、と促すと、男は喜んで家を出ていった。

とりあえず汚れを水で拭き浄めて連れ戻したのは、敵にユーノが生きていると知らせたくなかったからだ。生死が不明となれば、そうすぐには次の手を出してこないだろう。アシャが駆け付けたのもわかっているなら、もう一度策を練り直すはずだ。

「血の臭いには勘付かれなかった、か」

ほっとしてユーノを抱えたまま、借りていた部屋に入り、脚で扉を閉めて、まずは床に横たえる。

手当てが済んでからベッドできちんと眠らせてやりたかった。こういうときには粗末な木の床がありがたい。

降ろした時の痛みで微かに唸ったユーノは、それでも目を開かない。その真っ白な顔を見ながら、アシャは窓を閉め、扉に鍵をかけた。水と布を用意する。

成りゆきとは言え、レクスファに医療道具を置いていて助かったと吐息をつきながら、上着を開き、広げたそこで静かにユーノの体をうつぶせながら呼吸に注意する。

強心剤はよく効いているようだ。拍動は早いがしっかりしていて、少し安心する。

「痛み止めも吞ませてやりたいが」

今すぐには無理だな、と顔をしかめながら側の机に薬を並べた。手当ての間、悲鳴を上げられてはまずいが、ようやく生死の境を越えさせたのに、その口を布で封じることなどできない。できるだけ丁寧に素早く処置して、叫び声に誰かが駆け付けてきても、夢でうなされた、と言い抜けられるといい。

(夢、か)

ユーノがうなされた夢を思い出した。あれもまた、そういうものだったのだろうか。

べっとり朱色に染まったシャツを取り除く。思ったよりは傷が浅かった。本当はとどめを刺すところだったのが、アシャが近寄ったために諦めたのだろう。

だがそれは、逆に、首を締め、背中を裂いた目的が殺戮でなかったことを教えている。殺すだけでなく、いたぶろうとした気配が濃厚だ。

「.....」

じり、とまた冷やかな怒りが滲みかけて、指先に意識を集中した。自分がひどく怒っていることを自覚する。不用意に刺激されて爆発しないように、自分の怒りをコントロールする。

シャツを剥がし、ユーノの衣類をそっと切り開いた。着替えはとりあえずアシャのシャツにすると、と水に濡らした布でそっと傷とその周囲を拭いていったアシャは、その下から現れたものに息を呑んだ。

傷。

「何...だ.....これは...」

今切り裂かれた傷の真下にも、同じぐらい、いやもっと深い傷がある。脳裏を過ったのは、ここへ来るまでにカザドで襲撃されたこと、掠っただけの傷に苦しんだユーノの腕には古傷が口を開けていた。ぞくぞくした恐怖に襲われながら、急いでその周囲も改める。

傷。

傷。

背中を全部を埋めるように引きつれた、無数の傷痕。

「まさか...」

残っていた衣類を切って開き、次々に現れる傷痕に凍りついた。

「ば...かな...」

ユーノのほぼ全身を、大小さまざまな傷痕が覆っている。柔らかな布をそこら中裂いて無骨に縫い合わせたような、あるいは焼きごてで押したようにつるりと光った、そしてまた、見えないいろいろな太さの糸を彫り込んだような傷が、背中と言わず、華奢な首の付け根から肩、腕、微かに膨らんでいる胸や丸い臀部、大腿下腿に至るまで縦横に広がっていて、かろうじて見当たらないのが手足の先と首から顔程度、つまりはユーノが衣服をつけていないところで。

「く」

着れる、わけがない。

歯を食いしばって、とっさに詰りそうになったのを堪え、アシャは手当てを進めた。消毒し、止血剤を塗り、接着剤を塗り重ねて傷を引き寄せ、リバテープで止めていく。布を当て、包帯で巻き締める。

ドレスを着れるわけがない、のだ。

17の娘がこれだけの傷痕を晒す気にはなれない。ましてや、その傷がどうしてあるのかを説明する術を封じられているユーノが、晒すわけもない。

3人の娘の揃いのドレスをと望むミアナ皇妃は、本当に全く気付かなかったのか。これでは。

「生きていたほうが、奇跡、だったんじゃないか...」

シャツで包んでやると、アシャのシャツの中でユーノの体が痛々しいほど小さく見える。そっと抱き上げてベッドに寝かせ、汚れてぐしょぐしょになった衣類の片付けをしながら、アシャの胸には苛立ちと激情が渦巻いている。

なぜだ。

なぜだ。

なぜ、こいつだけが、こんな状態で放っておかれている。

あれほど平和そうな国で。

親衛隊まで職務を離れて踊りに興じるような世界で、暗い庭で、建物の影で、木立の下で、ユーノは幾晩眠れぬ夜を過ごしていたのか。

「ち、いつ」
殴りつけたい、誰よりもまず、自分の頬を。なぜならアシャは、きっとユーノのその状態に遠からぬ責任があるはずで。
鋭い舌打ちをしたとたん、背後で微かに声がして、アシャは振り返った。
「.....シャ.....？」
「気がついたか」
「.....ど.....してここ.....姉さま.....っっ！」
「馬鹿っ！」
ぼんやり瞳を開けたユーノがはっとしたように跳ね起きかけて凍りつく。とっさに激痛に唇を噛んでベッドに倒れ込む相手に、アシャは駆け寄る。
(また、悲鳴を噛み殺した)
きっとそれは習性なのだ、と気付いた。悲鳴をあげては弱っていると教えるようなものだから。弱点を教えるようなものだから。
次は確実にそこを狙われるから、だからユーノは悲鳴を上げない。
だがそれは、救出を遅らせる。助けの手を遠ざける。死ぬまで放置されてしまう。
(だから)
あれほど酷い傷を全身に負うしかなくて。一度切られた場所を無意識に避けるから、その隙間を縫うように傷を受けていくしかなくて。
「どうして...っ」
瞳を涙で曇らせながらも険しい顔でユーノが唸る。
「あいつが姉さまのところに戻ったら...っ」
「大丈夫だ」
「だってっ」
「お前の生死が不明だ」
「え...？」
「お前が生きているか死んでいるか、確かめてから動くはずだ。わざわざあんな場所でお前を狙った」
だから、事は密かに進めたかったはずだ。
「俺が早く駆け付けたから手順が狂った」
今頃慌てて確認しているはずだ。
安心させるように畳み掛けると、きりきりと歯を食いしばっていたユーノが、ゆっくり眉を緩め、ほ、う、と溜め息をついた。ゆっくりとベッドに沈み込み、ふと不安そうに瞬きして手を上げる。
「あ...っ」
「どうした？」
「ボクの...服...」
「ああ、使い物にならなくなったから処分した。.....俺のじゃ不満か」
ぎゅ、と襟元をかき寄せ握り締める仕草に微妙にむっとした。
「違う...」
「じゃあなんだ」
「.....見た.....？」
「.....ああ」
「っ...」
びくり、とユーノが震えた。大きく見開いた目が揺れる。
「すまなかった」
そうか、と気付いてアシャは謝った。
「治療のために仕方なかったんだ」
「う...ん...」
ユーノが瞬きし、ますます襟元をきつく握る。真っ白になった顔で黒い瞳が怯え切っているのにアシャも不安になった。
「大丈夫だ、誰にも言わない」
「っっ」
「理由があったんだろう、仕方なかったんだろう、確かに女では珍しいかもしれないが、剣士なら別にどうということは」
「あ.....」
慰めたつもりだったが、ユーノがますます目を見開いて困惑した。
「ユーノ？」
「剣士、なら.....？」
「そうだ、剣士なら、むしろ歴戦の勇士として立派なものだ。よく頑張ってきたな」
「剣士...なら...か.....」
「ユーノ...？」
「.....そう.....だよ...ね...」
のろのろと瞳を伏せていきながら、それでも襟元を握るこぶしは色を失うほど力を込められている。
「剣士.....だよね...」
「俺の知っている限りではそれだけの傷を負って生き延びている者は少ないぞ」
たいしたものだ、そう続けながら、アシャは不安に駆られる。

(なせだ?)

ユーノの気配がどんどん弱くなる。脆くなって沈んでいって、傷の手当てはしたはずなのに、今にもまた気を失ってしまいそうだ。

ああ、そうだ、と思いついて、痛み止めを取り出して差し出した。

「とにかくこれを呑んでおけ。痛みもましになるし、回復も早くなる」

「う...ん」

ふわりと上げたユーノの瞳が今にも零れそうな涙でいっぱい、アシャはまた凍る。

「.....痛むのか？」

「え...？」

「泣いていいんだぞ、こういうときは」

「そ...か」

ユーノが微かに笑った。

「泣いて.....いいのか」

いろいろ、わかっちゃったもんな、とつぶやきながら、ついに零しだした涙にがしりと胸が掴まれる。

側に寄って、顔を上げさせて、涙を吸い取って、そのまま唇を奪いたい。

手にした丸薬を口に含んでさっきみたいに吞ませてやって。震える舌を少し探って。

ごく、と唾を呑み込んで、自分がどれほど状況を考えない邪なことを思っているか気付いて、アシャは軽く顔を振った。

「.....しかし、それだけの傷をどうして」

「.....私は、アシャほど、剣がうまくない」

掠れた声でユーノがつぶやき、目元を手の甲で擦った。

「だから、しょっちゅうドジるんだ。今は多少使える、けど、12歳ぐらいの時は.....酷くて」

一瞬口を嚙む。

「12歳？」

「カザドが初めて襲撃してきたのが.....それぐらい」

ぼつりぼつりと語られるユーノの過去を、アシャは鳥肌が立つような思いで聞いた。

(よく、無事で、いてくれた)

どの戦い一つでもユーノが生きることが諦めていたなら、今ここにユーノはいない。

(けれど、どれほどの、孤独)

たった12歳の子供が、父母を庇い、姉妹を庇って、ひたすら剣を交えて生きてきた。全身に傷を負いながら、おそらくは手当てさえも十分ではないままに。

(悲鳴も上げないで。痛みも訴えないで)

「.....そのとき、背中を抉られて.....」

ユーノがふいとことばを止める。まっすぐ天井に向けた瞳をそろそろと向けてくる。

「アシャ」

「なんだ」

「.....この国を出たい」

「そんなに怯えなくていい、すぐに再襲撃してくるとは」

「違う」

ユーノは強い光をたたえて見つめ返してきた。

「私が襲われたと知ったら、またみんな怯えちゃう」

「.....」

「せっかく、みんな、ほっとして、楽しんでるのに」

目を閉じ、静かに続けた。

「手当てもちゃんとしてくれたんだよね？ ……明日には出られる？」

「……無茶を言うな」

一瞬怒鳴り付けそうになった。

今死にかけてんだぞ。今はずたずたにされたばかりで。

なのにどうしてそこまで人を守ろうとする。

「俺には」

「アシャには仕事がある」

「仕事？」

「セレドへ戻って」

「待て」

「できるだけ早く。姉さまを、守りに」

「ユーノ」

「私にはイルファもレスもいる、けど、今あいつに対抗できるの、アシャぐらいだよ」

「あいつ？」

ぞくと身が竦んだ。そう言えば、さっきもあいつ、と言ったなと思い出す。

「お前は自分を襲ったのが誰だか知っているのか」

「知ってるよ」

ユーノは低く嗤った。

「ずっと味方だと思ってたけど……違うんだ……そう思ってたただけだったんだ……信じたかっただけなんだ」

つう、と額から汗が流れ落ちて、目を細めたユーノがアシャを見据える。

「私を襲ったのは……5年前と同じ」

静かな声が切なげに響いた。

「ゼランだよ」

2. 知将ゼランの陰謀

きゅきゅっ、と音を立ててアシャは革袋の口を締めた。

「じゃあ、行ってくる」

「ん。頼むね、姉さま達のこと」

粗末な寝床に横になっているユーノを見下ろし、つつい険しくなった顔に気付いたのだろう、ユーノがにこりと微笑む。

「アシャが行ってくれるなら、安心して旅を続けられる」

「言うておくが」

じろりと相手をねめつけがら、アシャは唸る。

「まだしばらく動くなよ？ 本当なら俺が戻るまで絶対安静と言いたいところだが」

「はいはい」

軽く片目をつぶって見せて、ユーノは苦笑する。

「医師師の言うことは大人しく聞いておくよ」

「既に聞かなかっただろうが」

苦々しく遮るアシャにユーノがひきつる。その額はうっすらと汗に濡れて、髪の毛がうるさそうに張りついている。

「ユーノ」

アシャはベッドにそっと腰を降ろした。ユーノの額から髪の毛を指先でかきあげてやりながら、「腕のいい戦士は自分の体調を常に最高に保っておくようにするものだ。傷は塞がってきているとはいえ、完全に接合するまで後二日はかかる」

シェーランの花祭で襲われて、生死の境を彷徨って2日、飲み過ぎ食べ過ぎ体調を崩したようだと心配する周囲をなだめて過ごし、先を急ぐのでと半ば無理矢理に旅立って2日、今はシェーランの国境付近の森近く、元は誰かの住処だったのだろう、見捨てられた小さな廃屋を見つけてそこで治療を続け、ようやく食が戻ってきたのがまだ昨日のことなのに、どうにでもセレドに戻ってほしいとユーノが懇願し続けるのに、アシャは仕方なく旅立つことにしたのだが。

「それより前に動き回ったら、命の保証はできないからな」

こんな脅しは無駄だろう、そう思いながら言い聞かせる。

シェーランの人々の動揺を恐れ、追手が再び平安を脅かすのを警戒し、まるで囷になるようにシェーランから出ていくと聞かなかったユーノの強さ激しさが今ほとにかく恨めしい。

伊達に体は鍛えていない、百戦錬磨の訓練を課してくれた、そのところはゼランに感謝してもいいが、何より無防備に背中を向けたユーノを容赦なく切り裂いたことを思うと、腹の底に冷えているのに滾りたつ黒い炎が蠢いてくる。痛み止めと鎮静剤を吞ませているからこそ落ちる眠りに、それでも何度ユーノが蘇った記憶に苦しんで眼を覚ましたか、その手を握るばかりの自分が、どうしてもっと早くこいつの側に居なかったのかと、そればかりを呪っているのに気付いてからは、アシャも一層眠れなくなった。

「う...ん」

僅かに眼を細めたユーノがアシャの指先に唇を開く。微かに乱れる呼吸はアシャに応じてではなくて、治り切らない傷の熱がまだ身内を焦がすせいだとわかっているが、それでも思わず誘われそうになる。

離れたくない。

アシャが離れてしまえば、またユーノが無茶をする、それがもうあからさまに想像できる。

それでも、レアナがセアラが父母とセレドが、そう案じる主の声に逆らえるわけもなく。

「これは痛み止めだ」

小さな袋を渡した。

「一度に2錠以上呑むな」

身動きしにくくなる。

そう付け加えたのは本当は偽りで、2錠以上必要とする痛みは早急に対処が必要なはず、過剰投与は一時的に痛みを殺してくれるが、傷ついた心身をより消耗させるだけだから、あえてユーノが選ばないように制限をかけた。

「わかった」

思ったとおりユーノはこくりとうなずいて、二錠だね、と確認している。二錠までは吞んでも動ける、そう計算している顔に溜め息をついた。

「それから、お前の剣はイルファに預けておく」

「え！」

ユーノがぎくりとしたように目を上げる。

「だって、アシャっ」

「イルファの腕は知ってるはずだな？ お前は養生するはずだから、剣は要らないはずだな？」

「う」

「不服か？ じゃあ、大人しくしてもらうために、この薬も引き上げておくか？」

「あ」

慌てて薬の小袋を握り込むユーノが、あつ、と眉を寄せた。

「そらみろ」

「今のは、違う」

「何が」

「今のは」

「今のは？」

「ちょっと、傷に擦れて」

む、と唇を尖らせた相手と離れたくない、とまた思い、アシャは思わず顔を寄せる。驚いて固まる顔に拒まれる前に頬に軽く口付けして体を起こす。

「っ」

「すぐ戻る」

言い捨ててさっさと背中を向けたのは、一瞬でも不愉快そうな顔を見たくなかったからだ。

俺は一体何をしてる。

自分でも混乱して熱くなりながら部屋の扉を開けると、不安そうなレスファートと数日ずっと彼をなだめ続けていたイルファが立っている。

「セレドに戻るのか」

「あいつの家族に異変があるかもしれない」

背中越しに顎で示す。

「主人の言い付けには従わなくてはならないからな」

「ユーノ、だいじょうぶ？ 入ってもいい？」

「ああ」

「ユーノ！」

アシャの同意に少年はプラチナブロンドの髪を乱して慌てて部屋の中に駆け込んだ。

ユーノ、ユーノ、ぼく、ユーノが死んじゃうかと思った、すごく心配したんだよお。

泣き声になってしがみついてくるレスファートに、さすがに困った優しい声でユーノが応じる。

「ごめんね、もう無茶しないから」

「うん、うん...っ」

わああ、とレスファートが泣き出したのは、心象に敏感な少年がどれほど側に居なくても、怪我の酷さを感じ取っていたせいだろう。

「.....ああは言っているが」

扉を閉めて、アシャはユーノの剣をイルファに渡した。

「あいつのことだから、また何かあったら飛び出すに決まってる。剣を預けておく。さすがに空手ではどうこうできないだろうから、動こうとしたら止めてくれ」

「やってみるが」

イルファが気難しく顔をしかめたまま唸った。

「本気で来られると無傷で、とはいかないぞ」

「おい」

「俺だって命は惜しい」

あんな無謀な飛び込み方をしてくるやつをあしらえるほどの腕などない。

むっつりと言い放ったイルファが常にない重々しさなのに、アシャは眉を上げた。

「イルファ？」
「何だ」
「お前、機嫌が悪くないか？」
「悪い」
「どうしたんだ？」
「今のは何だ」
「は？」
「最後に頬に口付けした」
「.....見てたのか」
「思わず無然とすると、
「俺にはそういう趣味などないと言ったくせに」
「何？」
「男を愛する趣味はないと言ったくせに」
「.....ない」
「嘘つけ」
「じゃあ、あれは」
「あれは」
「あれは？」
「.....親愛の、情だ」
「.....親愛の情か」
「.....俺の居た国ではよくあることだ」
「.....俺には親愛は抱かないのか」
「.....イルファ」
じろりと相手を見遣った。
「からかっているのか？」
「わかるか？」
「.....おい」
「まあ、冗談はおいて」
「.....おい」
「どっちにせよ、あいつを俺一人では止めきれん」
イルファが肩を竦める。
「へたすると、こっちが巻き込まれる」
「.....仕方ない」

アシャは溜め息を重ねて、イルファを手招きした。
森近くの大きな木に翼を休めて待機しているサマルカンドを、戸口を開いて示してみせる。がく、とイルファの顎が落ちて口が開いた。しばらく茫然として白い巨大な、額に紅の十字の傷跡をつけた猛禽類を眺めていたが、おそろおそろ引きつった顔でアシャを振り返る。

「あれを見張りにつけておく。いざとなったら、あいつも押さえてくれるだろう」

「あれって.....クフィラ、じゃないのか？ 太古生物の？」

「そうだ」

「.....とっくに滅んだはずじゃないのか？」

レガと同じように、今この世界に居るとは知らない、ましてや、人の命令に応じるなどとは聞いたことがない。

「あんなのをどこで手に入れた？ どうやって、従わせたりできた？」

「.....俺の生まれた国ではたくさん居たんだ」

アシャは顔を逸らせて低くつぶやき、革袋を背負ってさっさと小屋から歩き出した。

「たくさん.....居るわけねえだろ？ だって、あいつらは」

人が生まれる前の世界に、居たはずじゃなかったのか。

背中響くイルファの声にアシャは苦い顔で舌打ちし、それにはもう応えなかった。

数日後、セレドの国境を走り込んでいく一頭の馬があった。

乗っているのは目立たぬ服装を裏切る金褐色の髪を日に輝かせたアシャ、紫の瞳を苛立ちに煌めかせ、街路を一筋に中央区へ突っ切っていく自分の姿に驚きの目を見張る周囲に目もくれず、まっすぐに皇宮へと向かう。

「アシャ?!」

「どうなさったんですか！」

入口で馬から飛び下り、口々に問う親衛隊に軽く会釈しただけで、アシャはずかしくと皇宮の奥へ踏み入った。顔見知りというだけで、息を荒げて明らかに不審な様子の自分を引き止めもしない守り、その緩みに今さらながらに不愉快な波が胸に動いたのは、その緩みの全てを一人で背負っていた娘のことで。

今遠くに、イルファに任せるしかなかった、床に伏している愛しい娘のことで。

側を離れたくなどなかった。

どうしても、と言うから。

自分の家族を守れと主に命じられたから。

この不快さを向ける相手はもちろん決まっている。

「ゼランっ！」

「...アシャ？」

めったに響かせない大声にテラスに居たらしい人影が柔らかく問いながら広間に入ってくる。

「あなたですか？」

「.....レアナ様」

染み一つない白いドレスの裳裾をたおやかに引き寄せながら近付いてくる姿に、アシャは少し落ち着いた。

よかった、とにかくレアナは無事だ。

ほ、と小さく息を吐いたアシャの様子にレアナは不安そうに赤茶色の瞳を瞬かせた。

「どうしてここに？ あの子、ユーノは一緒ではないのですか？」

「はい、レアナ様」

ふわりと挙げられた手に軽く頭を下げて礼をとる。

「セアラ様、皇や皇妃様はどちらに」

「ああ」

レアナは微笑む。

「このところよく晴れ作物の実りも豊か、みなも喜んでいると上納がありました。それを祝い、昨日は宴が開かれて、遅くまでそれぞれに楽しんでいましたから、まだお部屋で休まれておいでです」

「そう、ですか」

じりっと胸を焦がしたのは、やはり旅の空の下で粗末なベッドに傷だらけの体を横たえていたユーノのことだ。

皇も皇妃もユーノがどれほど危険な旅に出たか知らないはずもないのに、やはりここでは同じように宴が開かれ、賑やかな談笑とダンス、溢れるような料理と酒、きらびやかな宝石や色鮮やかな服装をまとって、ユーノの家族は平穏を楽しんでいたのだろう、そう思うと、アシャは胸が苦しくなる。

あなた方のその幸福は一体誰によって満たされているのか。

そうレアナに詰め寄り詰りたい。

だがしかし、その思いは諸刃の剣となってアシャの口を封じる。

目の前の優しげで柔らかな気配の女性を悲しませることを、きっと誰も望まない。世界の恐怖を知らないがゆえの美しさだとはいえ、その姿は人の心を慰める。

それに、アシャもまた。

ユーノのように傷ついている『銀の王族』がいるかもしれないと考えもしないで、いや、その可能性を考えたのに責務の重さに怯んで、結果自らを放逐し、それをいいことにふらふらと諸国を流れていた。

その甘さがユーノを追い詰めたのだとも言える、とまた同じ考えに舞い戻る。

ならば背負うのか。背負いきれるのか、この世界を。

いや。

「何があったのですか？」

レアナに見上げられて、首を振る。

きっとアシャにレアナを責める資格などないのだ。

「ゼランはどこに居ますか？」

「ゼラン？」

ゼランなら夕べも一緒に。

レアナは少し首を傾げた。

「ああ、そうですね、さっき庭を横切って……急いでいたのでしょうか、呼び掛けても応えなかったのですが」

「どちらへ行きました？」

嫌な予感にアシャは身を翻す。慌てたようにレアナが呼び掛けてくる。

「何ごとですか」

「どちらに？」

「あ、たぶん、お父さまのお部屋かと」

夕べも宴の途中で何か話し掛けていましたし。

「皇の」

ち、と思わず舌打ちしてしまった。

「アシャ？」

「皇妃やセアラさまと居て下さい……私が呼ぶまで来ないで頂きたい」

「…わかりました」

緊迫したアシャの声にレアナが立ち止まる。それを振り捨てるように足を速めて廊下を抜け、奥まった皇の居室に向かう。相変わらず無防備に、見張り一人も立てていない皇の部屋の前、皇に断ることば一つかけずに今にも室内に滑り込もうとするゼランを見つけた。

「待て！」

「っ」

振り返ったゼランが一瞬訝しげな風を見せる、だが、近づくアシャの形相に察するものがあつたのだろう、一瞬顔を歪めると、懐に抱えていた手を引き抜きながら一気に部屋に飛び込もうとする。はっとしてアシャは声を張り上げた。

「セレディス4世!!」

いきなりの叫びに部屋の中で物音が響く。それを力になおも声を放つ。

「曲者が狙っております！」

「ちいっ！」

ゼランが素早く身を翻す。廊下を駆け抜け、テラスを飛び越え、庭から奥へ、おそらくは厩舎の馬を引き出して逃げ去ろうとしたのだろうが、アシャの動きのほうが早かった。庭を駆け出そうとした自分の前に立ち塞がるアシャに、かつて見ないほど醜悪な表情でゼランが立ち竦み、口を開く。

「そこをどけ」

剣を抜き放ってきしるように唸った。

「大怪我をするぞ、若造が」

「……生憎」

アシャはゆっくり両手を降ろして向き直る。

「主の命は家族を守れ、なのだ。ここでお前を逃がすわけにはいかんだろう」

自分の顔が相手に負けず劣らず、殺意を満たして引きつれるのを感じた。

「随分なことも、してくれたじゃないか」

「……やはり、生きていたのか」

「ぬけぬけと」

歯を噛み砕きそうな苛立ちをかりうじて押さえた。

「弄んで放置する気だったくせに」

「……しとめるつもりだったのだが」

ゼランは平然と言い放った。

「上空に妙な気配を感じたのでな、最後まで押し切れなかった」

じろりとアシャを見遣る瞳には、ユーノの教師としての慈愛はない。

「裏切りもの」

「違う」

アシャの罵倒に冷やかに応じる。

「もともとセレド側ではなかったのだ」

「何？」

「カザディノ王は様々な手を打つお人でな」

レアナが大人しく嫁いでこないとわかってからは、あの手この手を企んで、その一つが潜入。

「皇の信頼を得て、親衛隊に加えられ、いつしか隊長と呼ばれるまでになっていた。嫌いではなかったが、ここの生活も。だが忘れたことなどない、自分の仕事を……もっともそればかりでもなかったが」

「カザド、だったのか」

ユーノが常に緊張し警戒していた隣国の野望は、こんな間近で息を潜めていたのかと苦々しい顔になったアシャに、ゼランが剣を構える。

「もう一度言う、そこをどけ、さもないと」

ふ、と短い気合いを漏らして一瞬にしてアシャに迫って振り降ろす剣、それでもそこにいささかの驕りはあつたのだろう、ギンツと歯が傷むような音を響かせて受け止めたアシャの短剣に、驚いたように目を見張る。

「ほ、う、これはこれは」

お前はそんなものを使ったのか。

「てっきり旅役者崩れの優男とばかり思っていたぞ」

レアナは無理でもユーノをその美貌で垂らし込み、セレドをかつ攫う気かと思っていたから始めは警戒したが。

「あんな小娘に付き合っただらズーン行き、御苦労なことだと思っていた」

さては、ただものではないのか？

もう一度刃を鳴らしてお互いに距離を取る。隙はない、つくるしかない。

アシャは引き抜いた金色の短剣をうっとうしそうに見下ろしながらつぶやいた。

「.....なぜだ」

「何？」

「なぜ、ユーノに剣を教えた」

ゼランが構えた剣をゆるりと回す。

「剣など教えなくても」

あのまますぐに屠れただろうに。

アシャの問いにゼランが微かに唇を歪めた。

「.....才能だ」

嘲笑を響かせる。

「才能？」

「あの子には天性の才能があった」

これでもカザドでは鳴らした腕だ、多くの将の教師もした。だが。

「あれほどの才能は未だ見たことがなかった」

その才能に、カザドの刺客としての自分より、わずかに教師としての自分が優った。

「始めは誤った方向に導いて早々に潰しておくつもりだったのだが」

ゼランは静かな目になった。

「ユーノの才能は、私の予想を上回った」

お前にはわかるまい。

低い声で続ける。

「自分が人生を費やして磨き上げたものを寸分違わず受け継ぎ、しかもそれをなお素晴らしく完成させてくれるだろう器に出会った教師の喜びなど」

殺さねばならない、間違った方向に導かねば、この才能はやがて我が国の脅威となる、そうわかっていても。

「ためらった、それが5年前の仕損ないだ」

吐き捨てる声にユーノのことばを思い出す。

「5年前、私を後ろから斬りつけたのはゼランだった」

掠れた声、自分の愚かさを嘲笑おうとして、そうできない傷みを含んだ痛々しい表情。

「私と別れて他の部屋の見回りに行くような振りをして、後をつけて襲ってきた.....その瞬間、皮肉だね、私は教えられたように、倒れながら自分を斬った敵の顔を見ていた。.....信じたくなかった... ..そこにあったのは、自分を父母代わりに導いてくれていた教師.....ゼランの顔だった」

微かに震える唇は今にも泣きそうで、けれど絶対に泣くまいとする強い意志を含んで引き締められて。

「衝撃だった。お父さまにもお母さまにも守ってもらえないとわかってすがつた、たった一人の相手に真っ向から裏切られて.....私はその顔を忘れた、んだ.....ううん、斬られてからの記憶を失ったんだね。.....けれど」

また襲われて、全く同じ状況で。

「みんな、思い出した」

微かに背けた視線の暗さ。

「思い出したく.....なかったよ」

騙されたままでも、それでも。

沈黙に秘めた哀しみ。

「.....ならば、なぜ」

自分の声がどろどろと澀むのをアシャは感じた。

煮え滾る怒り。

「なぜ、今になって」

しかも旅立ってしまった、既にセレドを守ることができないユーノをなぜ再び傷つけた。

問い直す前に葬ってしまいたい、その誘惑を堪える。

「.....紋章を持っている。あれを持っている限り、レアナが国を継ぐことはできない.....それに」

ゼランは苦い顔で笑った。

「いや、これもお前にはわからないことだ.....さて、とどめを、刺す！」

会話から一転、飛び込んできた剣先を普通ならば避けられない、だがしかし、アシャは。

「だから、裏切ったのか」

「くっ！」

難なく受け止めてなおかつ跳ね返す、その動きは緩やかな円を描くような動作、ゼランが不思議そうにそれを眺めた次の瞬間、顔色を変える。

「まさか、お前」

「二度も、あいつを裏切ったのか」

すると水が流れ込むようにアシャは引いたゼランに肉迫する。動きの先端に据えられた短剣は、まっすぐゼランの喉元に向かう。

「く、う！」

「、はっ」

防ごうと力任せに突き出されたこぶし、同時に振り回された剣を髪の毛一筋で躲したアシャの動きは止まらない、ばかりか、短剣を胸に抱えて回転した動きでゼランの腰への蹴り、とっさに腹を引いたゼランは膝蹴りがくと思った先で、折り畳まれていた膝から爪先までがばねのように一気に伸ばされたのに蹴られ、吹き飛んで転がる。

「がっ！」

「教師が聞いて呆れる」

呼吸を乱しもしないアシャは容赦しない。そのまま間合いを詰めて、短剣を一気に相手の首へ、動きにつられて剣を振り上げた相手に微笑み、柄を片手で受け止めて、残った片手で翻した短剣をゼランの腹に突き立てる。悲鳴を上げた相手が痙攣しながら切れ切れに叫ぶ。

「そ、の...戦い、かた...は.....ぐああっ」

「もう黙れ」

柄から力が抜けたのをいいことにそのまま口を押さえ込むのは、視界の彼方に、駆け寄ろうとして凍りついているレアナ達の姿を認めたからで。

「らずー.....お...べ.....っ！」

それでも漏れるつぶやきに、アシャは体重を乗せ刺し貫いてことばを封じた。ぐるんとゼランの瞳が白眼を剥く。が、鮮血が手元に溢れてこないのに、はっとしてアシャは相手を見た。

「アシャ.....」

低い呻きとともに、ゼランの白濁した瞳がふいにぎよろりと動いて見上げてきた。

絶命しているはずだ。

だがしかし、その瞳の奥に青白い燐光のようなものが躍る。

アシャは目を細めた。

「ア.....シャ.....」

にやりとゼランがいきなり嗤った。

「.....『運命（リマイン）』...」

ぞくりと不愉快な波が冷気を伴って背筋を這い上がる。

ミネルバの出現以来、嫌な予感が増していた。だが、こんな間近に『運命（リマイン）』支配下

(ロダ)の者がいるとは思ってもみなかった。
舌打ちして始末をつけようとする、ゼラン、いや、ゼランの見かけを被ったものがくつつくつ囓った。

「一つ……いいことを……教えてやろう…」

黒い粘液に塗れた口がかばかばと開き、汚れた舌が蠢く。

「ユーノの剣には……大きな罫を……仕掛けてある…」

「何…?」

「こいつは……『あれ』をもっと教えたがった……だが……儂は『あれ』は要らなかった……」

だから、さっさと手を打ったのだ、ラズーンのアシヤ。

「いずれ我らに……刃向かう…『あれ』は……今頃……もう居ないかもしれないが……」

今、『あれ』には我らの手が向かっているのだ。

そう囁かれて、アシヤの血の気が引いた。

「ラズーンへは……行かせぬよ……『銀の王族』……ただ一人も……」

「くっ」

万全の体勢でも『運命(リメイン)』には太刀打ちできないだろうに、今深手を負ったまま身動きできないユーノに魔手が迫っているという。

「愚か……もの」

相手が嘲る。

「俺を……誘ったのか」

「……こいつを……使ってな」

もう侵食が進んで使い勝手が悪くなっているこの男を始末する時期でもあったしな。

囓う『運命(リメイン)』の腹の傷から、ぬらぬらと溢れてきたのは腐臭を放つ黒い液体、口元からもそれを滴らせる相手に、アシヤは凍った顔で短剣をなおも突き刺し、意識を集中した。

「そんな…ことを……しても…もう……遅い……ふ……ふ…は……はは…っ……っが…あ……あ…っ」

短剣が突き刺さった部分から鈍い色の煙が立ち上る。それでも囓う相手がやがてびくびく震えながら内側から見えない炎に焼き尽されていくように開いた穴という穴から煙を上げて焦げ爛れていく。

やがて短剣を抜き放った場所から滲むように広がった黒い染みに全身覆われていったゼランは、見ている間に得体の知れない焦げた塊となった。

「……アシヤ……」

唇を噛んで見下ろしていたアシヤが背後からの声に振り返ると、真っ青な顔をしたセアラが近寄ってきている。

「見られないほうが」

「レアナ姉さまは、ね」

言い捨てて側まで来たセアラの向こうで、どうやら気分が悪くなったらしいレアナが抱えられるように皇宮の中へ運びこまれていくのが見える。

「これ……何? ゼランじゃなかったの?」

気丈に声を振り絞って、喉を鳴らしながらセアラが尋ねる。

「ゼランでした」
 薄い煙に覆われ、やがてうっすらと自ら潤み、その露で汚れを滴り落とした短剣を鞘に片付けながら、アシャは唸る。
 「今はもう『運命（リメイン）』と呼ばれたもの、ですが」
 「リメイン...」
 「ラズーンを.....この世界の存続を」
 望まないもの達、です。
 「.....何をしてるの、あなた達！」
 きっと振り返ったセアラが遠巻きにしている親衛隊を叱咤した。
 「ゼランは魔物にとってかわられていた、これはその残骸よ！ さっさと片付けなさい！」
 「は、はい...っ」
 悲愴な顔をした兵士達が数人吐き戻しつつゼランの遺骸を片付けるのを背中に、セアラがアシャを見上げる。
 「姉さまは？」
 「.....」
 「このことを気付いたの、ユーノ姉さまね？」
 「.....セアラさま」
 「じゃあ、すぐに戻って」
 厳しい顔でセアラが命じる。
 「もうこっちは大丈夫よ。あなたが腕がいいのはわかった」
 だから、今あなたが守るのはユーノ姉さまよね？
 セアラに確認されて、『運命（リメイン）』のことばが蘇る。
 『ユーノの剣には.....大きな罫を.....仕掛けてある...』
 『今、あれには我らの手が向かっている』
 「では、セアラさま」
 レアナさま、皇宮のこと、お願いいたします。
 「ユーノ姉さまほどちゃんとできなくても、頑張るから」
 ユーノ姉さまを、お願い。
 セアラの切ない声に大きく頷いて、アシャは再び馬上に戻った。

「イルファ」
 「.....なんだ」
 「これ.....何」
 「.....食べ物だ」
 何とかベッドに体を起こして食事ができる程度に回復したユーノは、じっと渡された木の器を覗き込む。
 灰色のどろっとした液体の中に茶色のぶつぶつや黄色のもやもやや緑の点々が浮いているそれを、おそるおそるさじでかきまぜ、粘り気をもって絡みついてくるのにひきつった。
 「.....おかゆ...だよね...？」
 同じようにそれを見ているレスファートが不安そうにつぶやき、そっとイルファを見上げる。運んではきたものの、なんてものを持たせたのだ、といささか責めるまなざしだ。
 「病人にはかゆ。決まってる」
 イルファは何を驚いている、と言いたげにうなづく。
 「ボクは病人じゃない」
 「怪我人でも同じだ」
 「怪我、はもう治ってる」
 「ほー」
 イルファが不穏な表情で眼を細めた。
 「レスをあれだけ泣かせたような傷がか？ 生死の境を何日もうろうろしたくせに」
 「こうして起きられる」
 「だが歩けない」
 「歩けるさ.....っ」
 「ユーノ...っっ！」
 ぐい、と体を捻ったとたんに背中を駆け上がった痛みに固まると、レスファートが半泣きになって飛んできた。ユーノの体を抱きかかえるようにしがみつき、ね、おねがいだから動かないでよ、まだすごく痛いんでしょ、と甘えるようになじるように訴えられ、渋々ベッドに戻る。
 「そらみろ」
 「イルファ！」
 じろりと見遣ったアクアマリンの瞳は炎を吐かんばかり、レスファートがきりきりした声で言い返す。
 「もうあっち行ってて！ ユーノはぼくがみるから！」
 「はいはい.....けど、それは食えよ」
 「.....何が入ってるのか聞いていい？」
 「麦を引いたのにきのことペクと黒砂糖も入れたんだぞ」

「……うげ…」

「……それ……おかゆっていうの…」

甘いやら酸味があるのやわからない内容にユーノもレスファートも茫然とする。

「栄養はある」

「……味は？」

「わからん」

「は？」

「俺は食ってない」

「自分が食えないものを人に食わせるのか！」

「食えないんじゃない、食わないんだ」

ふん、とイルファは腕を組んでユーノを見下ろした。

「俺は病人じゃないからだ」

「汚ねえ……」

「どうとでも言え。とにかく俺がアシャに約束したのは、お前を回復させるまでそこから動かさんことだ」

はっとしたユーノに、食うまで動くな、と言い置いてイルファは部屋を出て行く。

「ユーノ怪我してるのに、そんな言い方しなくでもいいじゃないか！」

珍しく声を苛立たせて叫ぶレスファートにユーノはさじを取り上げた。器を引き寄せ、立ち上る湯気の匂いにぐらぐらしながら、一さじ掬い上げる。

「ゆ、ゆーの…」

ぼく、半分ぐらい食べてあげようか？

悲愴な顔をして覗き込むレスファートに、大丈夫だからお水汲んできて、と頼み、覚悟を決めて口に運んだ。

「ぐ」

「……だい……じょうぶ……？」

「……」

口の中に広がった混乱と暴走の極みの味を確認する前に、ともかくごくごく飲み下して食べていく。脳裏に浮かんでいるのは険しい顔で駆け去っていったアシャ、あの速度ならかなり早くセレドに戻れただろう。ゼランが何を企んでいたにせよ、きっと阻止してくれたはずだ。レアナも安心しただろうし、父母も頼もしく思っただろう、いっそそのまま。

「ユーノ？」

動きを止めたユーノにレスファートが慌てて水を差し出してくれる。

そのまま、ここに居てくれと。

「……」

器のかゆを平らげ、水を受け取りゆっくりと呑んだ。

アシャは、戻ってこないかも、しれない。

「ユーノ…」

「大丈夫。これ、イルファに返してきて」

「うん」

「次はボクが作ってやるって言っというて」

「わかった！」

嬉しそうに器を抱えて離れていくレスファートに微笑んで、のろのろとベッドに横になった。

「、つ…つ」

歯を食いしばり、一瞬走った痛みを堪えて横になる。近くの机の小袋を見遣り、まだ痛み止めを使うほどじゃない、と判断して眼を閉じる。

アシャは帰らないかもしれない。

あれほどの技量、あれほどの美貌、別にこんな辺境に居なくても、ましてやユーノに従って旅などしなくても、アシャには何の責任もない。ここまでは流れについて来るしかなかっただろうが、レアナが引き止めればこれ幸いとセレドに残ることもできる。

「そのほうが、いいかもな」

つぶやいて苦笑した。

側に居ると甘えたくなる。たった数日の旅でさえ、これほど離れがたく思うのだから、ラズーンまで一緒に旅をしたら諦められるものさえ諦められなくなる。

しかも、アシャはユーノの傷を知ってくれている。誰一人知らなかった事情をわかってくれている唯一の人間、妙な事情も面倒がらずに受け入れてくれた。みっともない体も嫌がらずに手当てしてくれた。得体は知れないが、きっと誠実な男なのだ。

そういう人間には、この先もう二度と巡り会うことなどないだろう。

目を開けるとゆらりと溜まった涙で視界が揺れる。

「うん、きっと.....でも」

それでも、アシャが好きなのは、レアナで。

ユーノはその、妹で。

それはきっと、死ぬまで変わらない現実、アシャが誠実であればあるほど。

「がんばれる...かなあ.....」

今までずいぶん辛いことも耐えてきたと思っていた。少々のことなど、もう笑って流せると思っていた。けれど、毎日あらゆる瞬間で、自分の気持ちがアシャを探して傾いていくのがわかる。そこだけ何か特別な力が働いているように、どんどん引き寄せられ落ちていく。探すまいとして振り向き、声を聞くまいとして話し掛けてしまう愚かさ、間近に居て体温を感じて、しかも自分がへたっているときに優しく庇われてはもうだめだ。

そこまでは強くない。

「.....でも.....がんばら.....なきや...」

アシャに悟られたら気遣わせる。レアナに知られたら壊してしまう。絶対に見せてはならない、気付かせてはならない、ユーノがアシャを望んでいると。

「がんばって.....ラズーンへ行って...それから...できるだけ.....早く.....戻って」

アシャがどこかへ行くと言い出さないように、レアナがどれほど価値のある相手か話して、もちろん、旅に慣れた身ならば一ヶ所に留まるのは辛いだろうけど、ユーノが見ている限り、それほどセレドは不愉快な場所ではなかったようだから、レアナとうまくいけば腰を落ち着けてくれるかもしれない。

アシャが居てくれればセレドはかなり安定する。ユーノの付き人で居る間にも、小さなもめ事にくれた助言は的確で、皇はそういうことには緩いから、アシャとレアナが結ばれてセレドが落ち着きカザドや周辺の脅威からも守られるとわかれば、おいおい認めてくれるだろう。そのうちに子どももできるだろうし。

「.....」

瞬きして零れ落ちた涙に慌てて手の甲をあてて隠し、漏れそうになった声を殺した。

きっといい夫婦になる。

きっと幸せな国になる。

みんな喜んで。

みんな安心して。

きっと、アシャも幸せに、なる。

「.....がん...ばれ...」

つぶやいた。

「.....がん...ばれる.....よ」

好きな人が幸せになるのだから。

「うん.....がんばれる...」

アシャが、幸せに、なる。

「が.....んば.....」

抱き寄せてくれた胸の温かさ、しがみついた腕の強さ、庇ってくれた背中、何よりユーノ、と心配そうに呼び掛けてくれた瞳を思い出して胸が詰まった。

幸せになるなら、戻ってこなくていい。

セレドを守ってくれるなら、帰ってこなくていい。

でないと、これ以上好きになってしまったら。

「.....がんばれ.....ないよ.....」

ひ、く、と息を引きかけた矢先、

「痛い、ユーノっ！」

戸口から甲高い声が響いて、どきりとする間もなくレスファートが飛びついてきた。

「きずが痛いっ」

「レ、レス...」

がばりと一気に頭近くを抱きかかえられて、逆に傷が引きつれた瞬きしたユーノの耳に、

「女の人だから、むりしないで」

「っ」

言い聞かせるような声が届いてぎよっとした。慌てて見上げると、ちゅ、と目元の涙にキスしてき

たレスファートが小さく片目をつぶる。

「イルファにはないしょなんだよね？」

「レス……いつから」

「……ユーノ、ぼくは」

レクスファの王子なんだよ？

そこばかりは一瞬大人びた声でつぶやいて、レスファートはにこりと笑った。

「それに」

好きな人のことはよくわかるもんだよね？

「ぼく、ユーノ、大好き」

しゃべらないから安心して。でもどうして男のふりしてるの、そう尋ねるレスファートを呆気にとられて見ていたユーノは、

「まい……ったな」

「ふふ」

くすぐったそうに笑ってレスファートが抱きついてくるのを抱き返す。

「…そ…か」

「ん？」

「一人でも…ないか」

柔らかな温もりにほっとした。

目を閉じて深呼吸する。

そうだ、確かにユーノの思いは報われないかもしれないけれど、それでもアシャはこの世界で一緒に生きていってくれるのだ。

「それで…よし……って考えれば……いいか」

「なにが？」

「ん、あのね」

大好きな人が居るってことは、いいことだっていうこと。

そうゆっくり話し掛けたとたん、妙な気配を感じて窓を振り向く。

「ユー……っ」

「レ、ス…っ！」

ガスッ！

レスファートを庇って一緒にベッドから転がり落ちるのが精一杯だった。

ベッドに叩き付けられたのは壊れた窓枠、その向こうに見覚えのある緑の複眼がぎろぎろと室内を覗き込むのに、レスファートが小さく悲鳴を上げる。

「な、に…っ」

レガ、だ。

次に突き込まれた一撃でベッドが砕かれるのに、ユーノはかろうじて机の小袋を握り、レスファートを抱えて部屋を飛び出した。

「何だっ」
慌てて飛び込んでこようとしたイルファに突き当たる。
「っぐ」
厚い胸板に跳ね返されてあやうく室内に戻されかけ、必死にこらえた瞬間背中に激痛が走ってユーノは崩れた。
「ユーノっ！」
悲鳴を上げてすがってくるレスファート、何だ何だとうろたえた顔で覗き込むイルファを顔を歪めて見上げ、
「レガだ...っ」
「それが？」
間抜けた声でイルファが部屋を眺め、そこから緩やかに引き抜かれる剛毛の脚に瞬きする。
「ちょっと待て、あれは太古生物で、そこにもいるあそこにもいるって代物じゃ」
山賊（コール）を操っていたやつはお前が倒したんじゃないのか。
茫然としながらイルファが尋ねた。
「そうだ、その通りだ。」
遥か昔に絶滅したはずの怪物達。
それがシェーランに居るだけでもおかしいことだったのに、まだもう一匹生きているばかりか、再びユーノの前に現れた。太古生物が何かの理由で生き残っていたにしても、確率としては異常すぎる。
いつの間にか太古生物が世界に溢れ返っていたか、それとも。
「でも、居る、おまけに」
なぜかボク達を狙ってる。
そう、そう考えた方が納得できる。
けれどなぜ？
唇を噛んだユーノの頭の隅に閃いたのは、流浪の旅人にしては眩すぎる容貌の謎の男。
（アシャは驚いていなかった）
太古生物の存在を、それと接触する可能性を、まるで知っていたかのようだ。
（なぜ？）
「一体どうなってやがる！」
イルファが舌打ちしながら身を翻す。
「なんだってこういろんな太古生物が生き残ってる！」
「いろんな？」
それはどういう意味だ、そう確認しかけた矢先、
「ユーノっっ！」
グワッシャツツ！
「きゃあつ」
すぐ側の壁がきしみながら破れてレガの頭が覗いた。ぎろりと見回してくる緑の複眼が粘りつく油のような輝きでユーノ達を捉える。悲鳴を上げたレスファートがすがりついてくるのを抱える。
「イルファ、剣！」
「ほ.....と、いかん！」
つい剣を投げ渡しかけたイルファが危うく手元に引き止める。
「アシャに止められてるんだっけな」
「そんなこと言ってる場合じゃない！」
ユーノは急いで小袋から薬を含んで呑み下した。苦い味に顔をしかめて、身構えながら叫ぶ。
「傷が治るより先に殺されるだろっ！」
「いいからそこにいろっ！」
イルファが吠えるように叫んで、大刀を抜き放ちながら戸口から飛び出していった。応じるようにレガが体を引き、後ずさって向きを変える。
「だめだ、イルファ、一人じゃ殺られる！.....？」
レスファートを突き放しながら立ち上がろうとして、ユーノはレガの背中に黒々と身を潜めている影を見つけて目を見張った。
「人...？」
漆黒のざんばらの髪をなびかせ、ユーノに答えるように振り向いた瞳は真紅、嘲笑う形で歪めた唇も血を塗ったように赤い。穀物袋のような布目の荒い黒い服、レガの背中にひたりと吸いつくように腰を降ろした異形のは、男とも女ともわからない。ぎよろぎよろと大きな目でユーノをねめつけると、ふいに顔の向きを変えて何ごとか甲高く叫んだ。
呼応するようにレガがあ的女性の悲鳴のような叫びを上げ、速度を上げて目の前に飛び出したイルファに迫る。
「く、そっ！」
立ち上がろうとして背中の痛みには呻き、ユーノはもう一粒、薬を口の中に入れて噛み砕いた。飲み下す喉に灼けるような苦味、えづきながら何とか呑み込み、獲物を求めて周囲を見回す。
「だめだよ、ユーノ！」
レスファートがはっとしたように飛びついてきた。
「真っ青だよ！」
そういうレスファートも負けず劣らず顔色が悪い。気付いてユーノは厳しく叫んだ。

「離れて、レス！」

びくっと身を竦めて、レスファートが固まる。

「心にも近付くなっ！」

「っ」

ぎゅっとこぶしを握り目を閉じたレスファートが半泣きになる。

ごめん。

心で謝って、けれどレスファートを部屋の隅に押しやった。

へたに心を近付けられては、戦えるものも戦えなくなる。ユーノは我慢できる傷みでも、レスファートを思っただけで自分を庇ってしまう。

そんなことでは生き延びられない。

立ち上がり、よろめきながら部屋を進んだ。すぐに呼吸が上がってくるのを、早く薬が効いてくれればいいのに、と歯ぎしりしながら願う。

何とか戸口に辿り着いたユーノの眼前、いくらイルファが巨漢とは言え、レガの前では四肢が動く人形のようにしか見えないまだるっこしきで剣を揮う姿があった。

レガはまだ遊んでいる。前足でイルファの動きを翳っては、何度かのしかかって威嚇している。

「ち、くしょ...っ」

娘達の姿が脳裏を過った。

確かに無神経で大雑把で失礼な男だけれど、それでもアシャが頼みとしていること、レスファートの守りであるのは変わらない。こんなところで、娘達のように屠られてしまっただけでレクスファの王にも申し訳がたたない。

(私と、関わった、から、なんて)

次々死なれては、この先とても旅などできない。

「剣、を...どこへ...」

少しずつ背中中の痛みが薄れてきた。だが、同時に体の感覚が鈍くなってきた気もする。

なるほど痛み止めは痛み止めだが、つまりそれは全身の知覚を低めるものだったのだ、とユーノは気付いた。

「ってこと、は」

はあはあと喘ぎながら戸口にもたれる。

「あんまり、動け、ないって、こと、か」

あの洞窟でレガの巨体は身動きしにくかった。だからこそそのユーノ達の利点、しかもアシャで気を逸らせた一瞬に躍りかかるのに十分な場所も手がかりもあった。

だがしかし、ここは森の外れ、森の中に逃げ込んでしまうこともできるが、あの重量で追ってこられては木々など盾にもならないだろう。ましてや、行く手を樹木に遮られてしまい、逆にユーノ達に不利になる。

どうする。

「ユーノ！」

こちらに気付いたイルファが汗塗れになりながら叫んだ。

「出てくるなど言っただろうが！」

「人のことより、自分の心配をしるよっ！」

「わ、なに、この鳥さんっ」

「クエアッ！！」

「あ、ごめん」

鳥じゃない、ちゃんとそう聞こえたのか、レスファートが謝りながら、おそるおそる近付いてきた。

「サマル、カンド、っていう、らし...」

「ユーノ！」

「おいっ！」

何とかしのげた、そう思ったとたん視界が眩んだ。前のめりに倒れていくユーノを、どたどた近寄ってきたイルファが抱え込む。

「う、おっ」

うろたえた声が耳元で響いて、うるさいな、と顔を歪めたのが最後の意識、その端を微かに微かにつぶやきが掠める。

「お前...女...っ？」

ああ。

ばれちゃった。

ユーノはくたりと崩れ落ちた。

3. 盲目の導師

「ユーノ……」

「……はい」

粉々に砕けたベッド、風が吹き込む状態の部屋の片隅、とりあえず敷き藁と布で床に盛り上げた寝床で、ユーノはさすがに首を竦めて相手を見上げた。

「動いた、ってなあ？」

ついさっきセレドから戻ったばかりのアシャは、埃塗れの薄汚れた顔にぎらぎらと正視に耐えない光を瞳に浮かべながらこちらを見下ろしている。表情は悪鬼一步手前、あれほど心穏やかな美形がここまで殺気立つのかと思うほどの怒りの形相、声は人みな凍りつかせるという吹雪を思わせる。

「ま、まあ……その」

「まあそのじゃないっ！」

いろいろと事情があつてほら、そう言いかけたユーノをばしりと遮ってアシャが吠える。

「動くなど言っただろうが！」

「う」

「大人しくしてると言った！」

「だ、って」

「だって糞もないっ！」

断じるアシャの綺麗な形の唇から糞、と叫ばれ、思わず背後に居たイルファも引きつる。いわんや、側でイルファの上着の裾を握りしめているレスファートは、背中から見てもアシャの激怒が伝わるのだろう、ぎゅっと唇を噛みながらもさすがに反論しない。

「で、でもっ」

他にどうすればよかった。

誰も居なかった、助けてくれるような相手は居なかったのだ、そう言いかけて、ユーノは堪える。その代わり、

「無事だったんだからいいだろっ！」

元気を証明するように声を張り上げた。

レガ襲撃から丸一日ぐっすり眠った。きっと痛み止めにそういう成分が入っていたのだろう、これまでないほど熟睡し、空腹に目覚めれば、レスファートがいそいそと、作り方を教えてもらったという柔らかでおいしい粥と煮物を持ってきてくれ、しっかり食べてどンドン眠った。

「それに大人しくしてるなんて言っていない、大人しく聞いておくって言ったんだっ！」

「こ、のっ」

「お、おい」

ずかずかと部屋に踏み入ったアシャがユーノの側にしゃがみ込むのにイルファが思わず声をかける。

「心配したと言ってるんだぞ」

「ボクは強いんだ…それに、居なかったやつにあれこれ言う資格なんてない」

じろりと睨みつけるユーノにふい、とアシャの顔から表情が消える。

「な…っ」

いきなり顎を捕まれ引き寄せられてユーノは驚いた。

「側に居た」

「は？」

「『運命（リマイン）』が動いたと知っていたら……離れなど、しなかった」

冷やかな声はさっきよりも温度が低い。

「お前を置いて、行きはしなかった」

睦言のような甘いことばと、表情が釣り合わない。凍りついた紫の眼とも。

けれど、その声の響きも震えも切なげな調子も、すべてが見えているものを裏切って伝えてくる、お前が大事なのだ、と。そちらに踏み込んで読み取りたくなる、自分への好意を、愛情を。

「…っ」

天性の女たらしだ。

呑まれそうになってユーノは慌てて眼を閉じた。対抗できそうな唯一のことばにしがみつく。

「『運命（リマイン）』って何だよっ」

「！」

びく、と明らかに顎を掴んでいた手が震えてアシャが息を呑む気配がした。

「……『運命（リマイン）』って、あいつのこと？」

ゆっくり目を開きながら、続けて尋ねる。

「レガの背中に張り付いて……レガを操っているように見えた」

「……」

アシャが静かに手を離した。動かない表情のまま、そろそろと身を引いていく。

「……見たのか」

やがて、どさり、とうとうしそうにつぶやきながら、床に胡座を組んだ。ふいに疲れ切ったような様子で、のろのろユーノを見る瞳が、さっきの勢いを失ってしまっている。

「黒い髪、赤い目の、男とも女ともつかない、人、みたいなもの」

ユーノはアシャの無言の問いに応じた。

「……あいつは、ボクらを狙ってる？ ひょっとして……」

ごく、と唾を呑む。
「ボク、を？」
「.....どういうことだ」
イルファが重々しく唸りながら腕組をした。
「俺の知らない話がずいぶんあるようだな」
「.....」
「そいつが女だってことも」
「っっ！」
ぎょっとしたようにアシャがユーノを振り向いた。見る見る青くなっていく顔に逆にユーノが驚く。
「いや、あの、違う、イルファが何か勘違いして」
「勘違いなもんか、触ればわかるだろ、あの感触は」
「感触...？」
イルファの突っ込みにアシャが上の空で繰り返す。
「触れば...？」
「あ、あのね、アシャ」
「触らせたのか、こいつに？」
「え、いや、そうじゃなくて、ボクが倒れたときに」
「どこまで？」
「は？」
「ああ、そいつがひっくり返ったから、抱き上げて運んだ」
イルファが何か文句あるのか、と言いたげに顎をしゃくって言い放つ。
「抱き上げ」
茫然とした様子でアシャが繰り返し、ユーノは不安になった。
「あの.....どうしたの、アシャ。大丈夫？」
「あ〜...」
ふいにレスファートがひくっと引き付けるように顔を歪めた。見ると、今にも吹き出しそうな表情で見返してきて、
「あのね、アシャ」
「なんだ」
「.....もうちょっと話してくれたほうがいいみたい。話せることだけ」
素早く片目をつぶったのはイルファには見えなかったはずだ。はっとしたようにアシャが我に返る。自分が何をしていたのか、どういう振る舞いをしていたのか、ようやくわかったように少し血の気が戻る。やがて、ゆっくり大きな息をついて、諦めたように立ち上がった。
「わかった、事情を話そう」

「『運命（リメイン）』というのは、簡単に言えばラズーンへの敵対者、だ」
アシャは横たわったユーノの側に腰を降ろし、イルファとレスファートも近くに寄って座る。
「言い方を変えれば、この世界の『秩序』の破壊者.....ユーノ、ラズーンの役割は？」

「あ、えーと」

突然質問されてユーノは戸惑い、慌てて幼い頃に学んだ知識を掘り返す。

「ラズーンは世界の『統治者』。諸国を束ねる中央機関。最大の王国にして性別を持たぬ神々が住まう、伝説と栄光に包まれた場所」

「その通りだ」

アシャはどこか鬱陶しそうな顔で頷いた。

「政治的な意味でも、地理的な意味でも世界の中心と言っていい、が、それ以上の役割がある。ラズーンはこの世界の……」

少し言い淀み、ことばを探るように天井を見上げたが、小さく溜め息をついて、

「構成一つ一つを生み出し造り出す源でもある」

「構成、一つ一つ？」

「もともとラズーンには二つの部分があった。『統治者』と『判定者』だ」

引っ掛かりかけたユーノをさらりと流して、アシャはことばを続けた。

「お互いに必要な役割を果たし、世界はそれで安定していた、だが」

眉をひそめた顔に暗い翳りが滲んだ。

「ラズーン支配が長く続くうちに、『判定者』の役割を担っていたものが、自分達こそこの世界を治めるべきものであると言って『運命（リマイン）』を名乗り、ラズーン支配を拒み出した。我らなしにはラズーンは有り得ない、ならば我らこそ、支配の長であるべきだ、と」

「……『判定者』の役割って何？」

「暗殺」

ぼつりと応じたアシャが凄みのある笑みを広げてユーノを見返す。

「『統治者』の意図に背くもの、または『統治者』の手違いで起こった事件やそれに関連する存在を消す、それが役割だった」

「世界は、見えてるほど平和じゃねえ、そういうことか？」

イルファが確かめる。

「そうなるな」

アシャは苦い表情でユーノから目を逸らせた。

「力づくの、とうちは」

レスファートが暗誦するようにつぶやく。

「あーそいしか、うまない、って」

「その通りだ」

アシャは静かに繰り返した。

「望まぬ方向と違う存在を押しつぶす愚を、誰よりも知っているはずのラズーンだったが、それに代わる方法もまた見つけられなかった」

低い声が掠れて続く。

「200年ごとの祭の意味を、どれほどの人間が理解していたのか、ということだ」

「200年ごとの祭？」

「……ラズーンは、200年祭を行う」

アシャはゆっくりと顔を上げた。緩やかに巡らせた視線でユーノを捉える。

「その時世界は変動する」

紫の瞳が言い様のない妖しい煌めきに満ちた。

「全ての根底から揺さぶられて」

「……」

ごくく、とイルファが唾を呑む。

レスファートも緊張した顔でアシャを見つめる。

ましてやその瞳に正面から見据えられて、ユーノはことばを失った。

（ラズーンの200年祭）

そんなことばは聞いたことがない。200年と一口に言うが、寿命を全うしても8世代ほどが生きる時間を一括りにしてしまう時間単位は、国の歴史にしか存在しない。

「っ」

ふいにそれがセレドが成り立った時から現在に至るまでの時間だと気付いて、ユーノはどきりとした。まるで、セレドがラズーンのその祭りによって生まれ、祭りによって滅びていくような不安な気持ちになって、思わず口を開く。

「それって」

今あちこちに現れている太古生物と関係があるのか。『運命（リマイン）』と呼ばれる者が襲ってきたことや、カザドの魔手が伸びてきたこととも無関係ではないのか。

ひょっとして今世界は大きく崩れていこうとしていて、その余波をセレドも受けている、そういうことではないのか。

「ボクがラズーンに招かれたことにも関係があるの？」

「ラズーンに招かれた？」

「！」

しまった。

イルファが訝しそうな声を上げて、ユーノは舌打ちしかけた。側に居るのを失念していた。

「それはどういう意味だ？」

イルファがうっそりと問いかけた。
「ああ、サマルカンドを慣らしたそうだな」
問いを巧みに遮ってアシャがふいと表情を緩める。
「え、あ、ああ、あの、クフィラ？」
ラズーンの200年祭とは何なのか。そして、そんなことを知っているアシャは一体何者なのか。
そういう疑問をもろとも逸らされそうな気配はあったが、イルファに突っ込まれては困るものもある。

ユーノは慌ててアシャに応じた。
「慣らしてなんかいないよ、ただ無我夢中で」
「サマルはもう一人の主人を見つけた、そう言ったぞ」
アシャはにっこりと嬉しそうに笑って立ち上がった。砕けた窓枠に近寄って隙間から乗り出し、
「サマル！」
左腕を突き出して叫ぶと、激しい羽音が響いて白い鳥が舞い降りてくる。
「今回はお手柄だったぞ」
腰あたりで軽く横へ突き出したアシャの片腕に乗るクフィラはアシャの頭を軽く越える大きさだ。
「クウア？」
どこか甘えた声で鳴いて、首を曲げてアシャの頭に自分の頭を寄せる仕草、重くはないのか、そう思った矢先にアシャがユーノを振り返る。

「呼んでみる、ユーノ」
「うん」
ユーノは寢床に起き直った。

「サマルカンド」
「クエツ！」
ふわ、とアシャの手から舞い上がったクフィラは大きさに似合わない静けさを保って、ゆっくりユーノの近くに舞い降りる。

「ク、ウ」
そのまままるでお辞儀をするように頭を下げ、ユーノがつられて伸ばした左腕めがけて浮き上がる。鋭い爪を一瞬だしたが、ユーノの腕を掴んだ瞬間は、赤ん坊でも掴むような柔らかな感触しか残さない。そればかりか、レスファートよりも軽くて、ユーノは少し驚いた。

「いい子だね」
そっと囁いてもう片方の手を伸ばす。

「ク、クウ」
クフィラは喉の奥で微かに鳴いて、甘えるように頭をユーノの掌に押し付けた。滑らかで艶やかな羽毛の感触、生き物の温もりがじわりと伝わる。

「それをお前にやる」
「え？」
「護衛用だ」
アシャがぼそりと低い声を出した。
「俺が間に合わなかった時のために」
「でも、そんな」
「クッ、ガッ」
ふいにクフィラが威嚇するように鋭い声を出して、ユーノはびくりとした。冠毛を軽く逆立てている。忙しく見開いて瞬きする瞳は冗談じゃない、と怒っているようだ。
「サマルカンドも心配だそうだ」
アシャがゆっくりと目を細めて笑った。
「俺と同じように」
「アシャと...？」
「お前が倒れたまま目を覚まさないと聞かされた時の俺の気持ちを」
細めた目の色が変わる。
「ちょっとは考えてくれ」
「あ...」
それは聞きようによっては甘いことば、思わず勝手に頭が優しい空想を広げようとしたとたん、
「聞きたいことがある」
イルファが不穏な調子で唸った。胡座を組んだまま、がっちり腕を組み、アシャとユーノを等分に見比べる。
「俺はずっと悩んでいた」
「何を」
アシャが眉を寄せた。
「お前が男に興味がないのか、俺に興味がないのか」
「.....」
一瞬白々とした空気が座に広がった。
サマルカンドでさえ、微妙なものを感じ取ったのか、ふいとユーノの腕を離れて部屋の隅へ舞い降り、自分に用がないと見極めたように窓の裂け目から再び舞い上がって消える。
「.....イルファ」
アシャがうんざりした声を出した。
「俺は男に興味はないし、お前にはちゃんと友人としての礼を尽してる」
「にしても、そいつに比べて扱いが軽い」
「当たり前だろう、ユーノは主人...」
「だが、理由がわかった」
「は？」
「そいつは、女だ」
「っ、イルファっ」
ぐい、と指でまともに示されて、ユーノは思わず噛みついた。
「馬鹿なこと言い出すなっ」
「お前はそいつに惚れてるから、俺より扱いが丁寧なんだ」
「っ」
全身火を噴くかとユーノは思った。アシャのことなのに、自分の気持ちを指摘されたようで、居置かれなくてアシャの方を見られない。
「ボクのどこかが女だよっ！」
「あるだろうが、感触の違いが」
「剣を持ってこいよ！」
今すぐ立ち会い、多少柔らかくて細っこくても、イルファの相手ぐらい簡単だ、叩きのめしてそのふざけた台詞を撤回させてやる。
らしくないほど取り乱してしまったのは、幾度となく夜会で味わった居心地の悪さのせいだ。来訪者をもてなす宴で、ユーノが相手をした人間がいつも伝えてきた、レアナ達の方をうらやましげに見遣る気配。聞こえないでも思ったのか、中には、こっそり仲間うちに、ああ、あちらがよかったなあ、とつぶやくのも居て。
きっと同じような困惑をアシャも感じているに違いない、好き勝手に判断されて。
そう思うと我慢できなかった。
「怪我人を相手にする趣味はない」
「しつこいぞ、イルファ、怪我ならとっくに...っ！」
ふいに肩を掴まれてぎよっとした。振り返る間もなく引き寄せられたのはアシャの胸、包まれるように回った腕が次の瞬間、前の合わせを解き、一気に肩から衣服をずり落とす。
「っっ」
さすがに、イルファの目の前で包帯で巻かれた薄い胸を晒されてユーノは凍った。レスファートも大きく目を見開いたまま声もない。
「あのなあ、イルファ」
無意識に服を引き上げようとした腕を止められ、泣きそうになったユーノの耳に、本当に嫌そうな

不愉快そうなアシャの音が頭上から落ちてくる。

「よく見ろ」

「おい」

「このどこが女の体だ？ え？」

ぴたぴた、とアシャの手がユーノの胸の上で躍った。

「待て」

「こんな薄っぺらい女の胸があるか？」

返ってイルファの方が戸惑い、心配そうな目でユーノとアシャを交互に見る。

「それに肩にも腕にも傷だらけ、女がこれだけ傷を負って、無事に済むと思ってるのか？」

「まあ、そりゃ...」

イルファが無遠慮にじろじろと肩から胸を見た。

「しかし.....凄い傷だな」

「幼い頃から剣術に明け暮れたそうだ」

アシャが淡々と言い放って、もういいだろ、と衣服を肩に引き上げてくれるのを、ユーノは必死に引き寄せる。

「そこら中に怪我をして、みっともないから見せたくなかったんだ、な、ユーノ」

それに、お前にくらべれば、どんなやつだって筋肉は柔らかいってことにならないか？

アシャが軽く言い放つのに、竦みそうになる気持ちを引き上げて笑った。

「あーあ、見られちゃった」

ドコガ女ノ体。

「せっかく生まれついでに剣の天才だと思われたかったのにな」

コンナ薄ッペライ女ノ胸ガアルカ。

「ほんと傷だらけなんだよ、他のも見る？」

ミットモナイカラ見セタクナカッタ。

(アシャも、そう思ってたんだ)

泣き出しそうなのを堪えた。

(みっともないって、思ってたんだ)

「いや.....もういい」

イルファが不承不承首を振る。

「わかった。つまり、お前は主人だからそいつに優しくて、そいつに惚れてるわけじゃないんだな？」

「俺にも好みと言うものがある」

アシャが背後で苦笑した。

「可愛い女は一杯知ってるからな」

「.....ボクにも、好みがあるよ」

衣服を整えて何とかアシャの胸から離れ、ユーノはイルファを睨みつけた。

「次に同じこと言ったら、今度こそぶっ飛ばす」

「わかったわかった、悪かった悪かった。そうだな、第一、女ならお前がそんな扱いをするわけはないな」

詫びに粥でも作ろう。

「ぼく、が！」

立ち上がったイルファにはっとしたようにレスファートが立ち上がる。

「ぼくが、作るよ、すごく、おいしいのを。ね……ユーノ…？」
 いたわるように振り向くアクアマリンの瞳が微かに潤んでいるのに、ユーノは微笑んだ。
 「うん、頼む」
 「俺の粥のどこがまずい」
 「ぜんぶ」
 こともなげに言い返して、レスファートがイルファを部屋から追い出していく。
 二人の足音が水でも汲みに行ったのかばたばたと遠ざかっていくのを耳に、ユーノはゆっくり俯いた。
 「ユーノ、」
 「ありがとう、アシャ」
 何か言いかけたアシャのことばを遮る。
 謝罪も、言い訳も、説明も、何も聞きたくなかった。
 「おかげでばれずに済んだよ、とっさの機転、すごいね、助かった」
 「いや、俺は」
 「それで、実は今ので傷がちよっと痛くなって」
 のろのろと顔を上げる。まだ振り向けるほど立ち直れていない。まっすぐ前を向いたまま続ける。
 「痛み止めが欲しいんだけど、だめかな」
 尋ねる声が平板だ。
 「持ってくる」
 「うん」
 背後からアシャが立ち上がるのと同時にそろりと横になって壁を向いた。零れ落ちた涙はぎりぎり何とか見えなかったはずだと声を励ます。
 「ひょっとしたら、寝てるかもしれないから、そうだったら、起こさないで」
 「……わかった」
 「それから」
 ゆっくり目を閉じて声が震えないように頑張る。
 「明日には、ここを出よう」
 「え？」
 「どうしても早く、行きたいところがある」
 いつかセレドを出られたなら行ってみたいと言ってたところ、ラズーンへの道中にあっただろう？
 「ああ、ネークの導師、か」
 「うん、どうしても」
 どうしても、早く行きたい。
 「世界が変動するなら、なおさら早く」
 「………わかった。道をあたっておこう」
 「お願い」
 アシャはそれ以上追求することもなく部屋を静かに出て行く。
 俺ニモ好ミト言ウモノガアル。
 (そんなこと、わかってる)
 一人になった部屋の中で、ユーノは体を竦めてきつく唇を噛み締めた。

「この森を抜けるとネークに入るぞ」
 「ふうん……つつ」
 アシャの声に手綱を引いたユーノが微かに眉をしかめる。
 「痛むのか？」
 「たいしたことないよ、あれだけ斬られたわりにはずいぶんまし」
 笑い返したユーノが、それでも背中をなるべく捻らないようにしているのに、アシャは無理するな、と言いかけてことばを呑む。
 「今日中に入れるかな」
 「ああ、大丈夫だろう」
 「そう」
 ほっとした顔でユーノは馬をすすめる。
 (無理をさせているのは俺だ)
 アシャの胸中は苦い。
 イルファに女ではないかと疑われてから、ユーノはことさら元気に振る舞おうとしている。よく笑い、よく食べ、夜もそうそうに眠りにつく。
 確かにひたすら傷を回復させようとしていると見えるが、時々追い詰められたような顔をして背中を向けるときがあつて、その姿は誰も助けてはくれないのだ、そうつぶやいているようにも見える。
 (無理もない)
 アシャは溜め息をついた。
 (あんなことをするような付き人など、安心できやしない)
 いくらユーノが女だと思われると、この先ややこしいことになるとはいえ、他にいくらでも方法があつたはずだ、と冷静な今はそう思う。

けれどあの時、レガの襲撃に遭い、しかもユーノが怪我を押して戦おうとして気を失ったと聞いたとたん、アシャは頭の中心が真っ白になって自分が自分でなくなるような衝撃を覚えた。

話し続けるイルファを押し退けて、今はもう目が覚めている、大丈夫そうだと聞いても、自分の目で確かめるまでは信じられなかった。あげくに、人事不省のユーノをイルファが抱き上げ世話をしたなどと聞かされて、いくらでもごまかせるはずのラズーンの内情まで打ち明けてしまったのは明らかにアシャの失態、それもこれもユーノが事情を知って大人しくしてくれるならと思ったのだが、逆に煽ってしまった感じもしてなおさら焦った。長年の友、サマルカンドをつけて、これで一安心、そう思った矢先のイルファのことば。

『そいつは、女だ』

まだ白っぽく穴が空いたような感覚の頭に、音をたてて紅蓮の炎が燃え広がるのを感じた。

なぜ断言できる？

断言できるほど、ユーノに長く触れていたのか？

断言するほど、ユーノが何か話したのか？

俺がいない間に、イルファだけに？

まさか。

俺よりイルファを信じると？

俺よりイルファを頼りにしたと？

まさか、イルファに自ら望んで身を委ねた、とか？

イルファと言い合っているユーノを引き寄せて、そのまま目の前で唇を奪ってしまう、俺のものだから触るな、そう言いかけた自分に気付いたときにはユーノの肩を掴んでいて。

離せ。

そう心は命じたのに。

タシカメロ。

そう荒々しい叫びが響いて。

徴を目にしてしまったら俺はどうするつもりだろう、そうどこか遠くで思いつつ、素早く巡らせた機転がどれほどユーノを傷つけるのか、あの一瞬思い及ばなかった。

ずらした衣服の下の肌は出て行く前と同様、傷を刻まれてはいたが、どこにも愛撫の跡はなかった。けれど、ユーノを女性と認識したならこの先はわからない、そう思った瞬間に、イルファがユーノにどんな興味も持たないようにしておかなくては、と強く思った。

掌におさまる細い肩を、指の下に当たる柔らかでしなやかな弾力を、そこに巻かれた包帯への怒りに握りしめたくなる、密やかな膨らみを、触れながら考えていた、凍るような怒りで、他の誰にも、二度と再びユーノに触れることなど許さない、と。

なぜならユーノは。

「……っ」

思わず口を押さえてアシャは瞬きする。

つぶやきそうになった一言をкаろうじて噛み殺し、そんな自分に戸惑った。

胸の中に広がる焦燥、すぐ側に居るのに手に入れられない歯がゆさ、熱くて冷たいこの感情、しかしこれが単なる恋などではないことをアシャは気付いている。

ただユーナ・セレディスという少女を愛しいと思うだけではなく、アシャはたぶん『銀の王族』としてのユーノをも強く欲している。

なぜならアシャは、他ならぬ『ラズーン』の。

「...」

一瞬きつく奥歯を噛む。

『銀の王族』としてのユーノを欲する力は、ユーノを愛しいなどと思ってはいない。ただユーノの身体にある命の種を望んでいるだけだ。その衝動を満たすことの恐怖から逃れて、アシャはわざわざ辺境へと身を隠しているのに。

「導師、か」

ちらりと隣に轡を並べるユーノを見遣った。

明るい光に透け、風に乱れる焦茶色の髪は、見えているよりずっとしっとり指先に快いと知っている。滑らかな頬は掌に吸い付くようだし、意固地そうに尖らせた唇の内側を思うさま蹂躪することを考えると胸が甘くなる。華奢な身体は腕に抱き込み所余さずいとしめるだろうし、張り詰めて強い声音が、その瞬間にどんなふうにも崩れるのかと考えるなら、誰でも誘われるはずだ。

日増しにユーノに魅かれていく自分が居る。これまでの相手とは比べものにならない強さ激しさで、ユーノの全てを我がものにしたいと苛立つ自分を感じている。

(俺の方が導師が要るんじゃないか)

ネークの人の導師は人の心に深く通じ、近隣諸国からも悩みを相談するために人が訪れると言う。

その噂に高い導師に会いたいというのは、ユーノもまた何かおさめきれないものがあるのだろうか。

(それとも、誰を、か)

誰か恋しい相手が居て、その気持ちを抱えたまま旅に出て、けれど命の瀬戸際になって相手への想いを押さえ切れなくなり、導師に会いたがっているのではないか。

考えた瞬間にじりっ、と腹の底が苦く熱くなって、アシャは眉を寄せた。

(嫉妬、か)

今は付き人としての信頼も失った状態なんだぞ、と小さく舌打ちする。

(嫌われているかもしれないのに)

そう思っただけで再び焦燥が広がって、我ながら馬鹿馬鹿しくなった。

(まるでそれしか考えられない餓鬼みたいに)

女を貪る時期は過ぎたはずじゃなかったのか、と言いつつも聞かせながら溜め息をついた。

(ミネルバに嗤われるはずだな)

氷のアシャがどうしたのだ。袖にしてきた諸妃諸侯が嘆こうぞ。

陰鬱な嘲笑が耳の底で響き渡った気がした。

「う...わあ...」

ふいにレスファートが嬉しそうな声を上げて我に返る。

いつの間にか森が途切れていた。

日射しが周囲に溢れ返っているのに、イルファの前でへたっていたレスファートも気力を取り戻したようだ。

「すご...い」

側でユーノも目を見張って、前方に広がった光景に見惚れている。

ユーノ達が立ち止まっている場所を小高い丘として緩やかな斜面が続いていた。少し先には煌めく流れが横切っている。川では子ども達がはしゃいで跳ね回り、弾かれた水滴が光を跳ねて一層まばゆい。川の近くには緑豊かな畑が広がり、大人の男女がゆったりと見回りつつ作業している。幾つかの丘陵の間に家屋が点在し、煙と食べ物の匂いが漂っている。ぼちぼち昼餉なのだろう。

遠くへ目をやれば、広々とした草原が村はずれから続き、風に波打ちながら地平となる寸前、青みを帯びた山々がその頂上をわずかに見せている。

穏やかで伸びやかで、どこまでも明るい村の風景だ。

「『豊かなるネーク』だね」

ユーノが感嘆を込めてつぶやいた。

「セレドに、似てる、少しだけ」

続いた声音はどこか儂い。

だが、そんなことを言い出した自分を恥じるように、いそいそと馬を村へ進め始めた。

「おい、先に行くな.....ほら、アシャ」

イルファが慌てたように続こうとして、ひよいとレスファートを抱き上げ、アシャの方へ差し出す。

「え？ もう俺の番か？」

「だろ？」

「だろって、おい！」

レスファートが何とか自分の前におさまるのを待って、イルファに声をかけたが、相手はさっさとユーノを追って行ってしまう。

なぜイルファがユーノを後を追うんだ、とアシャは不快感に眉を寄せた。思わず知らず声を上げる。

「おい、待て！」

「アシャ」

「なんだ」

「そんなにあせるなら、ユーノにひどいことしなければよかったんだよ」

ぼそっとレスファートに言われて、アシャはぎくりとした。

「...俺は焦ってなんかいないが」

「じゃあ、もう少しここでまってよ.....イルファ、らんぼうなんだもん、おしりがいたいんだよ」
ごそごそと腰のあたりを摩り、座る位置を確認しながら、

「ねえ、アシャ」

「なんだ」

「アシャはユーノのこと、きれいなの？」

唐突に聞かれた。

「え？」

「ユーノのこと、きれいだから、あんなことしたの？」

俯いたままでレスファートは尋ねる。もういいよ、と言われたから馬を進め出したアシャが、
どう応えたものかと迷っていると、

「ユーノ、いたがってる」

レスファートの声も怒りを秘めている。

「.....ああ」

「すごく、かなしんでる」

「.....わかってる」

「わかってないよ」

「わかってるよ」

「わかってない」

「わかってる」

「.....じゃあ、どうしてユーノにあやまらないの？」

「.....」

レスファートは振り向いて顔を上げた。じっとアシャを見上げる。

「ひどいこと言ってごめんね、って」

「そう、だな」

謝っても。

もしもう一度やり直せたとしてもアシャは同じことをするだろう。イルファの興味を削ぐためだと言い訳しつつ、ユーノを傷つけるとわかっていてもしてしまうだろう、ユーノを望む気持ちと拒む気持ちに翻弄されて。

「なんで？」

「うん？」

「.....そんなにユーノのこと.....かんがえてるのに」

レスファートのことばに、そうか、この子はレクスファの王族だったのだな、と改めて苦笑した。同時に、いつの間にか弛んでしまった自分の心の防壁を引き上げる。

「こら」

「った」

こん、とレスファートの頭を軽く叩いた。

「人の心に勝手に踏み入るな、とレダト王は教えなかったのか？」

「でもっ」

ユーノが、ないてる。

自分が泣きそうな顔でまた俯いたレスファートの頭をくしゃりとアシヤは撫でた。
「お前が.....慰めてくれ」
「え...」
「ユーノをお前が慰めてやってくれ」
その方がきつとあいつも安心するし、気持ちが楽になる。
つぶやいた自分がどんな顔をしたのか、アシヤは意識していなかった。
ただはっとしたように振り仰いだレスファートが驚いたように瞬きし、見る見るきつい表情で唇を噛んでぶいと顔を背けたのに、きつと情けない顔をしたのだろうか、と思った。

「なんだか物騒だろ」
その夜、ネークの宿屋の食堂で、ユーノ達は久し振りに豊かな夕食をとっていた。
小さな村なのに宿屋の数が多い。高名な導師を訪ねてくる旅人のためだ、それでも最近は少し減った、と女主人は笑った。
「おかしい怪物の噂も聞かぬえ」
イルファが露骨にアシヤを見たが、アシヤは平然とスープを掬っている。穏やかな表情は優男の外見をより一層頼りない感じに見せている。
女主人もあんまりあてにならないと判断したのだろう、今度はユーノに向かって尋ねてきた。
「夕飯はどうだね」
「おいしいです、とても！」
ユーノが答えるよりも早くレスファートが満面の笑顔で見上げて、女主人も破顔する。
「そりゃあ、よかった！」
あんたに褒められると嬉しいよ、とがばりとレスファートの顔を大きな掌で包み、キスを降らせる。愛玩動物じみたそういう扱いにかなり慣れてきたレスファートが、んー、とわずかに苦笑しながら受け止める。
「それに比べて男どもは！」
じろりと睨まれてユーノはぎくりとした。
「お、おいし、いで」
「無理しなくていいよっ」
「うっ」
大体なんだ、あんたは、この細っこい腕！
がちっと片腕を握って釣り上げられかけ、ユーノはじたばたした。
「あのっ」
「痩せ過ぎだ！」
女主人は断言する。
「こんな細い腕で女を守れるもんか」
そりゃあなたは守るまでもなく大丈夫、そう思わず言いかけて危うく口を噤んだユーノに、相手はぐいとイルファの方へ顎をしゃくる。
「あっちの男をごらん、まあころころしてネークの草猫みたいじゃないか。あそこまでとは言わないけど、せめて隣の生っちょろいのぐらいは太んなくちゃ」
「ぐ」
「...」
ころころ、と生っちょろいの、と評されたイルファとアシヤが微妙な顔で手を止める。
「いいかい、もっと食べなきゃだめだ！」
恰幅のいい体にふさわしい足音をたてて部屋を出て行くと、もう一皿、山盛りにした肉を持ってきてユーノの前に置いた。
「ほらっ」
「う」
「お食べ！ 残したら今夜家には泊めないよ！」
「そ、そんな」
「あの、俺ならまだまだうんと余裕が」
「あんたは食い過ぎ！」
イルファを容赦なく切り捨てた女主人に、ユーノは引きつる。
ただでさえかなりの量を既に食べている。正直、背中に傷を負ってから、まだ十分に食が回復していない。それでも次々運ばれる料理を無碍にするわけにも行くまいと必死に平らげていたのだ、これ以上は入らない。
「お、おばさん」
「お姉さん！」
「お、お姉さん...」
「なんだい」
「後で食べたいんだけど」
「そんなこと言って残す気だろう」
「そうじゃなくて、あの、導師のところへ行くのが遅くなっちゃうと、ほら」
「おや」

女主人は意外そうに瞬きした。
「あんたも導師さまのところへ行くのかい」
へえ、どんな悩みがあるんだね。
不思議そうに残りの3人を見回しながら尋ねたが、ああ、と頷いた。
「この男の女癖の悪さを相談しに行くんだろ」
「っぐ」
アシャが指さされてむせ返る。
「いや、そうじゃなくて」
あたらずとも遠からずだけど、とこれは心の中の声、ユーノが首を降ると、女主人は不審そうにイルファを指差し、
「この男の大食らいを治して下さいとか」
「違います」
「まさかと思うけど、このかわいらしい子が不治の病でとか」
「.....違います」
「ああ、わかった！」
女主人ははっとしたように大きくなずいた。
「あんただろ！」
「えっ」
「あんたの悩みだ」
「え、っ、と」
「あんた、そりゃ止めたほうがいい」
「は？」
「確かに細っこくて先行き女に縁はなさそうだが」
女主人はいかにも心配そうに喚く。
「よしときな、女にだっていろいろ辛いことはあるよ！」
「はいっ？」
「女になりたいんだろ？」
なんだそのとんでもない発想は、それこそ性別などを.....変えられるのか、導師は？ じゃあひよっとして男になれる、とか？ 男になったら、アシャと気まずい思いをせずに旅ができたり、する？ 一瞬固まったユーノはすぐに我に返った。
「違うっつ！」
「あれ、違うのかい」
まあなんだかわかんないけど、そりゃ確かに遅くなつては迷惑だ。
女主人が取りあえず肉の皿を下げてくれて、ユーノはほっとした。善は急げ、さっそく導師の家を訪ねて出かけようと準備していると、レスファートが不安そうに見上げてくる。
「ぼくもいっしょにいこうか？」
「大丈夫だよ」
すぐ戻るから、ちゃんと寝てるんだよ。
レスファートの頬におやすみのキスをして、ユーノは顔を上げた。
「じゃあ、アシャ」
何を考えているのか全く表情の読めない相手に笑いかける。
「レスをよろしく」
「気をつけてな」
うなずく相手の無表情さに少しずきりとしながら、ユーノは背中を向けた。

導師の家は昼間見た川の流れの近くにあった。

ヒストをゆっくり進めながら、ユーノの頭には繰り返し同じことばが流れている。

『俺にも好みと言うものがある』

冷やかな突き放した声音はよく耳にしたことがある。

ユーノと親しく話していた親衛隊の一人が仲間にセレドの皇族におさまる気かとかからかわれた時。街中でレアナの護衛として同行していて、姉に見惚れた男がユーノを見ていたと勘違いされた時。

比べられて貶められるのはもう数えるのも飽きたぐらいで。

(傷つかないわけ、じゃないのにな)

髪をしなやかにする薬草を調べたこともある。レアナより浅黒い肌に少しは映える紅を考えてみたこともある。棒杭のように柔らかさのない体つきをふわりと見せる仕草を探したこともある。

(それでも)

かなわない、どこもかしこも何もかも。

全てにおいて自分は姉にも妹にも母にも劣るのだと繰り返し思い知らされるばかりで。

「ふ、う」

小さく溜め息をついてユーノは苦笑した。

(慣れているはず、なのに)

早く導師の所へ行こう、と思った。

体の傷みは耐えられる。心の痛みも慣れている。

けれどこんな想いには慣れていない。

(温かい腕だったなあ)

自分を支えてくれたアシャの温もりを思い出す。次の瞬間、衣服を引き剥がれたにせよ、

(気持ちいい、胸...だった、なあ.....)

人の体温というのはあれほど柔らかく傷を温めてくれるものなのか。布や炎や薬剤とは全く違う。肌からしみいつて、傷の奥深くまで届く熱、なるほど怪我をした子どもが母親に抱き締められたがるわけだ、と納得する。

ユーノはいつも一人で手当てしてきた。

止血の順序を誤って血が止まらなくなり、何とか包帯で巻き締めたものの自室へ辿りついたとたんに気を失ったこともある。床に転がってどれほど意識がなかったのだろう、気付けば皇宮内は静まり返り、凍りつくほど冷えた手足で起き上がってまず確かめたのは周囲を汚していないかということ。

幸い再出血はしていなかった。体が熱ぼったくて喉が乾いていたけれど、水呑み場までは行けなかったし、誰かを呼ぶわけにもいかなかった。のろのろとベランダまで行って、そこで夜気で体を冷やし、湿った空気を吸い込んでかろうじて生き返る気がして、そのままとうとう夜明けを迎えた。

翌日は皇族閲兵式、平和なセレドでそれは皇族が勢ぞろいして民衆と触れ合うお祭り騒ぎとくれば休むわけにはいかず、ゼランに引っ張り出されて半日日射しの中に立っていた。何度もふらついて倒れかけたけど、それでも最後まで居るしかなくて。

誰かに助けてもらえとは.....思わなかった。

(あの時に比べれば、ずっと楽なんだ)

どんどん暗さを増す夜道を進みながら、ユーノは胸の中で言い聞かせる。

(皇宮に居たころよりずっと楽なんだ、ここにはアシャだけじゃない、イルファもいる、レスもいる)

傷を受ければ手当てしてもらえる。熱が出れば眠らせてもらえる。戦うときも背中に誰かが居てくれる。

(仲間が、居る)

たった一人で全てを背負っていたころに比べれば、格段の差だ。

けれど、だからこそ。

(仲間、なんだ)

それ以上を望んじゃいけない。それでなくても、イルファが疑いだしたのはユーノが無意識にアシャに甘えてしまっていたせいかもしれない。レアナのいないのをいいことに、人のものを自分のものだと思いつつあったのかもしれない。

仲間であられるうちに。アシャへの気持ちに押し潰されて、身動きできなくなる前に。

(導師に打ち明けて、この気持ち全部)

消し去ってもらおう。

目の前に見えてきた小さな小屋の灯に、ユーノは唇を引き締めて顔を上げた。

ヒストを家の前の木に繋ぎ、木製の戸をことこと叩いて声を掛ける。

「こんばんは」

静まり返った世界の中で、導師の家もしんとしていて人の気配はない。

ユーノはもう一度、低い声を掛けた。

「こんばんは.....導師はおいででしょうか」

「入りなさい、開いてますよ」

「っ」

いきなり背後から声を返されて、ユーノはびくりと身を竦めた。とっさに剣に手が滑った。

「剣から手を放しなさい、幼き剣士よ」

振り返った薄闇の彼方から、柔らかな声が苦笑する。

「.....すみません。つい...」

うろたえながらユーノは顔が熱くなった。

導きを求めに来ているのに、自分の殺気立った感覚が浅ましいと指摘された気がした。

「いつも狙われているものだから？」

ユーノのことばを引き取って、導師は静かに姿を現した。

闇に慣れてきていた瞳に、紺の頭巾に紺のマントを纏い、その影からこちらを見返してくる穏やかな白い顔が微笑んでいるのが見える。

「どうぞ、中へ」

ユーノの側をすり抜けて導師は戸を開けて入った。施錠も何もしていない、そのまま奥へ進んで、小さなランプに灯をともしす。

促されて家に入ったユーノは、相手の目が閉じられたままなのに気付いた。明々とした光に照らされ、眉の下に淡い影ができる導師の顔は若々しかったが、笑みをたたえた唇はユーノの心の中をはっきりと言い当てた。

「盲目でも、あなたが探しているのは私だろうと思いますよ」

「申し訳ありません」

ユーノは自分の失礼に熱くなる顔を伏せて、慌てて勧められた椅子に腰を降ろした。

頭巾を落としマントを脱いで簡素な格好になった導師が、ゆっくりと戻ってくる。目が見えないとはとても思えない確かな足取りで椅子の位置をユーノに向くように直し、穏やかな寛がせる声音で言った。

「さて.....お話をお聞きしましょうか」

「.....あなたは人の心の綾を知り尽した方と聞いております」

ユーノは静かに顔を上げた。

「人の持つ哀しみや苦しみを取り去り、心穏やかに日々を暮らせるようにして下さる方だと」

導師は微かに笑みを深めた。

「ボクは今大変重要な旅をしています。遥かな遠い地へ赴かなくてはなりませんし、同行してくれる仲間を守り抜かなくてはなりません、絶対に。たとえ、ボクが途中で倒れたとしても.....」

その可能性はかなり大きい。カザドに『運命（リメイン）』。これから先も敵は増えるかもしれない。

「彼らだけでも生きて故国へ帰ってもらわなくてはなりません」

ユーノは少しことばを切った。溢れそうになる想いを殺して続ける。

「そのような旅なのに.....ボクは関係のないことで迷っていて、自分の心を扱いあぐねているんです」

アシャへの気持ちを抱えていたところで報われるわけではない、成就するわけもない。なのに切り離せない無視できない。

「大きな迷いです。その迷いに身を任せたら、ボクは.....これから先、生き抜くことさえできなくなりそうです」

ふとした瞬間に、自分がアシャに見惚れているのに気付く。アシャの姿を求め、アシャの声を聞き、アシャの笑顔を探している。決して手に入らないのに、執着し傾倒し、先のない未来を夢に見る。

「導師、あなたに、その迷いを取り除いて頂きたいのです」

「.....わかりました」

導師は一つ息をついた。

「一度あなたの迷いを見せてもらいましょう。そのうえで考えてみます」

考え深い口調で言って、そっとユーノの両肩に手を置く。やはり、見えているのではないかと思えるような、ためらいのない仕草だ。

「さあ、心を開いて。ゆっくり、思い出してごらん下さい。その迷いのことを」

ユーノはごくりと唾を呑んで目を閉じた。

(迷いは.....アシャ.....)

きらり、と心の中の闇に金褐色の髪と紫の瞳をもったアシャの姿が現れた。

笑顔、優しいことば、温かい腕。その奥にあるしたたかで激しい心。さしのべられる手.....すがりつこうとした矢先に、相手の掌に既に載せられている色白の指に気付く。

(レアナ姉さま)

軽々とレアナを抱き上げるアシャ。

金褐色の髪に栗色の髪が絡み付き、紫水晶の瞳にガーネットの輝きが応える。まばゆい光景.....胸の痛みをも忘れさせ そうな美しい二人。

(綺麗、だな)

アシャとレアナがお互いの手を取り、振り向く。

祝福してくれるわよね、ユーノ。

レアナがささやく。零れるような喜びの顔。

(ええ、姉さま)

俺とレアナ皇女は似合うと思わないか。

満足そうにアシャが言う。誇らしげに自信を満たす笑み。

(そうだね、アシャ)

寄り添う二人の前で、ユーノは必死に笑顔をつくる。

(二人ともとってもお似合いだ。嬉しいよ、私も。アシャがいれば皇宮は安泰だし、姉さまも母さまも、父さまもセアラも安心して暮らせるもの)

『嘘.....つ.....き』

そのつぶやきに遠く反論する小さな声を聞くまいとする。

ユーノのことばを聞いて、アシャとレアナがほっとしたように笑い合う。

よかった、そう言ってくれたらと思っていたよ。

華やかな結婚式、そして、それに続く荘厳な戴冠式。レアナの頭を飾る王冠をアシャがまばゆげに見つめ、レアナはにこやかにアシャの手を取り宣言する。

『あなたは我が主、よってセレドもまた、あなたに従います』

上がる歓声、舞う花吹雪、人々が興奮して皇宮のテラスに並び立つ艶やかな二人を見上げて叫ぶ。

なんて美しい。なんて素晴らしい。なんて見事なお二人だ！

名実ともに、アシャはユーノの兄となり、ユーノはアシャの妹になる。

ユーノは深く礼をとり、儀式として祝いを述べた後にアシャとレアナに笑いかける。

(アシャ兄さま、だね。アシャが兄さまなら大歓迎だよ)

『嘘つ.....き』

どこかで儂く響く声を、ユーノは聞かない。>

(ねえ、アシャ、見てやってよ。ほら、レアナ姉さまったら真っ赤だ。ね、ああいうところが姉さまながら可愛いんだ。アシャもそう思うでしょ)

思うよ、ユーノ。

アシャが愛おしくレアナを見遣りながらつぶやく。

レアナ姫は本当に一生守らねばならない女性だと感じる。俺がいなくてはいけない、と。

紫の瞳が潤むようにレアナを見下ろし、レアナが静かに微笑み返す。

私こそ、あなたあればこそ。

(姉さまを幸せにしてよね、私から奪っちゃうんだから。喧嘩したらね。仲直りの方法、教えてあげるよ)

『嘘つき.....』

掠れた声が震えて響く。それを打ち消すようにアシャが笑う。

ああ、是非、だが、俺がレアナを傷つけるようなことはおそくないだろう。大事な人だから。

(そう、だよ)

私には、そうじゃないものね、そのことばを嘯み殺す。

(アシャってどっちかっていうと、私にはずっと兄貴風ふかしてたから.....ああ、じゃあ私は弟か)

そうなるな、はねっかえりの手に負えない弟だ。

(うん、そうだろうと思ってたんだ、でも弟でいいから、これからよろしく)
笑う。

『嘘つき』

声が責める。

(レアナ姉さまが大好きなんだよね、アシャ)

二人は互いを抱き締めあう。

『そうだもの』

あのどこに隙間があるというのだろう。

(それで、レアナ姉さまもアシャが好きで...)

距離が離れても通いあう心はペンダントを託した祈りが示している。

『どうにもならないじゃない』

たとえレアナと張合うほどの美人であっても。

(相思相愛で)

セアラと並ぶほど強気に出たとしても。

『私の入り込める余地はない』

目の前で見つめあう二人が教えている。

(アシャが私に優しいのは、姉さまの妹だからで)

大事な人の妹だから。

『ユーノだから、じゃなくて』

レアナを傷つけないように。

(ラズーンへ付いてきてくれたのも、姉さまに頼まれたからで)

ユーノが無謀なことを言い出したとレアナが不安がったから。

『私が行くから、じゃなくて』

ユーノを案じてくれたわけではなく。

『親切なもの、セレドの第二皇女だからで』

これまで出会った人々のように。

ユーノ自身を求めて心配してくれたのではない。

『行き場がない』

そんなこと、わかっていた。

『なのに、アシャが優しい』

期待してしまった、けれど。

『アシャが生きて帰れば、セレドが大丈夫で』

そうでも言い聞かせないと、守りたい気持ちの理由が見つからない。

『私でなくても』

アシャを支えることができれば誰でもいいのだろうけど。

『アシャは守ること、レアナ姉さまとセレドのため』

せめて。

好いてもらえないなら、せめて役に立ちたい、一瞬だけ、よくやったと褒めてもらいたい、その瞬間だけでも。

ユーノを、見て、ほしい。

でも。

『傷を』

見られた。愛するに値しないと見抜かれた。

『痛みを訴えないことー心配する』

自分のせいでと苦しむ父母は見たくない。

『悲鳴をあげないこと』

恐怖にセアラを怯えさせたくない。

『明るく振る舞うこと』

レアナに不安がらせたくない、すぐに体調を崩してしまう。

『諦めること』

ユーノは強い。

『傷』

大丈夫だ。

『傷』

死ななければいい。

『傷』

でも、できるなら、もし、望めるなら。

死ぬ時になら、アシャって呼んでも、いいかな。

それなら不自然じゃないよね、きっと。

アシャ。

アシャ。

アシャ。

これは死ぬ間際の戯れ言、愛しい人の名前を呼ぶ代わりにぼやけている頭が勝手に選びだした名前なんだよ。

だから何の意味もない。

どんな理由もない。

アシャ。

アシャ。

.....アシャ。

じゃあ私、死ぬのなんて怖くないや.....。

「? どこへ行くんだ?」

宿の戸口を出ようとしたアシャはイルファに呼び止められて舌打ちした。

「ちょっと...見てくる」

「ユーノか?」

「夜も更けてきたのに、まだ戻らない」

「ああ」

イルファが頷く。

「いい男らしいな」

「どういう意味だ」

じろりと相手を見遣ってアシャは唸る。

「いや別に。お前とは違う意味のいい男、らしいと聞いたぞ。訪ねてくる者がすぐに安心して心を開くらしい」

「...導師なら当然だろう」

「ああ、ユーノもすぐに何でも話すんじゃないか」

「.....」

「俺達に話しにくいことも、あ、そうだ」

好きな女の名前とか。

イルファが楽しそうに笑った。

「案外、あいつの悩みは故郷に置いて来た可愛い女のことだったりな」

「出てくる」

レスを頼むな、と身を翻して外の馬に素早く跨がりながら、アシャはここに着くまでにさざん思ったことをまた思う。

故郷に置いて来た可愛い女。

女ではないにしても、好きだった人間が居たんじゃないのか。

確かにアシャは付き人だったが、ユーノの動きを完全に把握はできなかったし、あれだけの傷があるのを隠し通されていたのだから、ユーノの本当の気持ちなどわかっていなかっただろう。

アシャの知らない大事な相手が居て、あの傷もあの境遇も、その男への気持ちを頼りにしのいでいたんじゃないのか。

ちっ、と思わず舌打ちをして我に返った。

「落ち着け」

ユーノは愛しいと思う。今まで会ったこともない人間、強くてしなやかで、なのにふとした拍子に脆い部分を見せられると、その弱味を晒すのは自分だけなのかもしれないと気分が高揚する。

けれど。

暗い夜道を進みながらアシャは目を伏せる。

ユーノの全身の傷はそんなアシャの自惚れを砕いてしまった。

アシャの知らないところでユーノはあれほど傷を負い、アシャに知らせることなくユーノは日々を笑って過ごしていた。この手に挿んでいたはずのユーノの姿は、他の人間に見せられていたと同じような偽りに過ぎず、他の人間より深く知っていると信じていた部分もユーノが多少譲ったに過ぎない。アシャが踏み込み、獲得したものではない。

ユーノの中にはまだアシャのたどり着けないものが秘められている。なのにそれを既に手にしている男がどこかに居るも知れない。

想像がどんどん不穏な方向に進んでいく。

それは、ユーノが、その男の侵入を許した、そういうことじゃないのか。

「……」

一瞬、視界がゆらりと歪んだ気がした。

脳裏に過った想像は、ユーノの細い身体を抱きすくめている影の背中。すがりつくようなユーノの手に、拒んでいないと思知らされた気がして、そんなことがあるわけがない、あれはまだ男を知らない身体のはず、そう必死に思い込もうとする自分に気が付き、思わず固まってしまう。

「まずいな」

額に滲みかけた冷や汗にうんざりしながら拭ってぼやく。

一時の戯れ言ならまだしも、特定の女性などつくれるはずもない。相手に滅亡を背負わせてしまう。

そんな重圧に耐え

られる娘などいない。

でも、ユーノなら。

また閃いた思考にアシャは暗闇を睨みつける。

あの強靱でしなやかな精神なら。数々の危険をくぐり抜けてきた体なら。それでもレスファートに見せるような優しさを失わない心なら。運命を受け入れることを選び取る、あの豊かな魂なら。

ごく、と喉が鳴ったのが、浅ましい欲望からだわかっている。

ユーノなら。

ユーノならアシャが望んでもいいのではないか。

確かに今は付き人以上になれそうもないが、そこは経験というものもあることだし、何より『実戦』に関してはアシャの方がずっと上のはず、姑息な手には違いない、違いないが、快感を教えて引き入れるという手段もあるはずだ。

「お、い」

何を、考えて、いる。

そんなことをしたら、どれほどユーノを傷つけることか。

ましてや、故郷に好きな男がいるとしたら、それこそ取り返しのつかないことになる。

「よせ」

体の中に広がる衝動を、目を閉じて凍りつくような思いで封じ込めていく。

何のために『ラズーン』を出たんだ、俺は。

「く…そ」

やっぱり導師が要るのはアシャの方かも知れない。

重く深い溜め息をついて顔を上げたとき、導師の家の裏扉が開いたのが見えた。

「？」

灯が漏れ、誰かを抱えた導師が外に出てくる、そこまで見てとったとたん、馬に一鞭あてて速度を上げる。

(ユーノ？)

なぜあいつの腕に易々と抱かれたままで？

あれほどの怪我をしても、意識が戻ればアシャにはすがらなかったのに。

押さえ込むのに成功したはずの揺れがあっさりアシャを突き動かした。

「もう、やめなさい！」

突然、導師が口にするには熱のこもった声が響いて、立ち止まった導師が愛おしそうにユーノを抱き締めるのが見えた。

「！」

かろうじてアシャが懐の短剣を抜き放たなかったのは奇跡、全身の血が一気に奪われた気がして視界が眩む。

「何をしてるっ、貴様っっ！」

叫んだ声に応じると思っていたユーノが、依然くたりと導師の胸におさまっているのに背筋を寒気が這い上がった。

葉を、盛られているのか。

「く、そっ」

まさかこいつまで『運命(リマイン)』に抱き込まれているのか。

一瞬にして冴え渡った感覚をぎちぎちに張って、臨戦体勢で駆け寄っていくアシャ、だが導師は動じた様子もなく、ユ

ノを抱えたまま凜とした声で言い放った。

「視察官(オベ)殿！」

「っ」

攻撃をしかける寸前、広げていた殺意をおさめるアシャに導師が静かに微笑む。

「やはり、そうでしたか、アシャ殿」

「.....」

沈黙はおそらく意味がない。

「ずっと若い頃、『ラズーン』から流れてきた老人の世話をしたことがあるのですよ」

「.....なるほど」

アシャはゆっくりと息を吐く。だが、手は懐に短剣を握りしめ、体から緊張は解かない。

「『ラズーン』のアシャ、ですか」

「.....いかにも」

「私の知識が確かならば」

導師は笑みを消す。

「こんな辺境におられるべき方ではないはずだが」

「.....私は」

ことばを一応改めた。

「果たすべき勤めを放棄し、なぜこんなところにおられる」

「.....200年祭のために『銀の王族』を守護して『ラズーン』へ戻る途中だ」

馬鹿な言い訳だと思った。一度離れた故郷におめおめ戻る理由を200年祭と言い逃れる、その実、その200年祭に繋がる役割から逃げ出したのに。

「『銀の王族』？」

導師の顔が暗く澀んだ。

「この子が『銀の王族』ならば、『ラズーン』支配も地に堕ちたものだ」

『銀の王族』ならば、背負う運命に報いるために世の幸福を約束されているのではないのか。その支える重荷に償いとして喜びを満たされているはずではないのか。

導師が穏やかながら、それでもはっきり罵倒してきておや、と思った。

「あなたはこの子の心を知らないのか」

痛み、傷つき、必死に生き延びてきたのに、そのどれ一つも報いられず。

「今もなお.....っ」

ふいに何かを気付いたように、はっとした顔で導師が口を噤む。

「.....あなたは、何も、知らないのか」

「...？」

訝しく相手を見ると、相手は険しく眉を寄せ、唸るように繰り返した。

「何も、聞いていないのか」

「何をだ」

「.....それほど、深く」

隠し通してきたのか。

「隠し通してきた？」

「.....あれほど、何度も呼んだのに.....」

「呼んだ.....？」

誰を、そう思った瞬間に閃いたのは、ユーノが望んでいる相手が居るのだろうという想像。

同時にさきほどからの、導師らしくない波立った応対に不愉快なものが競り上がる。

導師が『銀の王族』に同行している視察官を責めずにはいられないほど、ユーノの中に傷みを読み取ったのか。

それほど深くユーノの内側に入ったのか。

「.....ならば、なおのこと」

導師はふいに向きを変えた。アシャが止める間もなく、まるで見えているかのような確かな足取りでユーノを選び、川へと投げ落とす。

「何を！」

ぞっとしてアシャは放り出されたユーノの側に駆け寄った。

「ついこの間まで大怪我をして起きられないほどだったんだぞ！」

何が導師だ、お前はおかしい趣味を持ってるんじゃないか、そう怒鳴りつけそうになった矢先、うろたえたユーノが体を起こすのにぎくりとする。

目が覚めていたのか？

いつから？

どこまで聞いた？

まさかアシャの素性を察したりしたのではないか、そう怯んだアシャに背中を向けて導師が声を響かせる。

「そんなところで怯むぐらいなら、手を出さぬことだ」

「っ」

「それほど我が身が大切ならば、大人しくこの娘を別の者に委ねなさい、視察官（オペ）殿」

「.....」

「それが嫌なら」

肩越しに閉じた目蓋を貫くように睨まれた気がした。

「守り切り、支え切るがいい、アシャ、の名前にかけて」

それが、できる、ぐらいなら。

歯を食いしばったアシャの目の前で、導師が呆然としているユーノに呼び掛ける。

「幼き剣士よ.....あなたの迷いは生きるのに必要な迷い。それを取り去れとは、死を願うことです」

アシャは息を呑んだ。

死を望んだ、のか？

あのユーノが、その迷いを取り去るために、死ぬことを選んだというのか？

それほど大事な気持ちだったのか？

それほど.....大事な相手.....なのか.....？

「それでもなお迷いを取りたいのですか。そこで頭を冷やして考えなさい」

導師は言い捨てるとくるりと向きを変えた。立ち竦むアシャの前を通り過ぎながら、

「後はあなたに任せよう」

心なしか怒りを押し殺したような声で、

「あなたが少しでも『ラズーン』に対して責任があると考えたら」

自分の勤めを思い出されるがいい、そう言い放たれて凍りつく。

責任はある、言い逃れられない、導師が想像もできない矛盾した理によって課せられた軛。

だがしかし。

アシャは顔を歪める。

「俺、は」

その理を否定してしまえば、世界もまた意味がなくなるのだ。

「だって.....」

掠れた声が響いて振り返る。

「だって.....どうしようも...ないじゃないか...」

まるでユーノが自分の内側の声を代弁しているかのように聞こえて、思わず川に入る。

「他に、どうにも、できないじゃないか」
俯いて声を殺してユーノが泣く。
「どうにも.....ならない...のに」
冷えて凍りつくような水の中で膝を抱えて、震えながら呻くように泣きじゃくる。
「どうしろって...言うんだよ...っ」
「ユーノ...っ」
ふいに初めて、すぐ間近に、ひどく近くに、人の存在を、ユーノの熱を感じた。
その熱が欲しいと、激しく思った。
「あ、あした...っから.....ど.....して.....どんな.....顔して.....どんな...気持ち...で...っ」
呻くように訴えるように体を竦ませて泣くユーノ。
その姿は幼い日、あの闇の草原に居たアシャそのもので。
今でも覚えている、生まれた瞬間に全てが終わっていたのだと理解した瞬間の衝撃。
『太皇（スーグ）』がいなければこの命もなかっただろうが、生き延びても穏やかな幸福が待つわけではないと思い知らされた日。
その自分より遥かに細い体を震わせて泣く娘の体温が、この水に奪われ続けている。
凍りつきそうな足をふらりと踏み出した。
それは、俺のものだ。
その熱を、俺によこせ。
胸の中つぶやきは、闇の気配を激させている。
近付いたアシャの気配に気付いたのだろう、ユーノがのろのろと顔を上げる。その目元も頬も鼻の頭も、寒さと涙で真っ赤になって、唇だけが白く色を失っている。
「だ...れ？」
俺がわからないのか。
失望と自嘲に苦く笑いながらそっと手を出すと、夢うつつのような顔で両手を伸ばしてくるからたまらなくなった。
「ユーノ...っ」
呼び掛けて両手を掴み、そのまま身を屈めて首へ導き、体を抱き寄せる。戸惑って力をいれかねているのがじれったくて、掴まれ、そう囁きながら強くしっかり胸に引き寄せた。
「あ...しゃ...？」
「く...」
柔らかく呼ばれたその瞬間、胸を押し潰すように広がった痛みに、アシャは呻く。
理由を、教えてくれ、導師。
家に入ってしまった相手に心の中で呼び掛ける。
この気持ちがどこから起こるのか、どうして俺はこうもこいつが欲しいのか、その理由を教えてください。
ユーノは『銀の王族』だ。『ラズーン』にとって貴重な存在だ。
対するアシャは、『ラズーン』の闇の部分とその出生から背負う者、そして『ラズーン』の光を一身に浴びるべき者。
この気持ちは、罪悪感なのか、本能なのか、それとも綺麗なものを汚したいだけの欲望なのか。
あるいは遠い過去に紡がれた、夢い願いが自分の中に刻まれているのか。
人よ続け、命よ繋がれ、と。
震えている白い唇を塞いだ。一瞬抵抗されて、強く抱きかかえて唇を押し付ける。
強ばった固い唇は、こうして触れ合うのは初めてだと訴えるようで、安心させるように何度か重ね直す。
それでもその内側を犯すことをためらわせたのは、きっと最後に残された理性がユーノの想い人を告げるからで。
「ん...う」
微かに相手が呻いて、ようやく口を離した。
何をされたか、今一つわかりかねている虚ろな瞳でユーノが見上げてくる。
「.....あしゃ.....？」
不安そうな顔に口走った。
「これは.....夢だ」
嫌われたくない。
狡さがアシャに嘘をつかせる。
「夢.....？」
つぶやく唇にすぐにまた誘われそうになる。数々の美姫のように甘い香りはしない、色づいてもいない、柔らかいとも言えないのに、次はもっと深くが欲しいと気持ちが揺らぐ。その気持ちを断つように言い切る。
「そうだ、夢だ」
「そうか.....夢...か」
ユーノが寂しそうに瞬きした。
「夢...か...」
やがて掠れた小さな声で。
「夢なら甘えても.....いいな...？」

少しほっとした顔で胸に額を寄せてくる。
細い首筋に髪の毛が絡みつく。水に濡れて張り付く衣は否応なしに劣情を煽る。
限界まで、後数歩。
それでもきりきりしながら水の中から引き上げ、岸まで連れ戻って羽織っていた上着で包み、抱きかかえて表に回る。
ユーノには想う男が居る。
それはきっと確実だ。
そしてそれはアシャではない。
それもきっと確実なこと。
「...ヒスト！」
繋がっていた馬は警戒心を剥き出しにしてアシャを透かし見た。
「着いて来てくれ」
繋いだ手綱を解くと、アシャの腕に居る主人を認めたのだろう、先に進むアシャの馬に従ってゆっくり歩き出す。
「.....守ればいいんだろう、守れば.....手を、出さずに」
どこまでもつかはわからんが。
今も結構ぎりぎりだ。
けれど、長い旅だ、いつかはひょっとして、その想ってるやつより俺の方がよくなるかもしれないだろう？
「その時は」
ふい、と彼方の空を見上げる。
その時は、全てを背負う覚悟を決めよう。
そうすれば、世界の終末も矛盾したこの命も、やはり意味があったのだと思えるようになるかもしれない。
溜め息を一つついて、アシャはユーノを抱え直して歩き始めた。

数日後。
「変だな」
宿を旅立った一行の間で、ユーノは眉をしかめながら手綱を操っている。
「どうした？」
「ヒストがおかしいんだ」
「導師のところで何かあったんじゃないのか？」
「何もないよ……ねえ、アシャ？」
イルファの突っ込みに不思議そうにユーノに尋ねられて、アシャはそしらぬ顔で首を傾げる。
「お前が川に落ちたぐらいだろ？」
「落ちたんじゃない、落とされたんだよ！」
「導師がそんなことするなんてなあ」
よっぼどまずいもの溜めててんだろ、ここに。
イルファがとん、とユーノの胸を突いて、一度どこかで締めてやる、とアシャは密かに決意する。
「そんなこと……ないよ」
うっすらとユーノが赤くなって、イルファの前に座っていたレスファートがきよろきよろした。
「それより、朝ごはん、ユーノぜんぶ食べたの？」
「食べた」
うんざりした声でユーノが唸る。
「あそこに居たら、すぐに体が倍になりそうだ」
あ、そうだ、と何を思いついたのか、ユーノが嬉しそうに笑った。
「せっかくこんな広い草原が続くんだからさ、あの木のところまで競争しようよ」
「じゃあ俺は抜ける、レスが居るからな」
「へえ、イルファはレス一人でボクに負けるんだ」
「そ、そんなことはないっ」
俺はお前が病み上がりだからと気を遣ってだなあ、とイルファが言ったのももっともで、導師の家に行った後、軽く熱を出していたユーノがむっとした顔になる。
「もう気遣ってもらわなくていい。どうするんだよ、やるのやらないの」
「イルファ、ぼくならいいでしょうぶだよ」
レスファートがあどけなく保証するのにイルファがひきつる。
「へえへえ、わかりました。……そっちこそ、ヒストの機嫌が悪くて気の毒だな」
「大丈夫、なんかちょっと拗ねてるだけだよ、自分をないがしろにされたって」
「ごふっ」
あっけらかんとユーノが言い放ってアシャはむせた。
「何？」
「い、いや」
まさか、あの時は眠ってたよな？ 起きてなかったよな？
いやしかし、いっそ起きていてもらったら、それはそれでユーノにアシャの気持ちが伝わったのではないか？
それとも起きていたのだが、アシャの気持ちは受け入れられないと眠ったふりをしていたとか？
それはない、あんまりだろう、初めての出会いのときにはちゃんと俺を見つめてくれたぞ。
どきん、と微かに拍動を強めた胸に、ミネルバの嘲笑を思い出して情けなさが募った。
「何？」
「あ、ああ、その、つまり」
ぐるぐるしつつ、急いで話題を逸らせる。
「俺も加わろう、か、と思って、な」
「珍しいな、こういう遊びは馬に負担を与えるとか何とか言って嫌がってたくせに」
「ほら、その、たまにはいいだろう、悪いが腕が違うぞ」
「いったな…じゃ」
行くよ！
朗らかな声を上げてユーノが鞭をくれる。きやあ、とレスファートがはしゃぎ、イルファが大声で馬を励ます。
あっという間に自分を引き離すユーノの後ろ姿に、アシャは眩しく目を細めた。

4.夢見る草猫達

ざわざわと風が草を鳴らしていく。

「ん...しょっと...」

小さな短剣を持って、レスファートは彼の背をすっぽり隠すほどの草の中で、苦労して草を刈っている。

ネークの半分を占める丈高い草原は、一日で駆け抜けていくのは困難、今夜はここで野営をすることになったのだ。

時々手を休めてきゅ、と握りしめてみる。軽くしびれた指先、城にいるころには掠り傷一つにメーナが騒いだから、すべすべつやつやとしていた手には今無数の切り傷がある。火を扱い料理もするようになったから火傷の痕もあるし、小さな豆もある、とても王族の手ではないと言われるだろうけど。

「ふ」

それでもこの手はユーノを慰めたりもできる。

それが誇らしくて微笑み、レスファートはまた少しずつ草を刈っていく。

(たびにでて、よかった)

城にいれば痛い思いも怖い思いもしない。哀しい思いも辛い思いもしない。

けれど一日の旅程に疲れ切ってユーノに抱き締めてもらって眠る安心や、初めて自分一人で火を起こせたり水のある場所を見つけられたり、見たこともない美しい花を毒草と教えられて驚いたりする日々は、きっと得られなかった。

(ぼくはきっと、せいちょう、してる)

自分の力が増えていくのを感じる。城の中で人の心の中でしか知らなかったことが、豊かな経験に裏打ちされて、真に意味のあるものに置き換えられていくのをレスファートはそう感じている。

(いつか、きっと)

ユーノを守り、ユーノを支えよう、あの日の誓いのままに。

にこっ、と笑っていそいそと再び草を刈り始めたレスファートは、やがて、唐突に顔をしかめて手を引いた。

「あつつつ...」

ネークの草原は鋭い剣型の葉の植物で満たされている。注意していたがまた切ってしまった。

指先に赤い筋が走り、みるみる紅の粒が膨れ上がってくる。慌て気味にその指をくわえこんで、ぱたりとその場に座り込もうとしたとたん、

「っっ！」

いきなり後ろから突き飛ばされた。とっさに短剣を握ったまま前にのめった拍子に額に鋭い感触があり、いた、と眉を寄せたが、両手を地面に突いたまま、そうと振り返った目には深緑から始まる様々な緑が重なる草しか映らない。

「??...」

少し離れた場所で同じようにざくざくつと草を刈る音、ユーノ達も野営の場所づくりに忙しいのだ。

きよろきよろと周囲を見回し耳をすませ、空を見上げる。

暮れかけた空は次第に青が薄黒く煙ってきているが、レスファートももう見慣れた穏やかな眠りにつく闇の色だけ、別にこれとっておかしなところもないし、怪しい気配もない。

レスファートは短剣を握りしめて、刈った草にそろそろと四つ這いになった。突っ込んだ拍子にプラチナブロンドに草が絡み、手には新しい傷が増えている。

「いたあ...」

わけのわからない不安をつぶやいてごまかしながら、もぞもぞと起き直りかけたその瞬間、ざわつと草を揺らせて、再び何か飛び出して来た。

「きやつ」

横から脇腹にまともにぶつかってすぐに草の中へ飛び込んでいく。レスファートは軽々と吹っ飛ばされてのけぞり、背後の草の中へ今度は仰向けにひっくり返った。

(な、に...っ)

「!!」

その彼の上を、二度三度、吹っ飛ばしたそっくりな気配の『もの』が走って行く。腹を叩きつけるような感触は四つ脚、けれど姿が一切見えない。

「う、っ」

プラチナブロンドの髪を乱し、手足だけでなく、頬にも額にも一杯ひっかき傷を作って、レスファートは慌てて起き上がった。あちこちに血がにじんでぬるついた手、どこから何が来るのか、何をされようとしているのか怖くてわからなくなって、震えながら必死に周囲を見回す間に涙がにじんでくる。

「ふえ...」

(ユーノっ)

竦んでしまう。助けを呼びたいと思ったとたんに、さっきの誇らしさが邪魔をする。守ろうというその人に、助けを求めてしまうのか、と。

けれど怖い。握る短剣が冷たくて重い。

「レス？ そっちは刈れた？」

「っ！」

ユーノの明るい声に、レスファートは座り込んだまま急いで見上げた。草波の上から、太陽を背に影になったユーノが覗き込む。

「レス？」

不審そうな声をかけてユーノは草を掻き分け、レスファートが刈った小さな空き地に急いで寄ってきてくれた。

「どうしたの？ 疲れた？」

側に近付く温かな体温、腰を降ろして影になっていた姿が光を浴び、優しく微笑んだユーノの顔を浮かび上がらせる。

(母さま)

唇を噛んで我慢しようとしていたレスファートの頭の中で、もう面影もぼんやりしている母親の微笑が重なった。

(こわい、よ)

「ユーノお！」

レスファートは両手を差し伸べ、ユーノにしがみついた。

「どうした？ 手でも切ったの？」

そっとレスファートを抱えて、ユーノが尋ねてくる。

「……う……ん…」

しゃくりあげながらレスファートはうなずく。目元を擦って、いた、とつぶやくと、手に薄赤く血がにじんでいるのを、ユーノが見つけてくれた。

「ああ、これか。手当てしよう」

刈り終わった場所へ手を繋いでレスファートを連れていって、荷物を解く。

「にしても、ひどく切ったね」

レスファートの傷だらけの手に優しく塗り薬をのぼし、包帯を巻きながらユーノが首を傾げる。

「だって…」

「ん？」

「なにかわけのわからないのが、ぶつかってきたんだ」

顔を上げたユーノに、レスファートは訴えた。

「何かわけのわからないの？」

「うん。ぼくが草をかってたら、きゅうにぶつかってきて」

必死に気配を探ったのに、心象にさえ反応しない、姿形が見えない感じなのに、腹を蹴られ突き飛ばされた。

(あれは、なに)

シラナイモノ、しかもあちらはレスファートに害を与えられる。

レガやサマルカンドは太古生物とはいえ、姿が見え、ユーノやイルファが戦える。けれどさきほどの存在は、レスファートだけにしか感知できない類なのかもしれない、そう思っただけでぞくりとする。

「ぼく、だけしか」

「どんなの？」

「わかんない。ふりかえってもなにもなくて、それでこわくなって...」

自分しか戦えないのかも、しれない？

側に居るユーノがふいに遠くへ飛び去るような不安に思わずしがみつこうとした矢先、

「ほら!!」

「つつっ！」

頭上から、いきなりどら声が響き、目の前にぶらんと薄茶色の獣がぶら下がった。虚ろに濁った眼、くはっと開いた口から滴る紅の色、生臭く鼻を打つ臭い。

「や、あああーっ！」

悲鳴を上げてユーノに飛びつく。

「ユーノユーノユーノーっ!!」

「イルファっ!!」

「な、何だ？」

背後で間抜けた声が響く。

「俺はただ、おいしそうなやつが手に入ったから一番に見せてやろうと」

「やああっ」

血の臭い。

苦しい。胸が痛い。死ぬ間際の絶望が押し寄せてきてレスファートは慌てて心を閉じる。

「急に驚かすから！」

険しくイルファを叱責したユーノは、一転して優しい声で囁きかけてくれた。

「大丈夫だから。何でもないよ、レス」

何でもなくない。死の恐怖が迫ってくる。どうしようどうしよう、もしあいつらが自分にしか感じないもので、ユーノを助けられるのがレスファートしかいないとしたら。こんなに怖いのに、守れるのだろうか。

「イ.....イルファ.....なん.....なんか.....きら.....きらいなんだ.....から」

こんなに震えてしまってるのに。

ユーノの胸に顔を埋めて、レスファートはしゃくりあげる。

「すまん！ な！ レス！ レスファート、さま！」

慌ててイルファが機嫌を取るように騒いだ。

「な、この通り！ この通りだ！」

「知らない...っ」

「レス！」

「ほら、もう許してあげなよ。イルファがいじけてるよ」

ユーノがぐすくす笑いながら、髪の毛についた草を取り、背中を撫でてくれる。

少しずつ安心して、気持ちが緩む。そろそろ顔を上げて横目で見遣ると、世にも情けない顔でイルファが頭を掻いている。獲物はどこかに片付けたようだ。

「.....いいよ」

わかっている。食べなくちゃならない。何かの命で長らえている、そんなことはわかっている。だから怖かったのは、死ではなくて、大事な人を守れないかもしれないという不安。

「ユーノが.....そういうのなら」

唯一従うと決めた人が宥めてくれるなら。

涙をすすって振り向くと、イルファが慥然とした顔で唸った。

「何でユーノが言うなら、だよ。俺の方が強いんだぞ？」

この間の勝負だって、レスを乗せたままで俺が勝ったのに。

ぶつぶつ顔をしかめてぼやくのに、思いつきり舌を出した。

「ユーノは特別なの！」

「どうしてなんだよっ！」

「ユーノ！」

イルファとレスファートのやりとりに笑っていたユーノが、アシャに呼ばれてそちらを振り向く。

馬の手綱をまとめて綱にくくりつけ、その綱を打ち込んだ杭に縛りつけながら、アシャが尋ねる。

「レスがどうしたって？」

「うん、何かにぶつかられたって言うんだけど」

「ぶつかられた？」

不審そうにアシャは目を上げ、レスファートとユーノを交互に見つめた。

「レスにも草を刈ってもらってたんだけど、何度か何かにぶつかられちゃって、草の中に突っ込んだんだ。両手、傷だらけにしちゃって」

「ふうん？」

訝しそうにアシャが近寄ってくる。

落ちていく夕陽に黄金の髪がきらきら輝いているのが絵のように眩い。

「何か、ねえ.....ネークの草猫かな？」

アシャはレスファートを覗き込み、手や脚の傷を調べた。他に怪我は、の問いかけに、レスファートは首を振る。はっとしたようにユーノが瞬きした。

「宿屋のおばさんが言った、草猫？」

「ああ、この草原に棲んでることは棲んでるんだが」

アシャは考え込んだ色を紫の瞳に浮かべて眉を寄せる。

「草猫が人に被害を与えたって話は聞かないな」

「草猫……みえないの？」

レスファートが尋ねると、アシャはいや見えるはずだ、と応じた。

「だが、この草原に溶け込むような体色だし素早いから、今までほとんど見つかってない」

数十年前に通りがかった旅人が死骸を発見して、それでようやく生息が確認された程度じゃなかったか。

「そうなんだ…」

「もともと人間嫌いで姿を見せないとは聞いている」

「レス！ アシャ！ ユーノ！」

いつのまに離れていったのか、火を起こしたイルファが、オレンジと董色のきらめきに燃え上がった炎の側から三人を呼んだ。

「もういいだろ、飯にしよう！ 俺はもう死にそうだ！」

レスにうんと気を遣ったからな、と大真面目に言ったイルファに、ユーノが吹き出しアシャが呆れる。

「行こう、レス」

「うん」

不安は消え去らなかつたが、それでもユーノが笑って抱えてくれたから、レスファートは笑い返して立ち上がった。

さやさやと風が草原を渡る音が、快い子守唄のようにユーノをくつろがせる。

淡い夢の中で導師の横顔が声を荒げる。

『生きるための迷いまで取りたいのか！』

(導師、あなたの言う通りだ)

夢の中でささやき返して、ユーノは小さく溜め息をついた。

そうだ、ユーノには、アシャに対する想いを消し去ることはできない、心の奥底に閉じ込めておくことはできても。

それがあれからずっと考えて出た結論だった。

諦めきれない、あの豊かな色彩に輝く瞳も、黄金の光に包まれて笑う顔も、からかうように動くしなやかな手足、見かけとは違った確かで揺らがない体も、何より痛みに呻く夜の苦痛を減じてくれたのは、他の誰でもないアシャー人だったのだから。

けれど。

わかっている、自分が、守ってもらうには強すぎる心と、求めてもらうには惨めな体と、見つめてもらうにはあまりにも華の足りない容姿を持っていることを。

アシャが望むのは姉レアナであり、レアナもアシャを愛しんでいて、両親もセレドもアシャの存在をいつの間にか頼りにしていることを、片時も忘れることなどできはしない。

この人は私のものではない。
 この人は私のものにはならない。
 そう言い聞かせながら見つめる視界に、少しでも長くアシャの姿を止めようとしてしまう自分を、いつも十二分に感じている。

もっと優しい娘に生まれたかった。
 もっと儂く美しい存在として育ちたかった、誰もが手を差し伸べ守り育てようとしてしまうような。

もっとも、そうであったなら、今頃とつくにどこかで骸と化して打ち捨てられていたのだろうか。それでもよかったと、一瞬魔の想いに襲われる、これが人を好きになる、ということなんだろうか。

この人に見つめてもらえないなら、死んでいたほうがよかったと、そんなことまで思ってしまうて情けなくなる。

遠い闇からサルトに叱責されるような気がする、私の存在はそんな軽いものだったのですか、と。
 (死ぬわけには、いかない)

何があっても。
 どんなに辛くて苦しくても。
 ユーノは命の約束を背負っている。
 ぎりぎりまで、いやそのぎりぎりを越えて生き延びることを約束している。
 それならば、とユーノは考えた。

それならば、この想いを一生秘めて死出の旅に連れていってしまおう。誰にも悟られることのないように、幾重にもベールで包み、銅の箱に押し込めて鍵をかけてしまおう。

所詮愚かな想いだ、どうしようもない、叶はずのない夢だ。
 だから、そのどうしようもないものは心の奥深くに抱き締めて、真珠を抱くと聞く水底の貝のように、この身が砕け塵となるまで、ことばにも眼にも出さずにいよう。

伝えたところで分不相応と嗤われるだけだろうし、たとえ嗤われなかったにせよ、困った顔でアシャとレアナに顔を見合わせられては居居られない。

いつか無事にセレドに戻れたら、父母を説得し、アシャとレアナの婚姻を結ばせよう。晴れやかに微笑むアシャと頬を染めうレアナの喜びを自分のものとして、堂々と祝福し.....そして、二人が落ち着き次第、もう一度旅に出よう。いろんなものを見、いろんな愛を、哀しみを見、己一人が辛いのではないと心に焼きつけてから、二人の手足となって働くためにセレドに戻ろう。

旅先で大切な人を失ったのだと、そう偽って生涯一人でいればいい。

セレドの姫は変わり者、それできっと通るだろう。

(きっと、それで)
 さやさやと草の擦れあう音、眠りの底まで響き届き、傷ついた魂を抱き取る.....。

『.....の子よ』
 ふと、切ない夢の靄がすみの向こうで声がした。

ユーノは一人、ネークの草原に立っている。
 腰の上、鳩尾近くまで押し寄せてくる緑色の波の中に一人立って、あたりを見回している。

『.....の子よ』
 声は再びユーノを呼んだ。
 振り返る耳元で風が鳴る。
 『人の子よ、なぜ、そうまで、悲しい?』
 暗い空には星一つなく、草原には人影一つなく、声が密やかに響いてくるだけだ。

『なぜに、そこまで、そなたは悲しい?』
 草の擦れあう音、微かに青臭い香り。
 (なぜ.....って?)
 『そなたは「銀の王族」、幸福を世の始めから約束されたもの.....』
 (銀の...王族?)

ユーノは首を傾げた。
 どこか優しい響きを持ったそのことばに、心の海が波立つ。

『己の生命を覗き込んで見よ』
 周囲を取り巻く草が波打ち、ユーノの体を包み込んだ。
 ぴりっと一瞬、稲妻が走ったような衝撃が伝わり、襲ってきためまいの感覚にユーノは思わずよろめいた。同時に、自分を包んだ草の表面から何かの記憶が流れ込んでくるのを感じる。

生命を見よ。
 目を閉じたユーノの脳裏に、絡み合う二匹の蛇が映る。

蛇?
 いや、そうではない。
 何か紐のようなものが二本、二重に螺旋を作って巻き上がっているのだ。

『「銀の王族」が「王族」である所以だ。これゆえに、「銀の王族」は、その生命を幸福に全うすべき義務を持ち、そのようにラズーンは取り計らう...』

声は老人の穏やかさと青年の熱意をもって囁いた後、疲れたように調子を落とし、再び物柔らかな問いを投げた。

『だが、人の子よ、なぜにそなたは、それほどまでに悲しい?』

風が草原を撫でていった。ユーノにまわりつき、ユーノの想いを引き出そうとするかのように、そこにたゆとう。

(.....)

ユーノは淡く苦笑を浮かべて応えなかった。

一言で応えられる想いではない。一言で応えられるほどこなれてはいない。

それこそ未来永劫抱えしのいでいかななくてはならない想いだろう、ただそれを深く自覚した。

草が、まわりつくレスファートのようにユーノの脚に絡み付いてくる。

『.....げぬか?』

ユーノの沈黙に、声はふいに問いかけてきた。

(え?)

『そなたの幸福を妨げぬか?』

(何のことだ)

ユーノは目に見えぬ相手の気配を追った。

深い、星明かりさえない夜の草原で、声はしばらくためらい、やがてことばを継いだ。

『若い草猫達が、王を欲しがっている。我々の心をまとめあげる王を。そなたの一番若い連れが危ない』

「レス!」

はっとして。ユーノは叫んで飛び起きた。

同時に習性で剣を掴んでとっさに振り返ったユーノの目に、闇色の空を背景に揺れるプラチナブロードが映った。

立っても草に埋もれるはずの、レスファートの頭だ。

「レス!!」

ユーノは声を張り上げた。

凄まじい早さで何者かに運ばれつつある小柄な姿が、微かに身動きしてこちらを振り向く。

相手は顔に草色の仮面をつけていた。

だが、その目の部分から、紛れもないレスファートのアクアマリンの瞳が、今まで見たこともない激しい色をたたえ、輝きながら覗いている。

「戻るんだ、レス!」

叫ぶユーノに何もことばを返さないまま、レスファートは背中を向けた。より一層速度を上げて、みるみる遠ざかっていく。

「く、そっ!」

後を追って走り出したユーノは、突然何かを嫌というほど蹴飛ばした。

「いてえっ!!!」

「わうっ!」

もんどりうって転がったユーノを、形相物凄く、火の番をしていたはずのイルファが睨みつける。

「てめえ...っ」

「ごめんよっ、でも、レスが!」

叫んで立ち上がるユーノの肩にがっしりとイルファの手がかかり、軽々引き戻された。

「何を寝惚けてやがる!! いきなり飛び起きたかと思うと走り出して、人の足を蹴飛ばしやがって!!!」

怒鳴られて、ユーノはレスファートが眠っていた場所に目をやり、呆気にとられた。

「夢……？」

半信半疑ながらほっと安堵の吐息をついたユーノは、今度はアシャが居ないのに気づいた。

「アシャは？」

「用足しだろ。さっき立っていったぞ？」

「ふう…ん」

一瞬妙な胸騒ぎがしたが、無視してレスファートに屈み込み、目元にかかってうるさそうな髪の毛を払ってやろうと指を伸ばしてぎくりとした。

「え…？」

まさか。

だって、こんなに顔色もいいし、苦しそうでもない、のに。

普通なら一気に血の気が引くところだろうに、困惑と不審に視界が揺れる。

「どうした？」

のんびり尋ねてくるイルファを振り向いて、ユーノは混乱したまま口走った。

「レスが息をしていない」

アシャがサマルカンドの羽音に気付いたのは、ユーノが寝入ってしばらくしてからだった。

「どこ行くんだ？」

「ちょっと、な」

「ああ」

火の番のイルファが男同士で何を恥ずかしがるんだ、と不穏な台詞をつぶやくのに苦笑して背中を向け、草の波の中に入り込んでいく。

ユーノの守護として付けたサマルカンドだが、もともとの仕事の時はそちらを優先させている。

(それに今は俺が居る)

アシャがユーノの側に居る限り、二度とゼランに傷つけられたような酷い目にあわせるつもりはない。強行されるなら、封じている力を使ってでも敵を仕留める腹を決めている。

(そうしたらいつかは)

アシャに心を許してくれるだろうか。今夜みたいにはっきりわかる距離を取らずに、体の側に剣を置かずに、アシャの腕の中で眠ってくれるだろうか。

(ユーノ)

眠りに落ちたユーノの唇が微かに開くのを見ていると気持ちが揺れる。吐息を耳元で聞きたいという立ちが募る。

(どうなってるんだ、ほんとうに)

これほど身動きできないほど一人の人間に執着したのは覚えている限り初めてで、しかもそれを正面切って認めてしまったら楽になれるかと思っていたのに、日毎夜毎に募るばかりで。

(これが恋、なのか)

体を交わらせることもなく、触れ合うことすらなく、甘い睦言を囁くわけでもなく、ただ日々を一緒に過ごすだけなのに、その光景の中からユーノが失われるかもしれない『明日』を思うと、凍るような冷やかな怒りが腹の底にしこり出す。

失うぐらいなら、今すぐに。

「……」

歩きながらぐしゃぐしゃと頭を片手で掻きむしった。唇を尖らせ眉を寄せる。危うい光を宿しただろう目を閉じて、歯を固く食いしばった、でないと呼んでしまいそうになる、ユーノ、と。

「はあ…」

情けない。

アシャともあろうものが。

「クウ」

高空で微かな声が響いて顔を上げる。ほぼ真上にサマルカンドの白い姿が浮かんでいる。クフィラは夜でも視力を失わない。それゆえにこうして伝令に使われたこともあるのだ、昔は。

「サマル」

低い声をかけて、アシャは左腕を差し伸べる。巻いた革の籠手の上へ、白いクフィラは体重を消して舞い降りてくる。

「クウア…」

長い旅に、主人に甘えるように嘴をアシャの髪に掠らせる。

「よしよし、ごくろうだった」

その背中を軽く撫で、アシャはクフィラの足に巻いた通信筒に触れた。その中から、白くて光沢のある、指一関節ほどの長さの筒を抜き取り、懐から出したもっと細い黒い棒を差し込んでから先端をこめかみに当てる。

ラズーンへ問い合わせた危険地域の最新リストだった。

ユーノ一人ならまだしも、今はイルファ、レスファートという目立つ二人を連れている。『運命(リメイン)』側の標的になるのもそう遠くないだろう。ユーノの性分では、この先どんな厄介事に飛び込むと言いつくすか知れたものではないが、それまでに少しでも距離を稼いでおきたい。

目を閉じて流れ込む情報に集中していたアシャは突然かつと目を見開いた。

「しまった！」

小さく吐いて苛つきながら残りを聞き終え、サマルカンドの通信筒に戻し、一声叫んでクフィラを放つ。

「ラズーンへ戻れ！」

「クエアツ!!!」

主のただならぬ緊張を感じ取ったのだろう、クフィラは猛々しい叫びを上げて、投擲された石のうに一筋に高く風を掴んで夜空に舞い上がっていく。

「ちいっ」

身を翻したアシャは舌打ちして走り出す。>

サマルカンドが伝えてくれた危険地域、それはラズーンの支配下（ロダ）を離れコントロールがきかなくなった場所を示す。それはすなわち、既に破壊と戦乱が覆い始めている場所だという意味、その危険地域のリストに、ネークの草原が入っていたのだ。

予想を遥かに越えた『運命（リマイン）』進行速度は、やはり今回の200年祭が常のものではないと教えてくる。

（間に合うか？）

ユーノの所へ戻ることもそうだが、ラズーンへ辿り着いた時、そこにユーノを受け取る設備は残されているのだろうか。もし破壊されてしまっていたら、それこそセレドに戻ることにすら難しくなる。

とにかく今はできる限りの警戒をしつつ、ここから急ぎ離れるしかない。

アシャの頭の中に様々な行程が一気に広がり、それぞれの利点欠点が計算され始める。

ネークの草原は広い。どこをどう抜けるにしても、ラズーンへの旅程が遅れてしまう。

燃え上がる炎を目標に戻ると、その側で人影が慌ただしく動くのが見えた。剣を掴んだ小柄な姿がひらりと馬に跨がる。荒々しい嘶きはヒストのもの、そう気付いて思わず叫ぶ。

「ユーノ！」

また一人でどこへ行こうと言うのか。

「アシャ！」

声に、今しも走り出そうとしていたヒストが手綱を絞られて猛ったが、ユーノはしっかり御したままアシャを待った。

「どうした」

「レスがおかしい」

ユーノの顔色は青い。

「息をしないし、目も覚まさない。けど、体は温かいし、うまく言えないけど、死んじゃいない」

普通ならたじろいで口ごもるところを、ユーノはあっさり言い放った。焚き火の炎に照らされて、きらきらとユーノの黒い瞳が燃え上がっている。

「ボクとレスが繋がっているせいかもしれないけど、レスが草猫達に攫われる夢を見た」

一瞬唇を嚙む。

「アシャ、草猫達の巣はどこだ？」

「草原の端に」

アシャは自分もすぐに馬を引き出した。ユーノが拒む間を与えずに、さっさと跨がって振り返る。
(置いていかれるのはごめんだ)

アシャの神経のまずい部分を目覚めさせてしまう、ユーノを失う不安と恐怖で。

「草猫達の住処だという古い砦の跡がある。そこかもしれない」

「そこに決まってる」

ユーノは決めつけてイルファを振り向いた。

「レスの体を頼む」

「え、あ」

「アシャ！ そこへ行く！」

「おう！」

呼ばれて微かに胸が躍る自分をくすぐったく感じたが、事態は笑っていられるものではない。

「お、おい！」

イルファがうろたえた声を上げてきよろきよろとレスとアシャを見比べるが、ユーノはもう馬を駆け立て走り出し始めている。

「ったく、逡巡ぐらいしてくれ」

知らない土地なんだぞ。

舌打ちしながら後を追って馬を煽ったアシャの背中から、

「俺は子守りかよ！」

イルファが情けない声を上げた。

「アシャの方が適任だろうが!!」

「お前は場所を知らないだろう！」

「う、……く、そーっつ!!!」

俺だってなあ、出るところへ出ればちゃんとした剣士なんだぞ、わかってんのか、お前ら——っつ！
イルファの絶叫は虚しく草原に響いて消えた。

普段でも扱いにくいヒストは、波打つ草に苛立つように猛っている。その背中にひたりと身を寄せ、風の抵抗をできるだけ受けないように走らせるユーノは、みるみる追い付いてきたアシャを視界の端に捉えて少しほっとした。

「ちっ」

(何を甘えている)

自分の温さに気付いて舌打ちしたが、

「ユーノ！」

「ああ！」

鋭い声が前方を見るように促してまっすぐに視線を前に向ける。

今二人の目の前に、蛍火のような青白い篝火を数カ所灯らせた、小さな石造りの砦が見え始めていた。

平原からやや奥まった、岩と岩が互いの肩を寄せあうような窪地に焦茶色に湿った岩盤を基底部として、黒い岩を積み上げた砦だ。

小高い物見台は既に崩れ、外壁は形もない土塊と化している。薄暗い口をあちこちぼっかり開けた砦は、かつての熱気溢れる人間達の動きの変わりに、不思議な気配で満たされている。

(！)

突然殺気を感じて手綱を引き絞ったユーノは、棒立ちになったヒストにかろうじてしがみついた。ほぼ同時に地響きがして、少し先の地面に青白い炎が降り落ち、ぎよっとする。

それは燃える岩の塊だった。

ぼふぼふと煙と火を吐きながら岩は草の間で光り輝いている。きな臭いにおいが広がり、ヒストが不愉快そうに嘶く。

すぐに続いてもう一つ、空気を切る重い気配が降ってきた。真側に落ちて白煙を上げ、とっさにユーノの側に駆け込んできたアシャも馬を操り、落ちてきた岩から後退する。

もう一つ、今度はもっと間近に降ってきた。だが直接こちらは狙わない。

荒い鼻息になっていきりたつヒストを宥めて静まらせ、距離をとって背後に引きながら、ユーノはじつと砦を注視した。

当たれば確実に致命傷を与えるだろう攻撃を、相手はユーノ達に向けてこない。

(近付くな、か)

警告なのだ。

黒い岩の砦の間に、いつの間にか幾匹かの獣の姿が浮かび上がっていた。

見ている間に一匹、二匹と青白い篝火に影を波打たせながら、数が増えていく。

子どもなら軽々と背中に乗せて運べそうな薄緑色の体躯の四つ足、猫のようにしなやかな動きで砦のあちこちから忍び出てきて、こちらを輝く緑の瞳で見つめてくる。体の表面は指の幅ぐらゐの剣型になった平らな皮のようなものが重なりあって、くねらせて攻撃的に上げている尻尾までを滑らかに覆っている。

やがてその中から、気力の張り詰めた一際明るく輝く瞳の獣が一匹、ゆっくりと尾を中空に翻らせた。緊張を走らせたそれが一瞬ぴんと伸びたかと思うと、微かに震え出すと、音とも振動ともつかぬ響きが周囲を満たした。

『フレ……ラハ……オウヲヒ……ツヨ……ウトシ……テイル』

強くなったり弱くなったりするうねりがよく聞き取れない。

「アシャ」

「草猫達だ」

じっと相手を見つめながら問いかけたユーノに、アシャの声が低く応じた。

「.....馬を降りよう」

「なぜだ」

「確信はない、けど」

答えながらユーノは草猫達を刺激しないようにゆっくりとヒストから滑り降りる。

「レスファートが攫われる夢で、草に触れていると誰かの声が聞こえた」

「.....確かに草猫達は草原の草を通じて意志を伝えることができるとは聞く」

溜め息まじりにアシャがつぶやいて、するりと同じように馬から降りるのがわかった。

「だが、逆に捕われる可能性もあるぞ？」

「でも、このままじゃ、レスを返してくれそうにない」

言い切ると、そうだな、とアシャが苦笑しながら近寄ってきた。体温が空気を介して伝わるようで、ユーノは気持ちが強くなるのを感じる。

(側にアシャが居る)

一瞬目を伏せ、ヒストを待機させて、ゆっくりと草猫達の方へ歩み出した。すぐにアシャが背中を守るように寄り添ってくる。草猫達の尾が急に激しくうねり出す。緑の瞳は明滅する星のよう、警戒心がきりきりと大気を絞りに絞りに上げていく。

ごうっ.....どすっ。

「！」

うなりを上げて、青白い光球がユーノの耳元を掠めて背後に落ちた。一瞬アシャが巻き込まれたかとひやりとするが、軽く避けた気配、続いて幾つも流星群のように注ぎ始めた光球に身動き取れなくなって、思わずアシャを振り返った。

草原の緑と夜空の濃紺、ちらつく蒼炎になお暗く深い黒の砦、世界が寒色のみで構成されている中で、周囲を裂く光球の間を縫うように歩を進めたアシャが真横に並んでくる。整った横顔には煌めく紫の瞳と薄紅に染まった唇、僅かに紅潮した頬に乱れる黄金色の髪、その艶やかさに命を感じ取って、ユーノは深く息をつく。

(一人じゃない)

そうだ、夢の中のように、たった一人、屠られる瞬間を従容と待たなくていい。

(ならば)

何を疎むことがある、何を恐れることがある。

倒れても今ならアシャの側だ。

うなずいてユーノは光球の途切れた隙に足を伸ばした。ぎくりとしたようにアシャが振り向くのに薄く笑って、なおも前へと進む。

「ユーノ...っ」

焦れたような声でアシャが呻いた。掠れた響きが妙に妖しい。

「...待て」

引き止める声をもっと聞きたい。

闇の魔性に煽られたかと自嘲しながら、ユーノはくすりと笑ってなお一歩足を伸ばす。

ごうっ.....ひゅうっ.....どすっ、どすどすっ。

見る見るあたりは昼間のように燃え上がる光球で明るく輝く。がしかし、次の瞬間、周囲の草がざ

わめいて、まるで二人を絡め取るかのように両足に倒れ押し寄せてきた。

「んっ」

足を抱え込みまとりつき、密度を増しながら固定しようとするようだ。

さすがにこのまま狙われるとまともに光球の餌食になる、そうユーノが緊張した矢先、さきほどの

草猫が再びこちらを見据えながら、立てた尾を激しく震わせた。

『我らは王を必要としている』

「アシャ」

「ああ」

草猫の尾の震えが強まるに従って、共振するように腰から下を包み込んだ剣型の草が、鋭い傷みと

ともに波立ち突き立ちながら蠢く。同時に朗々とした声が脳の奥底から響き渡ってきた。

『我らはネークの草猫として、我らの王を欲している』

光球が降り注ぐのが止まった。

「王はラズーンではないのか」

アシャの問いに、草猫は深い哀しみの色を瞳にたたえた。鮮やかに光を放っていた眼が曇るように

色を薄めて、淡い黄緑色に滲んでいく。

『ラズーンは我らを見放した』

色を薄めて逆になお大きく見開いた瞳で、草猫は訴えた。

『ラズーンの視察官（オペ）の存在も感じぬ。ラズーンは我らを治めるのを放棄したのだ。よって、

我らは新たなる王を必要とする』

「誰がそんなことを」

アシャが尋ねた。

「ラズーンは統治を放棄などしていない」

「...」

ときどきそうだ、アシャはまるでラズーンを知っているかのように振る舞うことがある。
(それもこの世界を治める存在とごく身近に居たように)

確かにアシャは旅人だ。けれど、ラズーンを旅してセレドまで来たような旅人の話は聞いたことがない。世界はそれほど狭いものではないはず、ましてやアシャのような若さでラズーンのことを語れるなど。

(希代の詐欺師か、誇大妄想の愚かな男か)

だが、アシャはそのどちらでもない。

(だとしたら)

ありえない、けれど全く別の一つの可能性は。

ラズーンの神、とは如何なる存在か。

それはひょっとすると、人離れした美しさを持ち、数々の才能と経験を貯え、しかも不老不死、だったりする、のか？

(そうであってほしくない)

万が一アシャがそんな存在だとしたら、レアナの想いなど意味がなくなってしまう。セレドを託すことなど、不敬でしかない。

「違うよ」

「！」

ふいに聞き覚えのある幼い声が、聞いたことのない不遜な調子で響いてユーノは我に返った。

「レス！」

ユーノの低くて鋭い声が草原を渡る。

群れをなしてアシャ達を見つめる草猫達の後ろから、小柄な姿が浮かび上がって前に立つ草猫の隣に並んだ。

まるで夢を見ているように、熱に浮かされた表情をたたえたアクアマリンの瞳がぎらついている。いつも聡明な気配で引き締まっていた唇が半端に弛んで、年齢に不似合いな蠱惑的な微笑が浮かんでいる。

「彼らは一人なんだよ」

どこか遠い声でレスファートは言った。

幼いレスファートには決して出せない、深々と響く自信に満ちた声音だった。

「彼らは迷っているの。ぼくの心に話しかけたの。寂しいって。主人がいなくなったって。ぼくなら、彼らの心を読めるから、彼らの王にふさわしい」

平板ではっきりとした、なのに舌足らずなことば遣い、自分の意志ではない何かに操られているのに気付かない熱に輝く瞳に、ユーノがレス、と小さくつぶやいて身を竦めた。

「心を読めるのを逆に使われたんだ」

びく、とユーノが怯えた顔でこちらを見るのをまっすぐ見返す。

「ラズーン支配が届かなくても、ラズーンが統治を放棄したわけじゃないのに、草猫達にはわかっていない」

「...」

アシャがことばに含めた謎を読み取ったのだろう、何か問いたげに開いたユーノの唇、だが続くはずの問いは無理矢理逸らされ置き換えられる。

「このままだと.....レスはどうなる？」

単純な問いかけの形をとったそれを、アシャは苦笑で迎えた。

あまり人間に知られていないはずの草猫の生態をわかっていなければ応えられぬ問い、それに答えを持つことはアシャが特殊な立場にあること、単なる旅人ではないことを証明すると知っている。

(頭がいい)

苦笑いを広げながら、アシャは答える。

そうだ、もちろん、アシャはその知識を備えている。

「.....草猫は草を常食にしている。しかし、レスが草以外の食事を必要としているのはわかっていないに違いない」

「じゃあ、レスは...」

それでもユーノはアシャに追及を向けなかった。気遣わしげに見やる視線の先には、草色の仮面をつけたままプラチナブロンドを風になびかせ不安定に揺れているレスファートの体、寄り添うような若い草猫を睨みつけたまま、問いかけて、口を嚙む。

「あの興奮状態が続いている限り、体力の衰えはわからないだろう。倒れるまで草猫達の熱に魅せられたままネークの草原を歩み続けることになる」

淡々としたアシャの答えに、唇を引き締めたユーノが絡みつく草を引きちぎるように無理矢理一歩、草猫達の方に歩み出す。はっとしたアシャがユーノの側へ歩み寄ろうとする、それと同時にレスファートが片手を上げて無造作に振り降ろした。

「ユーノ！」

「、っっ！」

さきほどからの光球が、またひとしきりユーノの周囲に降り注ぐ。

とっさに伸ばした指先を掠め、ユーノの髪の毛を焼きそうな近さに落ちたそれに、一瞬ざわりと体の内側が身震いして、アシャはぎょっとして目を見開き、動きを止めた。

コロシテヤル。

(馬鹿、な)

身内に走ったのはいつか味わった凶暴な衝動、ユーノを傷つけようとした相手に容赦なく牙を剥きそうな野獣の気配を感じ取って、歯を食いしばり踏み止まる。

(なぜ、これぐらいで)

今にも目覚めそうな状態になってしまうのか。

「ユ、ーノ！」

近付き守りたいのに近付けない、その苛立ちに叫ぶと、

「大、丈夫...っ」

火球に焼かれる恐怖よりもなおレスファートが心配なのだろう、体を前にのめらせながらユーノが草猫達を睨んでいる。

普段なら考えもしない、むしろそんなことを考えた自分を責めさいなむだろうに、ユーノを光球で狙わせたということに今何も感じていないらしいレスファートが、まるで夢うつつのようににっこり笑う。側に居た草猫が、にやりと笑うように目を細める。

「！」

そうか。アシャは気付く。

「『運命（リメイン）』だ」

「『運命（リメイン）』？」

怪訝そうにアシャを振り返ったユーノに、舌打ちしながら唸る。

「ラズーン支配下（ロダ）から外れているってわかった時に、考えておくべきだったな」

草猫達の不安と滅亡への恐怖に付け込んで、『運命（リメイン）』があの先頭の草猫を乗っ取り、周囲を煽ったのだ。ただでさえ、ユーノの安全が脅かされていることで落ち着かなくなっているところに、その『運命（リメイン）』の攻撃が『銀の王族』に向かった、それを感じてアシャの中にある視察官（オペ）の感覚が臨戦体勢になっているのだろう。

(だが、これは)

まずい。

この二重の不安、ユーノが危険に晒されているだけでなく、相手がユーノの守りたい相手大切な相手であるという状況は、否応なくアシャにゼランがもたらした傷みを思い起こさせる。また同じように手の出せない部分でアシャの腕をすり抜けて死に至るような怪我を受け入れてしまうのではないかという恐怖を。

(だから、俺は)

今にも限界を破りそうな怒りに冒されているのか。

「ふ、う」

落ち着け、今はまだ力を放つな。

自分に言い聞かせながら、必死に堪えるアシャの目の前で、降り注いだ光球が一旦おさまる。

こちらを傷つけようというのではなく、あくまで手出しをさせないための脅し、それを裏付けるように、

「ユーノ」

打って変わって柔らかな優しい声で、瞳を潤ませながらレスファートが呼び掛けてきた。

「もういいよ……ぼくをおいてって」

「レス！」

「ぼくは……ぼくはここで草猫達といっしょにいる……だって……ぼくは」

先頭の草猫の背中にすがるように小さな手を乗せて、レスファートは儂く笑う。

「ぼくは……ユーノのやくにたたない…」

「……っ」

その手の白い包帯、それを見たたん、ユーノがぐっと唇を噛み締めた。ためらいを振り切るように、いきなりユーノが差し伸べた両手にレスファートがびくりとする。

「レス！」

それは求愛、大切な相手を求める激しい動作、レスファートが体を硬直させて笑みを強ばらせる。

「レス！」

「…こないで、ぼくは草猫達の王になる、んだ」

「でも、レス！」

「こな、い」

「私が、嫌い？」

「！」

突然の問いかけにレスファートが目を見開く。

「私なんか、嫌い？」

「あ…う」

ゆらゆらと首を横に振ったレスファートが一步引き下がる。ユーノがもっと強く両手を差し出して一步詰め寄る。光球は飛んでこない。レスファートの隣に居た草猫が叱咤するようにレスファートを見上げる。

「私が嫌いだから、旅を続けたくないから、側に居たくないから、離れるの？」

「ち、がう…」

レスファートはまた一步後ずさり、ユーノはまた一步前へ進み。苛立ったように体を振る草猫をアシャは凝視する、視線で相手の心臓を貫ければいいと願いつつ。

「怪我するから？ 怖いことばかりだから？ 楽しいことなんて一つもないから？」

「ちが…う……っ」

ユーノはわかっているレスファートを追い詰める。何が何でもレスファートを取り返す、その強い意志が空気を満たし、闇を駆けて、レスファートの眠っている心の奥底に届いていくのがわかる。

「レス…？」

絶妙の間合いでユーノは立ち止まった。両手を広げたまま、そっと静かに呼び掛ける。

「戻ってきて」

「ゆー…の…」

ふらりと引き寄せられるようにレスファートがユーノの方へ歩み寄る。それを見咎めて、草猫が回り込み、尾を震わせ、レスファートに話しかける。

『王よ、我らが王よ、どうして、あんな者の言うことに耳を貸される？』

「……」

ぼんやりと見下ろすレスファートにここぞとばかりに意志を伝える。

『あんなみっともない、傷だらけで粗忽で不作法な女のたわごと』

「あ…」

やりやがった。

アシャは先の展開を瞬時に理解して体の力を抜いた。

ことばを聞いたとたん動きを止めたレスファートが、おもむろに包帯の巻かれた手で草色の仮面をむしり取る。

『王よ！』

「なんていった？」

冷やかな声が響く。

アシャは思わず溜め息をつく。草猫達の致命的な間違い、それはレスファートがなぜ自分達の王となろうとしたのか、理解していなかったことにある。

(もう、大丈夫だな)

レスファートが草猫に降りようと決心したのは、おそらく自分がユーノにとって足手纏いにしかない、それぐらいならばという切ない祈りだったのだろうから。

「ユーノのことを、ひどくいったね」

ばさりと草原に落とされた草色の仮面を見下ろしたレスファートの顔が、一瞬それこそ王者以外の何ものでもない傲慢なほどの意志に引き締まる。

「ぼくの、ユーノを」

『しかし、王……王！』

「どうしてぼくをとめるの？」

ことばは一気に幼くなったが、内容は格段に強くしたたかになった。じろりと睨んだアクアマリン

の目は、次には縦ぶような歡喜に満ちてユーノに向けられる。

「ユーノ！」

『、王……っ』

「レス！」

脚を傷つける草も何のその、草波を押し分けながらレスファートがあつという間に走り寄ってきてユーノの広げた腕の中に飛び込み、しがみつく。

「ユーノ！ ごめん……ぼく…ユーノお！」

「レス！」

まるで引き離されていた恋人同士のようにお互いを強く抱き締めあう二人に、草猫達は茫然と竦んで見守っている。

「……いい性格してるよな、さすが王子様育ち」

思わずぼやきながら、アシャは二人を庇う位置に立ち塞がった。

レスファートを失うと気付いてざわめきながらじりじりと近寄ってくる草猫達、砦のあちこちから次々に姿を現し数が増えていく。

「おい、いい加減にして早く行け！」

「アシャっ」

「大人には大人の」

始末があるんだ。

ぼそりと唸ると、微妙な顔になったユーノがきよんとしたレスファートを抱えて急いで馬に跨がる。

「でも、『運命（リマイン）』相手ならっ」

不安そうに叫ぶユーノを肩越しに見上げる。胸に抱えられたレスファートも、今回は突っ込みもなく大人しくしている。

「アシャー人じゃまずいよ！」

アシャの正体を知ってしまえば、こんな状況で心配するはずがない。こんな無害な連中に何ができるとあっさり離れて

いくのだろうか。

「……それまでは甘えるか」

「え？」

「ユーノ」

見下ろす相手の黒い瞳の優しさに満足している自分が馬鹿馬鹿しくなるほど甘い、が。

「無事を祈ってくれ？」

「祈るより、私は！」

「レスファートをちゃんと連れ帰るのが先だろ」

「っ」

軽く目をつぶって見せるとぎくりとした相手に笑って付け加える。

「大丈夫だ、すぐに戻る」

「う、ん、わかった！」

一瞬泣きそうな顔になったユーノが一気に身を翻して駆け去っていくのを惚れ惚れと眺めた。

「…いいものだな」

心配されて案じられて、自分の無事を願ってくれる熱くて柔らかな心の味は極上。

「レスの気持ちがわかる」

俺もずいぶんお子さまだ、と苦笑したところで背後から陰鬱な声が響いた。

『ジャマ………ヲ……シテ…』

「どちらがだ」

片手をゆっくりと上げると、既に粉のような密度を持った金の靄がそれを取り巻きつつあった。

「草猫達の想いを利用したくせに」

掌から手首、腕、肩、胸から腹、やがて全身へと金色の光がまとわりつきながら広がっていくのに、草猫達が一齐に尾を震わせた。

『オ...ペだ...』

『オペ』

先頭に立っていた草猫がじりじりと下がっていく。『運命（リメイン）』本体ならまだしも、操りの影だけを宿した骸では相手にもならないとわかっている。がく、がくがく、と不安定に脚を崩れさせつつ後退するのにゆっくり歩み寄っていくと、周囲の草猫達が逆に歓迎するように取り囲んでくる。『「運命（リメイン）」は封じられない.....視察官（オペ）にその権限はない.....「統合者」ではない』

「どうかな」

アシャは、『統合者』ということばに鬱陶しく眉を寄せた。

「俺は.....特別製だからな」

『視察官（オペ）に、運命（リメイン）を裁く権利はない.....』

「だが、『銀の王族』を守る義務はある」

眩いほどに黄金色の光が満ちた掌を差し上げていく。

それを見上げた草猫達が次々と尾を震わせる。

『では、オペよ、ラズーンは我らを見捨てていないと』

『では何ゆえ、ここに「運命（リメイン）」が至る』

『何ゆえ、見捨てられ荒れ果てていく』

『支配下（ロダ）は選別されているのか、繁栄を得るものと、闇に吞まれ滅びるものと』

『オペよ、我らはただ』

生きたかっただけだ。

『それほど不相応な望みなのか』

アシャは静かに目を閉じる。

指先から掌から溢れ出す金色の光がどれほどの力を持つものか、知っている者はもう皆この世界にはいない。

ぎゃ、あ、と掠れた悲鳴を上げて、間近に居た『運命（リメイン）』の影となった草猫がぞぶぞぶ崩れる音がした。だが、大半の草猫は逃げもしない、怯えもしない、ただ草原を満ちし、溢れ、広がっていく金色の海の中に浸っていく我が身に従容と声を潜めていく。

「視察官（オペ）の任として、この地を留める.....アシャの名のもとに」

自分の声が重くうねる。祈りのように言えればいいと思いつつ、それはいつも死の宣告にしか過ぎないのだが。

アシャ。

アシャだ。

あの、ラズーンの御方、アシャ.....だ。

アシャが我らの地におられたのか。

そしてアシャの手で我らは封じられるのか。

ならば。

ざわめく草猫達が喜ぶ声にアシャは目を開けて顔を歪める。

今や草原は黄金の空間と化し波打ち煌めいている。波に沈む草猫達の姿が解けていき、やがて海と一つとなり、そして緩やかに波は高さを減らし、地面に水が吸われていくようにアシャの掌の内側へ消えていく。

微かに響く、吐息のような優しい囁き。

『ラズーンよ.....』

永遠なれ。

りいん、と遠く小さな鈴が転がるように。

「.....そうであれば、よかったのに、な」

掌の中で零れた掠れた声に囁き返し、アシャはそれさえも封じるように強くきつく手を握り締める。

「永遠であれば.....よかったんだ」

つぶやいて、俯き、齒を食いしぼる。

「みんな、そう望んでいたんだ」

自分の声が幼いのに気付いている。

「でも」

それは、間違った道だ。

吐き捨てたことばの本当の意味を知るのは、ただ『太皇（スーグ）』のみ。

ラズーンを続べ、世界を制御する、唯一の王のみ。

もう、ネークで草猫が噂になることはないだろう。

静まり返り、生き物の気配一つしなくなった草の中で、アシャは俯いたまま立ち竦んだ。

「ユーノ！ レスファート！」

蹄の音を聞き付けて、イルファが火の側から立ち上がった。

軽く息をきらせながら、ユーノは馬から降りてレスファートを抱え降ろす。

「え...レス？」

ぎよつとした顔でイルファが焚き火の側で眠っていたレスファートを振り返ると、そこに居たレスファートの姿が陽炎のようにゆらゆらと揺らめきながら消えていくところだった。それはやがて薄緑色のしなやかな体躯を持った獣に変わる。

「な、何だ??」

イルファが少し身を引しながら声を上げた。

「草猫だよ。レスに化けていたんだ」

「眠っているのか? いや.....凍りついているようだぞ」

ユーノの声におそろおそろ近寄ってみる。

「ぼく、わかるよ」

ユーノの腕から離れたレスファートが草猫に近寄り、いとしむようにそっとその体に触れた。優しい手付きでびくりとも動かない体を頭から背中へ向けて撫でてやる。

「長い.....長いゆめを見てたの。草猫たちの王国がさかえて、やがてほろびたの。金色の波がよせてきて、みんなぜんぶ.....流していつてしまったの」

レスファートの瞳に涙の粒が膨れ上がる。

「それでもこの世界にいたくて、へっていくなかまを、もううしないたくなくて」

少年の姿を模していた草猫が、レスファートの掌の下からみるみる輪郭をぼやけさせて、草の中へ溶け落ちていく。行き場をなくしたレスファートの指先が空に浮いて、ついには何も触れなくなる。

「かなしくて...それで...ぼくをよんだ...」

レスファートは指を止める。ユーノを振り仰いだ瞳から、きらきりと焚き火の光を跳ねて涙が零れ落ちた。

「でもぼく.....王様にはなれなかった.....だって...ユーノが.....すきで」

頬を伝う涙を堪えようとするように、小さな唇が噛み締められる。

「レス...」

「草猫たちより、ユーノをえらんだ.....ぼく.....」

首を傾げる。

「悪いこと...したんでしょ...?」

「そ、そんなことはない」

イルファがおろおろした声で否定する。

「そんな身勝手な願いなど、叶える必要は」

「でも.....ぼくがこたえなければ.....」

草猫たち、ちゃんとあきらめ、ついたよね?

「レス」

ユーノはそっと腕を広げて背中から少年を抱きかかえる。

「レスはまだ小さいんだ」

深く頭を下げて震える髪に唇を当て、慰める。

「誰かの運命を背負うことは、大人にだって難しいよ」

「でも...」

ひくっ、とレスファートはしゃくりあげながら、ユーノの腕を抱えて背中を強く押し付けてきた。

「ぼく」
できると思ったんだ。
できると思ったのに、できなかった。
「.....ぼく.....」
なんで、こんなに小さいんだろう。
「おおきく、なりたい」
だれかのうんめいをせおえるぐらいに。
「レス」
胸が詰まってユーノはレスファートを抱く腕に力を込める。
「十分だよ」
囁いたことばが自分の胸の奥に響く。
「十分頑張ってるから」
きっとユーノだってそう言って欲しかった、自分の無力に疎むたび。
「十分にボクを助けてくれる」
「.....ユーノを？」
「うん」
レスファートが居てくれて、ボクはどれだけ諦めないでいられるだろう、とユーノは続けた。
「もうだめだと思っても、レスが居ると思うと、まだ大丈夫だって思えるよ？」
「だいじょうぶって？」
「そうだよ」
だからレスはボクの最後の砦みたいなものだよ。
ユーノは静かにレスファートの体を揺すった。宥めるように慰めるように。
「最後の砦を失ったら、ボクは大怪我しちゃうんだけど？」
「.....いや」
ぞっとしたようにレスファートが体を震わせる。
「そんなのいやだ」
「ボクもいやだ」
だから、レス、ボクをちゃんと支えていてね？
「...うん.....」
ほっとしたようにうなずいて、レスファートがぎゅっとユーノの腕を抱き直したとたん、イルファ
がひよいとを顔を上げた。
「アシャ！」
「.....終わったぞ」
はっとして振り返ったユーノの目に、闇の中から唐突にアシャが姿を現す。
「無事だったのか！」
「当たり前だ」
いそいそと近づくイルファに苦笑する顔は心なしか青い。
「もう、草猫達が悪さをする事はない」
「んなことはどうでもいい！」
イルファががぼりと両腕を広げ、今にも抱き締めてきそうに近づくのに、アシャがぎくりと立ち止
まる。
「俺はお前に何かあったかと心配で心配で！」
「嘘つけ」
「嘘などついてないぞ、今ほら、気持ちを行動で証明」
「しなくていい」
引きつった顔でイルファの腕を押し退けるようにユーノに近付いてきたアシャがレスファートの涙
に気づき、瞳を和らげる。
「レス？ 大丈夫か？」
「草猫.....やっつけちゃったの？」
「.....いや」
一瞬暗い影がアシャの顔を掠めた。
「当分大人しくしてほしいと説得してきた」
「なるほど、旅人というものは動物とも話せるようになるのか」
「...ならない」
わかったようにうなずくイルファにアシャが溜め息まじりに応じる。
「ああ、でも」
ユーノはその場の雰囲気巧みに逸らせようとするイルファの配慮を感じた。
「アシャならできそうだよ」
「だろ？」
「俺は何者だ」
突っ込み返して、なのに一瞬それはなぜかアシャにとって痛いところをついたらしい。ぴくりと顔を
引きつらせて、ああ、腹が減った、何か残ってるか、と火の側に腰を降ろした。
「あるぞ、ほら、ペク焼きの肉」
「.....食わん」

「じゃあぼくがたべる」

レスファートがユーノの腕から離れて手を伸ばした。

「じゃあ、俺ももうちょっと一緒に食うかあ」

心配したら腹が減ったからなあ。

笑うイルファに、イルファ、はたらいしていないのに、とレスファートが突っ込み、まあまあと二人で火の側で食事を始める。

それをどこか虚ろな顔で眺めていたアシャはしばらく黙って水を呑んでいたが、やがてイルファとレスがたらふく食べて、お互いくっつきあって眠りについてしまうと、深く重い溜め息をついた。

「.....アシャ？」

呼び掛けると、ん、と顔を上げたが、いつもは煌めくような紫に輝く瞳が、今は炎の光を吸い込む闇のように暗くて深い色に沈んでいる。

「何があったの」

「.....いや」

ひさびさに集団戦だったから疲れたんだろう。

つぶやく声が掠れてけだるそうだ。

「火の番、ボクがしてるから、ちょっと眠った方がいいよ」

「.....そうだな」

そうさせてもらおうか。

のそりと体を倒しかけたアシャがふいに動きを止めてユーノを見る。

「何？」

「.....もし、俺が」

「え...？」

「.....何でもない」

一瞬、泣き出しそうに幼い表情がアシャの顔を覆ってどきりとする。けれどそれは本当に幻のように消え去ってしまい、こちらをじっと見つめるアシャが何を思い付いたのか、くすりと悪戯っぽい笑みを零した。

「膝を貸してくれないか」

「は？」

「膝」

「ひざ.....って、ひざ、まくらしろってこと？」

「そうだ」

目一杯働いてきたからな、それぐらいは報いてくれてもいいだろう。

「う」

「それとも何か」

このまま俺が疲労困憊した上、冷たい地面に独りで眠って、なお疲弊して体調を崩して、そういうところにカザドや『運命（リメイン）』や太古生物の襲撃があって、

「わかった」

つまり勇者を労れ、ということだな？

ユーノが確かめると、にやりと笑ってそうだ、と応じる。

「結構性格悪いよね？」

「まあいろいろあったからな」

拗ねたくもなる。

ぼそりとつぶやいたアシャが、ユーノが脚を揃える間もなく頭を載せてきて、慌てて脚の位置を定めた。

(うわ.....柔らかい)

膝に乱れる髪感触、広がってくる重みと温かみ、このままずっと見上げられたら、とても落ち着いて座ってはいられないだろう、そう思ったのが届いたのか、目を閉じたアシャはそれほど待つまでもなく寝息を立て始めて呆気に取られる。

「そんなに気持ちいいか？」

レアナの膝枕は経験している。いい匂いがして、ふんわりしてて温かで、確かにすぐに眠くなる。

けれどユーノの脚は固いし張り詰めてるしついでにでこぼこしてるしで、眠り心地がいいとはとても思えないのだけれど、そう考えつつアシャの寝顔を見下ろして、ふいに切なくなる。

誰の夢を見るんだろう？

旅の夢？ 今まであった美しい人の夢？ それとも、大切に遠いレアナの夢？

「.....匂い、か」

自分の腕を差し上げてくん、と嗅いでみだが、汗とほこりと青臭い草や薪や焼いた肉の匂いぐらいしかしていない。もっと何かいい匂いがしていたら、アシャの夢の中に欠片でも入ることができただろうか、そう思った矢先、

「ん...」

「っ、わ」

微かに唸ったアシャがいきなり向きを変え、ユーノの腰を抱えるように腕を回してきて、あやうく殴りつけるところだったのを必死に堪えた。

「こ...のお...」

満足そうに薄く唇を開いた間抜け顔に怒る気力が失せる。

「.....誰だと.....思ってるんだ？」

返ってくるのは寝息だけ。

「.....私じゃ.....ないよな...？」

その腕に抱えているつもりでいる相手の幻に、今だけ擦り変わっているのなら。

「.....いい、か...」

微笑んで、それでも視界がぼやりと滲んで慌てて空を見上げる。

「...あ...」

満天の星空。

静まり返った草原の上、深い紺のピロードの上に細かな銀砂、大粒の宝石がばらまかれて光っている。じっと見上げていると、膝を包む温かな感触と優しい吐息に、まるで自分がただ独りの愛しい人と寝床で夜空を見ているようにも思える。

「.....なんだよ、子供みたいに」

膝枕で寝たがって。

「何だよ、一体誰の身代わりに」

本当は。

本当は。

(私だからと)

もとめて、ほしかった。

(でもそれは)

「無理、だよな」

へへ、と小さく笑って落ちてきた熱いものを飲み下す。

それからそっとアシャの頭を撫でかけて。

「、っ」

ぎゅっと手を握りしめ、唇を強く引き結んで、ユーノは身動きせずに夜空を見上げ続けた。